



저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.



비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.



변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#)

博士學位論文

思考分野の和製漢語の研究

—中日漢語の意味の変遷を中心に—

濟州大學校 大學院

日語日文學科

李 悦 揚

2021年 8月

思考分野の和製漢語の研究

—中日漢語の意味の変遷を中心に—

指導教授 李 昌 益

李 悅 揚

이 論文을 文學 博士學位 論文으로 提出함

2021年 6月

李悅揚의 文學 博士學位 論文을 認准함

審査委員長	_____	Ⓜ
委 員	_____	Ⓜ

濟州大學校 大學院

2021 6月

<국문초록>

사고(思考) 분야의 일본제 한어(和製漢語)의 연구 -중일한어(中日漢語)의 의미 변천을 중심으로-

이 열 양

제주대학교 대학원 일어일문학과
지도교수 이 창 익

일본제 한어는 단어의 출처에 따라 일본에서 독자적으로 만든 순수 일본제 한어, 한자어에서 유래한 것, 불전에서 유래한 것 등 세 가지로 분류할 수 있다. 일본제 한어의 의미 변화는 이들 중에 어느 것과 연관되어 있는 지가 중요한 연구 과제였지만, 이들의 논고는 주로 일본제 한어의 체계적인 연구를 중심으로 한 것으로, 어사(語史) 연구의 입장에서 보면, 개개의 의미 변화에 초점을 맞춘 고찰은 적다.

이 논문은 에도막부 말기 이후의 일본제 한어를 연구 대상으로 하여, ‘단어의 의미 변천’의 관점에서 ‘사고’ 분야의 대표적인 신어인 「의식(意識)」, 「사상(思想)」, 「관념(觀念)」, 「인지(認知)」를 연구대상으로 하였다. 이 연구를 통하여 일본제 한어의 성격이 동일하지 않으며, 순수한 일본제 한어 외에 한적이나 불전에서 전해진 것도 있음을 증명하였다. 아울러 다중 성격과 단일 성격을 가진 일본제 한어가 형성된 역사적 과정과 그 원인을 논술하여 시대별 이문화 교류가어의 형성, 변화, 전파에 미친 영향 및 언어자체에 내재된 요인이 가져온 의미 변화 등을 밝혀냈다. 즉 어의 변화 분석에 그치지 않고 그 배경에 있는 문명·과학·제도 등의 변화를 고찰했다.

일본제 한어 「의식」이 한적(漢籍)·불전(佛典)·화적(和籍)이라는 삼중 성격을 갖게 된 것은, 일본이 중국, 인도, 서양의 문명을 수용했기 때문이다. 유교철학에서 무신론의 발전과 함께 ‘뛰어난 견해’를 의미하는 「의식」이 형성되었다. 언

어적 원인으로는 語의 의미 분야가 확대되거나 전환되어 원래의 의미에서 파생된 ‘생각하는 것’과 ‘깨닫는 것’이 19세기 문명개화에 따라 일본어에 도입된 한적계의 의미였다. 또한 인도의 불교철학의 선전에서, ‘육식·팔식의 하나’를 가리키는 「의식」이 생겨났고, 견당사·견수사 도입으로 불전계의 것이 일본어에 수용된 후 외적 원인, 서양문명의 융성으로 어의(語義)변화를 초래했다. 이는 서양으로부터 의학, 심리학, 철학이 일본에 들어왔을 때, 일본어에 없는 신 개념을 나타내기 위해 만든 의미 범위이다. 그 배경에 일본제 어의(和製語義)의 ‘내감각’, ‘어떤 대상을 눈치채고 있는 마음 상태’, ‘심리작용이 일어난 상태’의 탄생과 함께 「의식」이 일본제 한어가 되어 사용되기 시작했음을 밝혔다. 그리고 어의가 전이되어 ‘어떤 사회적 태도’가 ‘어떤 대상을 알아차린 마음 상태’로부터 분화되었고 신 개념으로서 급속히 자리를 잡았다.

「사상」이 일본제 한어가 되기 전, 기원전부터 ‘생각하다’는 의미를 뜻하는 것으로서 중의학(中醫學)이나 양생학(養生學)분야에서 사용했으며, 근세에서부터 품사 파생어의 변화로, ‘생각’을 의미하는 명사가 되었다. 19세기 서양자유주의 사조가 일본에 유입되면서 이 두 가지 의미를 가진 한적계의 「사상」이 일본어에 채용되고, 그와 동시에 서양철학사상을 보급하기 위해 ‘의식적 내용’이라는 개념이 「사상」에 부여되어 화적계의 원래의 의미로서 중요한 역할을 하고 있음을 밝혔다. ‘의식적 내용’으로 부터 파생한 일본제 어의의 언어적 원인으로는 어의의 확대나 중첩으로 ‘체계화된 의식’이나 ‘경향적인 의식’, ‘사고의 줄거리’가 탄생했다. 그리고 심리적 원인으로는 인간의 주관적인 판단·평가가 「사상」에 부여된 후, ‘도덕·품질에 관한 의식’이라는 어의가 형성되었음을 설명했다.

「관념」은 불교계·화적계의 이중적 성격을 가지는 것으로서, 불교문화의 수용이 일본 사회 및 일본어의 언어 체계에 미친 영향이 분명하다는 점을 확인했다. 「관념」은 최초로 ‘부처의 진리를 관찰하고 사념(思念)하는 것’을 의미하는 것으로, 불전의 전래와 함께 일본어에 수용되었다. 그 후 불교문화의 융성에 따라 원래 상류지식인이 사용했던 「관념」이 점차 일반대중에게 들어가, 무로마치(室町時代) 말기부터 ‘각오할 것’을 의미하는 일본제 한어로서 일본의 교겐(狂言)과 같은 전통 예능에서 받아들이기 시작하여 사회에 널리 보급된 것이다. 19세기 서양 관념학의 전래와 함께 「관념」이 다시 ‘의식적인 내용’을 부여받은

일본제 한어가 되었고, 그 후 보다 넓은 의미의 기능인 ‘생각’을 가리키게 되었다.

순수 일본제 한어인 「인지」는 일본의 근·현대화와 함께 여러 차례 서양에서 도입된 신 개념을 표현하기 위해 일본제 어의가 부여되었음을 알았다. 메이지 초기, 예로부터 전해 내려온 본초학(本草學)이 서양 박물관학으로의 변천에 따라 「인지」가 ‘확실히 인정하는 것’을 가리키는 신조어로 탄생했다. 그 후, 서양 근대법의 도입으로 ‘사생아(私生子)는 자신의 자식임을 인정하는 것’을 의미하는 단어로 일본의 법률문헌에 등장하였고, 1980년대 서양의 인지심리학의 발전과 함께 ‘지식을 얻는 작용’이라는 개념이 부여되어 다시 신어가 되었다. 즉, 이 세 가지 의미는 모두 역사적 원인에 의해 형성되었음을 밝혀내었다.

중일 언어 교류의 시점에서 보면, 한적이나 불전의 유입이 일본어의 조어에 영향을 끼쳤음을 보여주는 한편, 일본제 한어가 된 「의식」, 「사상」, 「관념」, 「인지」가 중국어의 신어에도 큰 반향을 불러일으켰다. 서양의 신 개념인 「의식」, 「사상」, 「관념」은 다의적 신어로서 19세기 말 20세기 초기에 걸쳐 중국에서 실행된 무술(戊戌)의 변법(變法)이 배경이 되어 중국어에 수용되었다. 또, 동사인 「인지」는 1880년대, 메이지 유신을 모델로 한 양무운동(洋務運動)을 계기로 중국어에 도입되었고, 1980년대의 개혁 해방 실시로, 철학 용어인 「인지」가 다시 중국어로서 인정되었다. 시대의 변천에 따른 언어의 신구 교체로 인해 이들 일본제 한어는 현재 중일 양 언어에 있어 중심적인 위치를 차지하고 있음을 알 수 있었다. 이와 같이 일본제 한어의 의미의 변천에서 나타난 구어(舊語)의 형성·발전이나 쇠퇴·소멸 및 신어의 형성과 발달은 주로 아시아권의 이문화 교류와 동서의 이문화 교류에 의한 것이 분명하다는 점을 확인할 수 있었다.

凡例

1. 本博士学位請求論文は、以下「本論文」という。
2. 本論文における日本語と中国語の文献の表し方：
 - ①日本語の著書は『 』、中国語の著書は《 》、論文は「 」を用いる。
 - ②日本語と中国語の区別が必要な場合、日本語は「 」、中国語は“ ”で表す。
 - ③辞典の意味分野は、〔 〕で表す。例：〔思考〕、〔考える〕
 - ④語義変化を解説するため、意味分野ごとは【 】で表す。例：【意味①—A】、
【意味③—A—ア】
 - ⑤データベースを、・ で分ける。
 - ⑥日本語の漢字表記は新字体とし、引用文や用例は原文通りとする。中国語の漢字表記は繁体字(1949年以前)と簡体字(1949年以降)とする。
3. 本論文における用例のあげ方：
 - ①番号は通し番号とする。表、図の番号も同様とする。
 - ②表記は、引用した文献の原文通りとする。
 - ③訳文は、特に明記がないものは拙訳である。訳文を引用した場合は脚注に付す。
 - ④用例に付けた下線は、研究対象とされた語彙である。
 - ⑤用例で使用した(略)は、(前略)、(中略)、(後略)を意味する。

目次

<국문초록>.....	i	
凡例.....	iv	
序章		
1. 問題の所在と研究の目的.....	1	
2. 先行研究と本論文の位置づけ.....	3	
3. 研究対象.....	9	
4. 研究方法.....	11	
5. 本論文の構成.....	12	
第一章 「意識」の意味の変遷.....		14
1. 「意識」の出現と展開.....	14	
2. 辞書における「意識」と“意识”.....	14	
3. 漢籍系「意識」について.....	17	
1) “意識”の成立.....	17	
2) “意識”の意味変化.....	18	
3) 日本における漢籍系“意識”の受容.....	23	
4. 仏典系「意識」について.....	28	
1) 中国における仏典語“意識”の成立.....	28	
2) 日本における仏典語“意識”の受容.....	31	
5. 和籍系「意識」について.....	35	
1) 日本における和籍語「意識」の成立と発達.....	35	
2) 和製漢語である「意識」の意味変化.....	38	

3) 中国における和製漢語「意識」の逆輸入.....	44
6. まとめ.....	49
第二章 「思想」の意味の変遷.....	53
1. 「思想」の出現と展開.....	53
2. 辞書における「思想」と“思想”.....	53
3. 漢籍系「思想」について.....	55
1) “思想”の成立.....	55
2) “思想”の意味変化.....	58
3) 日本における漢籍系“思想”の受容.....	60
4. 和籍系「思想」について.....	66
1) 日本における和籍語「思想」の成立と発達.....	66
2) 和製漢語である「思想」の意味変化.....	67
3) 中国における和製漢語「思想」の逆輸入.....	72
5. まとめ.....	78
第三章 「観念」の意味の変遷.....	81
1. 「観念」の出現と展開.....	81
2. 辞書における「観念」と“观念”.....	81
3. 仏典系「観念」について.....	83
1) “観念”の成立.....	83
2) 日本における仏典系“観念”の受容.....	85
4. 和籍系「観念」について.....	89
1) 日本における和籍語「観念」の成立と発達	
—室町時代の【意味②—A】を中心に—... 89	
2) 日本における和籍語「観念」の成立と発達	

—明治時代の【意味②—B】を中心に—	91
3) 和製漢語である「観念」の意味変化	93
4) 中国における和籍漢語「観念」の逆輸入	95
5. まとめ	98
第四章 「認知」の意味の変遷	101
1. 「認知」の出現と展開	101
2. 辞書における「認知」と“認知”	101
3. 和籍系「認知」の成立と展開	102
1) 日本における和籍語「認知」の成立	103
2) 日本における和籍語「認知」の意味変化	104
4. 中国における和籍漢語「認知」の受容	108
5. まとめ	110
終章	113
参考文献	118
要旨	125

表目次

<表1>	和製漢語と新漢語の定義.....	5
<表2>	西周の訳語の出自.....	6
<表3>	辞典における「意識」の意味分野.....	14
<表4>	辞典における“意识”の意味分野.....	16
<表5>	“意识”における華製語義の意味交替.....	23
<表6>	「意識」における和製語義の意味交替.....	43
<表7>	日本における「意識」の意味変遷.....	43
<表8>	中国における“意识”の意味変遷.....	48
<表9>	辞典における「思想」の意味分野.....	53
<表10>	辞典における“思想”の意味分野.....	54
<表11>	“思考”における華製語義の意味交替.....	60
<表12>	「思想」における和製語義の意味交替.....	71
<表13>	日本における「思想」の意味変遷.....	72
<表14>	中国における“思想”の意味変遷.....	77
<表15>	辞典における「観念」の意味分野.....	81
<表16>	辞典における“观念”の意味分野.....	82
<表17>	「観念」における和製語義の意味交替.....	94
<表18>	日本における「観念」の意味変遷.....	94
<表19>	中国における“观念”の意味変遷.....	97
<表20>	辞典における「認知」の意味分野.....	101
<表21>	辞典における“认知”の意味分野.....	102
<表22>	「認知」における和製語義の意味変遷.....	107
<表23>	“认知”における和製語義の意味変遷.....	110

図目次

図1 「意識」の意味変化の原因	52
図2 「思想せよ」・「如何に思想すべきか」・「如何に思想を整理統一すべきか」	62
図3 「思想」の意味変化の原因.....	80
図4 観念寺文書.....	88
図5 「観念」の意味変化の原因.....	100
図6 「認知」の意味変化の原因.....	112

序章

1. 問題の所在と研究の目的

日本語にとって、漢語は元々外来語・借用語であったが、時代の変遷と共に、和語にない新概念を表現する場合、中国語から借用した漢語や、日本で造語した和製漢語が日本語の語彙体系に融和してきた。同様に、新たな文化や事物が中国に渡来した時、和製漢語は中国語に自然に流されるようになった¹⁾。このように上代から現在にかけて、中日両言語間における漢語の相互交流により、漢語が受け入れられたり、変更されたりしている。中日両国の近代化に伴って、現在、幕府・明治以降の和製漢語が大きく注目されている。

語彙史の中で和製漢語の個別的な具体例の語史研究は重要な位置を占めているが、それに関する研究はまだ不十分である。語史研究の中心的な課題は、語義変化の問題である。これについて多くの研究は、個別の語史的な意味変化を超えて、意味変化の法則性を体系化するという方向に向かっていた。それは語義変化の法則性を見出し、多義パターンを細分類することに役に立つと期待されるが、十分な説得力を持ち得なかった。言語の変化というのは、系統的变化ばかりでなく、個体的変化も含んでいるものである。例えば、辞書に載せられているおおよその語はいくつかの語義が挙げられているが、元々からの用法ではなく、意味の拡張や分化、添加な

1) 福島邦道(1977)『日本語講座第六巻 日本語の歴史』大修館書店、p292参考。福島は中国人と日本語について以下のように語っている。「中国人が日本語を観察するようになったのは14世紀に入ってからである。『史書会要』(1376)には、日本語の「いろは」を中国人がどう読んだか、その発音を漢字で示している。16世紀になると、中国人の日本語研究書が続出してくる。その理由の一つは、中国の外交をつかさどる役所で回りの諸民族の言葉を取り上げて『華夷訳語』すなわち中国語と他民族語との対訳辞書を作ったが、その一つに『日本館訳語』(1513)がある。もう一つの理由は、明代において倭寇が中国沿岸地方をあばれまわったが、中国ではそのため日本を知る必要上多くの日本研究書を作ったのである。『日本寄語』は初めての日本語語彙集であり、『日本風土記』には語彙集の他日本の和歌まであり、『日本一鑑』(1556)は日本の古辞書を研究している。清代も日本語に対する関心があり、『吾妻鏡補』(1815)、『遊曆日本図経』(1889)などに日本語が取り上げられている。」また、19世紀末20世紀初、西洋の新思潮の導入で、中国語が日本語から和製漢語を借用するようになったと沈国威(1994)が『近代日中語彙交流史』で論じた。

ど、様々な意味変化が重ねられた結果であろう。

本論文における研究対象である和製漢語の意味変遷のあり方を考える時、時代によって変化の傾向が異なっているかどうか、他の語との関わりがあるか、品詞や語種による変化の違いがあるか、どのような語義から変わったか、意味分野の中で位置がどのように変わったか、変わった原因は何か、いつ頃変わったかなど、複数の問題が挙げられる。そのため語源と意味分野を重視して考えていく必要がある。

従来、日本漢語の語史を探るためには、辞書記録の初出などで跡付けていくのが一般的であった。例えば『日本国語大辞典』では、ある語義の最初の例のみ挙げられ、意味変化の過程や時期は明確に記載されていない。用例の少なさだけでなく、語源の記述や語義分類の記述にも問題点が見られる。

語源や意味分野ごとの変化を考えるには、言葉の個人・心理・情意的な面と、社会・歴史的な面との両面を絶えず考慮していくことが大切であると考えられる²⁾。これに対して、諸外国語との対照・比較によって得られる史的語源——個々の単語の原義、及び新語義の派生・展開がある。中日交流史から考えれば、19世紀末から20世紀初にかけ、大量の和製漢語が新語として中国に導入された。その新語とは新しく漢字を組み合わせで造られたものもあれば、古典漢語に新しい意味を与えて再生されたものもあり³⁾、元々訳語として造られた「和製漢語」の定義が多岐にわたっていることが分かる。それゆえに、和製漢語の意味の変遷を考察する時、単に漢字表記と西洋の近代的概念との結びつきを確認するだけでは不十分である。基本として中国語文献に出典のある・無しによって、純粋な和製漢語と中国語から由来したものとの分けることが大事である。しかし、中国語由来の漢語の問題は出自である。例えば、「芸術」、「時間」の出自は漢籍⁴⁾であり、「普通」、「結果」の出自は仏典⁵⁾である。そこで中日の辞書から和製漢語の出自の分類をし、研究対象の語源及びそこから派生した語義変化を分析する。

本論文での研究目的の第一は、語源を探ることによって、ある語がどのような社

2) 吉田金彦(1976)『日本語語源学の方法』大修館書店、p. 219

3) 沖森卓也(2011)『図解日本の語彙』三省堂、p. 114

4) 中国人によって漢文で書かれた書物。日本語で書かれた書物(和籍)に対応する分類。仏教関連の書物は仏典として漢籍に含めない。

5) 仏教典籍。仏教に関する書籍。

会的背景から誕生したのかを考察することである。そして、和製漢語の由来による出自別を明らかにすると共に、語源及びそこから順々に派生した新語義の、日本語や中国語への受容と変容の様相を検討したい。第二の目的は、和製漢語の意味変化の原因とその過程についての研究である。歴史的変遷——中国、日本、インド、イラン、西洋との文化交流が、中日漢語の意味変化に与えた影響に着眼し、共時的及び通時的に、中日漢語の発展を比較していきたい。また第三の目的は、中日語彙交流という視点から、和製漢語の形成とその展開が、中日両言語に及ぼした影響がどこまで広がっているのかを確認することである。その上、言語の新旧交替が、どのように和製漢語の活用を推進していくのかに注目し、現代語としての和製漢語が中日両言語に占めている位置を正しく見極めたい。これらは、中日言語の交流過程、現代中国語・日本語の語彙の変化の把握及び外来語の関連研究に役立つであろう。

2. 先行研究と本論文の位置づけ

学界では、和製漢語を新漢語と呼ぶ場合があるが、この二つの用語に違いが見られる。まず両語の概念について検討する。

佐藤喜代治(1982)は和製漢語の定義について、「おほね」を漢字で「大根」と書いて字音で読むこと、すなわち訓読みから音読みへ変わったものは、和語に由来する和製漢語と述べた⁶⁾。「量見」のような表意文字としての日本独自の組み合わせや表記がもう一種の和製漢語ということである。また、幕末以降、外国から入ってきた概念に対応する漢語訳語が広義の和製漢語と認められるが、新漢語としては、日本人が独自に創出したものか、中国古典語を用いて外来概念に対応されたものかを区別するのは極めて難しいと論じ、これらは学界で多く認められている。

また、新漢語について山田孝雄(1940:31-41)は、

「近世西洋文明をわが國語の中に傳へたるものも亦主として漢語たり。(略)一は支那

6) 佐藤喜代治(1982)「日本語の歴史」『講座日本語学4 語彙史』明治書院、p.71

にて西洋文化を輸入する為に撰せし翻譯語に用ゐたる語をばわが國にてもそれを襲用せしものなり。一は本邦にて西洋文化を輸入する為に選定せしものにして、これにも支那の古典に典據あるものをもとめしものと、本邦にて新に選定せしものあり。」⁷⁾

と述べている。そして、彼は初めて新漢語を「直接または間接の交通輸入によるもの」、「漢学より傳はりたるもの」、「仏教の書より傳はりたるもの」、「洋学の翻訳より生じたる漢語」と分類した。

ここで、新漢語を「和製」と「華製」に分けて定義されるということが見える。後者について佐藤(1979)は、中国で訳語として造語された華製新漢語が、来華宣教師によって、漢訳洋書などの伝来と共に日本語に導入されたと明白に述べている。また沖森卓也(2010:304-305)は、「新漢語」を、①中国語からの借用(華製新漢語)、②中国古典語からの転用(和製漢語)、③日本における造語(和製漢語)という3種類に分けた。その上で、

「①は当時中国語で用いられていた漢語で、漢訳洋書や『英華字典』などを通して日本語で用いられるようになったものです。幕末・明治初年(略)その新しい概念を表す漢語をそのまま日本語に取り込むこともありました。②は、まったく新たに造語するのではなく、中国古典に使われていた旧来の漢語を転用して、新しい概念に当てたものです。当時の知識人は、漢籍や仏典にその訳語を求め、例えば『莊子』(漢籍)などに典拠のある「宇宙」、「機械」、『法華經』(仏典)などに見える「演説」などに、訳語として新しい意味を付与する一方(略)、新たに語を作り出すこともありました。③は、日本で独自に漢字を当てて組み合わせた純粹の和製漢語です。(略)日本語では漢字を組み合わせると漢語を構成するところから、多様な漢語が造語されることにもなりました。」

と詳しく説明している。ここでのタイプ①と③は同様に、新しく漢字を組み合わせで作ったものであるが、語源の違いによって、それぞれに華製新漢語、和製漢語と定義され、そしてタイプ②と③は新語として、新概念の出自によって異なる種類の和製漢語と定義される。このように、語がその出自・由来によって種類ごとに分け

7) 山田孝雄(1940)『国語の中に於ける漢語の研究』賓文館、pp. 31-41

られるということがはっきりしている。

一方、山田(1940)と沖森(2010)の観点から分かるように、和製漢語のタイプ②の中に漢籍由来するものがあり、そのほか、仏典由来するものもある。これについて、佐藤亨(1980)は語源の視点に立ち、近代漢語の訳語は漢籍、仏典に典拠があるものが多いが、典拠を見い出し得ないものもかなり見られると指摘している⁸⁾。また、和製漢語の分類に対して、胡新祥(2018)が疑問を抱いた。タイプ③はともかくとして、彼は、旧来の漢語の出自によって、タイプ②をさらに「漢学、漢籍によるもの」と「仏教、仏典によるもの」と2分類にした⁹⁾。

以上の指摘から、和製漢語と新漢語は次のようにまとめられる。

表1 和製漢語と新漢語の定義

時期	種類	出自	意味的範囲	例
幕末以前	和製漢語	和籍	本来の日本語があって、これを漢字で書き表し、字音で読むもの	おほね→大根 ではる→出張
	和製漢語	和籍	固有の日本語がなく、漢字を組み合わせさせて熟字を作り、字音で読むもの	量見、選考
幕末以降	和製漢語・新漢語	漢籍	本来の漢語をモデルにして造り出されるもの	社会、経済
	和製漢語・新漢語	仏典	本来の漢語をモデルにして造り出されるもの	演説、応用
	和製漢語・新漢語	和籍	固有の日本語もなく中国語もなく、新たに造り出されるもの	哲学、抽象
	新漢語 ¹⁰⁾	漢籍	固有の日本語もなく中国語もなく、新たに造り出されるもの	地球、銀行

表1から分かるように、ある語がどのように始まったかは語源の問題となる。

「和製漢語」や「新漢語」と関わっている概念は、その由来から見える。語源を語

8) 佐藤亨(1980) 『近世語彙の歴史的研究』桜楓社、p. 285

9) 胡新祥(2018) 「中日近代新漢語についての研究——仏教由来漢語を中心に」立教大学学術リポジトリ、p. 2

10) 孫建軍(2015)は、16世紀末から18世紀初、中国製の新語が前期漢訳洋書に見られるということ述べたが、後期漢訳洋書に見えた、幕末から明治初期にかけての新漢語が、日本語により大きく影響を与えたと論じている。これに対して、荒川清秀(2017:45)は「西洋の波を最初に被ったのは中国であり、「熱帯」のようにまず中国で作られ、日本に伝わり、さらに日清戦争後再度中国へ帰っていくという「中→日→中」というルートも近代漢語伝播を考える上では重要なものである」と言うが、沖森(2010)などの学者たちは、幕末・明治初年、日本に導入された中国製の新語を、中国製の新漢語と定義する。荒川清秀(2017)「孫建軍著『近代日本語の起源——幕末明治初期につくられた新漢語——』」『日本語の研究』(13)、p. 46

の出自の面から説明すると、和語・漢語・外来語などの別の語種となるが、語種の問題には、語の起源による区別だけでなく、時代の変遷及び時代ごとに使用者の需要も合わせて注意すべきである。例えば、日本の近代化と共に、より抽象的な言葉を必要に応じて翻訳しなければならない。その時、造語力のある漢字が、新概念を表すために受容される場合が多い。このような視点に立って検討すれば、新造語はどのように社会に受容されたのかや、古典語はどのように新造語になったのかなどの問題を明らかにできる可能性が高い。

本研究では、幕末以降の和製漢語における意味の変遷に焦点を当て、ある語が生まれてから現在にかけてどのように変化したのかを明確にしたい。語彙史から考えると、語義の変化の記述にとどまらず、その背景にある社会・文化の変化を考える必要がある。それは和製漢語の出自は再検討すべき課題であると考えられる。まず、中国起源の和製漢語と純粋な和製漢語との識別についてである。それらを識別する基本的な方法は、中国側と日本側の辞書記録や文献に、ある語がどこに由来しているのかに関連する記述のある・無しによって、その語の出自を判定するということである¹¹⁾。しかし、和製漢語の語義変化を検討しようとする場合、それだけでは不十分である。例えば、ある古典語義を持つ和製漢語は、漢籍に由来するものなのか、それとも仏典に由来するものなのかということにおいては、詳細に考察しなければならない。これについて、手島邦男(2001)は漢籍や仏典、和籍の有無を基に、(西周の)訳語の出自を調査すると提案した¹²⁾。収集された1894件の訳語の源流を調査した結果、次の通りである。

表2 西周の訳語の出自¹³⁾

	出自	比率
A	漢籍・仏典に典拠があり近世までの和籍にも用いられた語	628(33%)
B	漢籍・仏典に典拠があるが幕末や明治になって用いられた語	328(17%)

11) 山口堯二(2005)『日本語学入門——しくみと成り立ち』昭和堂、p.128参考。中国製漢語と日本製漢語を見分ける方法について、山口は「まず比較的採録語数の多い大型の漢語辞典で、中国側の例の有無を確かめることである。そして日本側に、そのような和製漢語の成立する蓋然性があるかどうかを確かめることである。」と述べた。松井利彦(1990)『近代漢語辞書の成立と展開』、p.342参考。そこに、「『大漢和辞典』に中国の文献が記されている漢語を中国製の漢語とし、『大漢和辞典』に記載されていない漢語、または記載されていても出典が記されていない漢語や、日本の文献が記されている漢語を日本製の漢語とする。」が記述されている。

12) 手島邦男(2001)「西周の訳語の研究」『東北大学紀要』(129)、p.302

C	漢籍・仏典の典拠は不明で主に近世以降の和籍に見られる語	92(5%)
D	漢籍・仏典や近世までの和籍にもない幕末や明治初期の新語	846(45%)

これを見ると、半数近い新語が漢籍・仏典に由来するということが分かった。語源の推定は意味変化の推定に連なっていると考えられる¹⁴⁾。そのため、和製漢語が成立してからどのような語義変化を起こしているかが問題となる。斎藤倫明(2002)が論じたように、語が認められた時には、共時的に語彙の体系、通時的に語彙の変遷を考えなければならない¹⁵⁾。つまり、和製漢語における語形成の歴史を、中国語のそれと比較して検討することが望まれているのである。

ところが、19世紀末から20世紀初頭、多くの和製漢語が中国に伝来した。言語の新旧交替で、新語が古い中国語、特に漢籍や仏典に由来したものに取って代わることが進もうとしている。中日語彙交流という視点に立って見ると、和製漢語は是非とも検討する価値があると考えられる。例えば、和製漢語はどこから来たのか、それらの意味の変遷はどのように生じたのか、新語としては中日両言語に与えた影響はどれくらいなのかを再検討されなければならない。それゆえに、和製漢語と中国語や梵語、西洋語との関わりを考えると共に、社会的、文化的、歴史的に位置付けしてゆく必要がある。本研究をきっかけとして、和製漢語についてさらに考察を加えて行きたい。

上述した山田(1940)、佐藤(1980)、手島(2001)、胡(2018)、沖森(2010)がまとめた和製漢語の分類別——漢籍由来、仏典由来、和籍由来を参考にし、和製漢語における論述を分析してみたい。まずは西周が1878年に訳した『心理学』の「翻訳凡例」における記載である。

「故二知覚記性意識想像等ノ若キハ従来有ル所ニ從フト雖モ理性感性覚性悟性等ノ若キ又致知家ノ術語觀念實在主觀客觀歸納演繹綜合分解等ノ若キニ至リテハ大率新造二係ハルヲ以テ読者或ハ其意義ヲ得ルヲ難ニスル者アラン」¹⁶⁾

現代語に訳すると、「知覚」「記性」「意識」「想像」などの訳語は従来からあ

13) 手島邦男(2001)「西周の訳語の研究」『東北大学紀要』(129)、p. 304
14) 前田富祺(1985)『国語語彙史研究』明治書院、p. 259
15) 斎藤倫明(2002)『朝倉日本語講座 語彙・意味』、朝倉書店、p. 247
16) 米川明彦(1989)『新語と流行語』南雲堂、p. 22

る語によったが、「理性」、「感性」、「覚性」、「悟性」、「観念」、「実在」、「主観」、「客観」「帰納」、「演繹」、「綜合」、「分解」などは新造語と言う。しかし、その中の「意識」は「西周独自と思われる訳語」であると言われるが、実際に、前野良沢と杉田玄白が訳したものであると考えられる¹⁷⁾。訳語としての「意識」は、漢籍の典拠のある語とよく認められるが、仏典の典拠もある語であるということに関しては全く注目されていない。また「観念」は仏典語として平安時代に中国から受容され、それから語義変化で室町末期から和製漢語として使われようになってきたことが、『日本国語大辞典』(1989:594)や『語源大辞典』(1988:76)に載せられている。そして、これらの意味分野は日本の近代化によって消滅していないということが各辞典における採用例から見られる。この二つの和製漢語は、『英和字彙増補』(1888)、『和訳英字彙』(1891)、『和訳字彙』(1888)、『新簡約英和辞典』(1956)などに見られるもので、和製漢語の性格を持つということがはっきり確認されたが、現在、「応用」や「工夫」などと共に、「古く仏教用語であったが、その関係が一般には忘れられてしまったもの」¹⁸⁾と見なされる。実際、「意識」は、漢籍・仏典・和籍という三重性格を持ち、「観念」は仏典・和籍という二重性格を持っている。この点について、関心度を高めれば、語彙の意味の変遷における研究に有益であろう。

次に、朱京偉(2005:88)の「明治初期以降の哲学と論理学の新出語」での一部の内容である。

「「思想」は、古典中国語 では名詞の用法がなく、「考える」の意を表す動詞として使われていた。動詞としての「思想」は、中村正直の『晒国立志編』(1870)に「暗中に摸索し、懸空に思想して」とあるように、明治初期の日本語にもその用例が見られたが、その後、『哲学字彙』(1881)で“thought”の訳語として用いられるようになり、「思考の内容や結果」を意味する名詞に移行していったのである。現代中国語においても、動詞の用法がすでになくなり、日本語の影響で生じた名詞の用法だけが残っている。「思想」に見られる品詞性の移行も、新義発生のパターンの一つとして考えられよう。」¹⁹⁾

17) 栗島記子(1966)「訳語の研究——西周を中心に」『日本文学』(27)、p. 82

18) 倉島節尚(2008)『日本語辞書学への序章』、p. 212

ここで「思想」についての論述に疑問点が多く見られる。例えば、古典中国語としての“思想”は元々動詞として使われていたことは中国語の《辞海》(2009)に見られるが、古典語として名詞の機能を持つということは、日本語の『大言海』(1980)における解説から顕著に見られる。また現代中国語として、“思想”における動詞の用法がすでにないというより、むしろ次第になくなっていくという傾向が見られる。

また、彼(2002:113)が著した「明治期における近代哲学用語の成立:哲学辞典類による検証」に、次の記述が見られる。

「漢籍に出典がない語については、「美術」、「仮定」、「能動」、「所動」、「仮想」、「緊張」、「自由主義」、「放任主義」、「潜在」、「総体」、「認知」などがほぼ西周の造語と推定できる。」²⁰⁾

『日本国語大辞典』(1989:1891)によると、「認知」は三つの意味分野を持つ。その中で「ある事柄をはっきりと認めること」と「高次の認識」を指す「認知」は訳語として出現したが、前者は須川賢久訳の『具氏博物学』に由来すると載せられる一方、後者、“cognition”の訳語とされた「認知」は、西周が作ったものかどうかということについての記録は、各辞典では全く見いだされない。

この四つの具体例——「意識」、「思想」、「観念」、「認知」における先行研究から見ると、辞書の不確定さや、和製漢語の意味変化における問題点——語の出自や意味的範囲の確認などが必要である。本論文では、以上の疑問点を指摘しつつ、中日漢語対照研究によってそれらの問題点を明らかにしたい。この四つの和製漢語を、中国語の“意识”、“思想”、“观念”、“认知”と比較して、中日語彙交流史から見えた意味の変遷の過程とその原因を課題として挙げたい。

3. 研究対象

19) 朱京偉(2005)「明治初期以降の哲学と論理学の新出語」『日本語科学』(18)、p. 80

20) 朱京偉(2002)「明治期における近代哲学用語の成立:哲学辞典類による検証」『日本語科学』(12)、p. 113

言葉というものは、そもそも歴史の流れに伴って自ら次第に変化していく。しかし、語彙体系に大きな変化をもたらすきっかけは、間違いなく異文化との交流によるものである。古代中国から伝来した古典語による日本語に対する影響はよく知られている。一方、啓蒙思想の時代で、日本語の近代化とともに、西洋の抽象語を和製漢語に置き換えたことが多く、特に西洋の学問の導入に伴って登場してきた「思考」面の新語が、現代中国語にも大きな変化をもたらした。研究対象となる〔思考〕分野²¹⁾の和製漢語は、中日語史上の大きな変化を経て、中国語、梵語、西洋語、そして日本語が絡み、言語交流の観点から言うと、これ以上の材料はないのである。

〔思考〕分野の和製漢語は実に多い。「思惟」、「考慮」、「回想」、「思潮」、「悟性」など、現在よく使われるものが少なくない。本研究は、語義変化という観点から歴史的に考察し、和製漢語が中国語や日本語の歴史においてどのような働きしてきたのかを明らかにしたい。そのため、思考分野の和製漢語を研究対象語とし、出自別の違いが出る条件を揃えた四つの語を対象にした。

上記の条件で、中日言語交流の視点から考えて漢籍・仏典・和籍由来の「意識」、漢籍・和籍由来の「思想」、仏典・和籍由来の「観念」と和籍由来の「認知」などが選定された。つまり、条件と条件に合うものとして、4組の中日同形語——第①組を“意识”と「意識」²²⁾、第②組を“思想”と「思想」²³⁾、第③組を“观念”と「観念」²⁴⁾、第④組を“认知”と「認知」²⁵⁾とする。これらの和製漢語²⁶⁾は近代化に伴い、日本語と西洋語との接触において大いに役立った。本論文で

21) 『類語大辞典』(2003)では、〔思考〕を、〔思う〕、〔信じる〕、〔気にする〕、〔気になる〕、〔疑う〕、〔志す〕、〔図る〕、〔考える〕、〔推す〕、〔評する〕、〔かこつける〕、〔比べる〕、〔見込む〕、〔誤る〕という14つの小分野に分ける。『類語国語辞典』(1985:607)では、〔思考〕を、〔心〕、〔思考〕、〔判断〕、〔認識〕、〔比較〕、〔識別〕、〔信疑〕、〔過誤〕、〔証明〕、〔立案〕という10つの小分野に分ける。そして『デジタル類語例解辞典』(2003)ではの〔思考〕は小分野別とされる。そこに85組の種類別が含まれる。本研究では、この三つの類語辞書を参考にして、語の意味的範囲を分類する。柴田武他(2003)『類語大辞典』講談社、p.13

22) 「意識」と“意识”における意味的範囲は、小分野では〔気にする〕や〔考える〕に属し、大分野ではすべて〔思考〕に属する。

23) 「思想」の意味分類は〔筋〕(〔考える〕という分野に属する)という小分野、〔思考〕という大分野に属する。“思想”は〔思考〕という大分野に分けられるが、その意味的範囲の中に、〔懐かしむ〕という小分野に属するものもある。

24) 「観念」と“观念”は、〔観念〕という小分類、〔思考〕という大分野に含まれるが、「観念」は特に〔意向〕・〔願望〕に属する意味分類をも持つ。

25) 「認知」と“认知”はすべて〔認識〕という小分野、〔思考〕という大分野に分けられる。

26) 中国では、日本から借用した和製漢語を「日製漢語」と呼ぶ。固有の中国語を借用して作った和

はこの4組の語に焦点を当て、時代によってどのような意味変化が起こったかを中心に検討していきたい。

4. 研究方法

本論文は、中日両言語における豊富な言語資料をもとに、考察対象となる和製漢語の意味変遷を明らかにするため、次のようなコーパスを利用した。

① 中国語のコーパス：

- ・古籍コーパス
- ・現代中国語コーパス
- ・国家語委員会現代漢語平衡コーパス
- ・北京言語大学BCCコーパス
- ・全国新聞・雑誌索引データベース

② 日本語のコーパス：

- ・日本語歴史コーパス
- ・現代日本語書き言葉均衡コーパス
- ・青空文庫コーパス
- ・東京大学史料編纂所の諸データベース
 - I 古記録フルテキストデータベース
 - II 古文書フルテキストデータベース
 - III 奈良時代古文書フルテキストデータベース
 - IV 平安遺文フルテキストデータベースなど

上記のように、個々の語の調査に当たって、多くのコーパスを使うこととなり、

製漢語を「半日製漢語」と呼ぶ場合もある。

また、必要に応じて実際に辞典記録の例文や、国立国会図書館オンラインの資料、雑誌論文、インターネット情報なども調べた。

和製漢語の意味変化を中心とした研究を進めるに当たり、上代から現在にかけての中日両言語における文献を調査資料とした。仏典の他に、日本語の文献は平安時代の物語、鎌倉時代の日記抄、室町時代の浄瑠璃や狂言、近現代に刊行された小説、雑誌、会議録など、広い範囲で調査を行った。そして中国語の文献は、紀元前から現在までの詩集、医書、史伝、小説、新聞、雑誌などを考察した。さらに、研究対象となる4組の語の出典、意味的範囲及び品詞などを確認する判断基準となるものとして、日中両国の国語辞典を始め、西洋辞典や、仏教語辞典、類語辞典などを加えた。なお、辞書類は「参照辞書」に掲載した。

また本研究では、和製漢語の意味変化がどのようにして生じたのかを確認するため、歴史的背景を踏まえて考察したい。時代ごとの語の形成と展開、文化・社会風潮ごとに旧語の消滅と新語の発展・流行からの考察が貴重な資料になると考えたからである。

5. 本論文の構成

本論文は序章、終章を含めて全部で6章から構成されている。以下に、第1章からの内容及び研究焦点を概観する。

第1章から第4章において、まず第1節では、「意識」、「思想」、「観念」、「認知」の出現と展開を簡単に紹介する。第2節では、序章で提起した出典の検証を試みることを目的として、両言語における国語辞典、古語辞典、語源辞典、近代語辞典、外来語辞典を調査する。そして、研究対象とされる4組の語に関する先行研究を整理して、語の出自・典拠及び意味分野における記録を比較する。第3節から、紀元前から現在にかけての幅広く用例を集め、意味変化の原因を探るため、その4組の実際の使用様相などについて詳しい考察を行う。最後に、章ごとのまとめをする。

第1章では、「意識」の形成と展開における意味の変遷を深く検討するため、異文化交流で生まれた語義の新旧交替に焦点を当てて考察する。第3節では漢籍系の「意識」の語源及び語源から派生した各意味分野の確認を中心に、儒学・漢学が“意識”と「意識」に与えた影響を明らかにする。第4節では、インド仏教の伝来と発達で、“意識”が仏典語になってから高い位置を占めるため、日本語に導入されてきたことを述べる。第5節では、蘭学と西洋哲学にある新概念を表すため、「意識」が和製漢語として多分野で広く使われ、仏典系の「意識」に取って代わる上に、また中国語に輸入されたことを論述する。

第2章では、「思想」が、中日言語交流においてどのように変化していたのかについて考察を行う。まず第3節では、漢籍系の“思想”が中医学の発展と共に生まれた後、多義化になってから日本語に導入されたことを説明する。第4節では、西洋の自由主義の隆盛で、「思想」が借用語として利用され、和製漢語になってから中国語に受容された一方、両言語にとって、和籍系の意味が頻繁に用いられるようになり、漢籍系の意味が「中心から周辺へ」移動している様相を呈していることを述べる。

第3章では、「観念」が日本語に受容され、変容したり、中国語に逆輸入されたりした過程で生じた語義変化を、言語・社会・文化の方面から検討する。第3節では、梵語を翻訳するために造られた“観念”が、日本語として受容された後、仏教文化の普及と共に和語への同化へ一段進んだことを明らかにする。第4節ではまず、和語化された「観念」が、新語義を付与されたものとして広範囲に用いられることを述べ、その後、西洋観念学の影響で、再び新概念を付与されたものになり、中国語に逆輸入されたことを解説する。

第4章では、近・現代化の背景下、「認知」が何度も純粹の和製漢語になったプロセスについて考察する。第3節では、まず明治初期の欧米博物学の伝来が、「認知」の形成に与えた影響を確認する。その後、西洋近代法と認知心理学の受容で、「認知」に次々と新語義が付与されるようになった過程を明らかにする。第4節では、和籍系の「認知」が、中国語へも新語として移入されたことについて検討を加える。

終章では、考察結果のまとめと今後の課題について述べる。

第一章 「意識」の意味の変遷

1. 「意識」の出現と展開

本章では、漢籍・仏典・和籍由来の「意識」が、中日語彙交流における受容と変容の過程及びその原因を研究し、漢・仏・和からの「意識」の意味の変遷を深く考察する。そしてそれに関する中日両国における新旧思想、社会文化などの交替・変更を側面的に検討していく。

まず、《論衡》を中心とした中国古代の無神論の宣伝について、「意識」の語源を確認する。その上で中国語における“意識”の意味の拡張、分化と各意味分野の定着性を、日本に輸入された漢籍系の「意識」の特徴と対照して分析する。そしてインド・イランから大乘仏教の伝来によって成立した仏典語“意識”が中国での普及性と、仏典の盛行が日本語に与えた影響——この分野における「意識」の受容を解説しておく。その後江戸時代から、西洋の医学・哲学における新思潮の発展と共に、借用語として引用された「意識」が和製漢語となってから中国に逆輸入されてきたことについての論述である。

2. 辞書における「意識」と“意識”の意味

本節では、まず各辞書における先行研究を踏まえ、「意識」と“意識”の意味分類を考えることにする。次に、5つの辞典における「意識」の意味をまとめた。

表3 辞典における「意識」の意味分野

	日本国語大辞典 (1989:126)	大漢和辞典 (1984:4517)	デジタル大辞泉 (2020)	新明解古語辞典 (1977:70)	新潮国語辞典 (1977:98)	本研究での 意味分野
①-B	心に悟ること、 分かること、考 えること。《論 衡》(88)に由来	心に識る。《論 衡》(88)に由来				考えること
①-E	ある意図をもっ てすること		気づくこと。 はっきりしるこ と。気にかける こと。			ある意図をも ってすること
①-F	自分やまわりの 様子がどうなっ ているかに気づ くこと					気づくこと
①-G	特別にある人や 物事を気にかける こと					気にかけるこ と
②	仏語。六識、八 識の一つ	第六識	仏語。六識・八 識の一つ	仏語。六識・八識 の一つ	六識または八 識の一	六識・八識の 一つ
③-B-ア	目覚めていると きの心の状態。 『解体新書』 (1774)と『哲学 辞彙』(1881)に 由来	知覚・情意等、 すべての心意作 用の総称	心理学・哲学の 用語		知・情・意を 含めた精神現 象。	哲学用語、目 覚めていると きの心の状 態。
③-B-イ	ある物事に対し て持っている見 解、感情、思想 など、社会的、 歴史的な影響を 受けて形成られ る心の内容。		政治的、社会的 関心や態度、ま た自覚。		歴史的・社会 的に規定され る思想・愛情・理論・見 解など。	政治的、社会 的関心や態度
③-C			心が知覚を有し ている時の状態		心が知覚を有 している状態	心理学用語、 心が知覚を有 している状態

表3の辞書から調べた結果、日本語の「意識」は8種類²⁷⁾の意味分野に分けられている。その中で、仏典語の意味解説はほぼ共通していることが分かる。そして漢籍系の「意識」は《論衡》(88)に由来し、「考えること」や「心に識る」を指すと記されている。また、哲学用語としての「意識」が『解体新書』(1774)と『哲学辞彙』(1881)から出てくると記載されている。調査によると、【意味③—A】の「内感覚」を意味する「意識」が『解体新書』に由来し、【意味③—B】の「哲学的意

27) 【意味③—A】は日本語の各辞書に載せられないが、検討する価値がある意味分野であると考えられる。

識」を意味する「意識」が『哲学字彙』に由来するという。したがって、以上の各意味分野についてより深く検討する価値があると思われる。次は5つの辞書から整理した中国語の“意識”における意味分類である。

表4 辞典における“意識”の意味分野

	辞源 (2015:1517)	辞海 (2019:4713)	古代漢語詞典 (2000:1859)	漢語外来語詞 典(1985:390)	デジタル現代漢語 大詞典 (2007)	本研究での 意味分野
①-A	识见, 见解 (見識、見解) 《論衡》(88)に由来					すぐれた見解
①-C			聰明才智 (才知)			才知
①-D			思想感情 (思想感情)			思想感情
①-E					自觉抱有某种目的。(ある意図をもってすること)	ある意図をもってすること
①-F					觉察; 感觉 (気づくこと、気にかけること)	気づくこと、気にかけること
②	佛教语, 六识 (仏典語、六識の一つ)	八识(八識)				六識や八識の一つ
③-B-ア		与“物质”相对应的哲学范畴; 自觉的心理活动(「物質」と対応する哲学用語、目覚めているときの心の状態)		人的头脑对于客观物质世界的反应, 是感觉、思维等各种心理过程的总和 (人間の脳が客観的・物質的世界に対する反応、感覚・思惟などのすべての心的過程の総称) 日本に由来	人的头脑对于客观物质世界的反应, 是各种心理过程的总和。(人間の脳が客観的・物質的世界に対する反応、感覚・思惟などのすべての心的過程の総称)	人間の脳が客観的・物質的世界に対する反応、感覚・思惟などのすべての心的過程の総称

表4から分かるように、中国語の“意識”における意味分野が、7種類²⁸⁾に区分されている。その上、「すぐれた見解」を意味する古語——“意識”の出自は《論衡》(88)であり、心理学・哲学用語としての外来語——“意識”は、日本に由来すると記述されている。漢籍語の出自については表3の説明と同じであるが、語源における語義解釈はそれと異なっている。

28) 【意味①-B】、【意味③-A】と【意味③-C】に関する解説は中国語の辞典記録では見出されないが、実際に存在していた重要な意味分類であると考えられる。

上述した各辞典の記録から見れば、語源についての意味解釈や、各辞書における意味分野別の曖昧さなどが問題点になる。それぞれの意味の違い及びそれに関する語義の史的変遷を明らかにしようとするのが目的で、本研究はまず漢・仏・和に、「意識」と“意识”の意味分野を詳しく区分したい。そして各辞書の意味をもとに、意味分野ごとに細かく分析していく。

3. 漢籍系「意識」について

1) “意識”の成立

中国の章和2年（88）成立した《論衡》²⁹⁾に、「意識」は「すぐれた見解」を意味して初めに用いられた³⁰⁾。当時、劉王朝を神聖化させたり、孔子を宗教化させたりすることが盛んに行われ、前漢末には新しい儒家体系³¹⁾に導入された讖緯説³²⁾が次第に盛行した。これに対して王充が《論衡》を著して、鬼神の存在を神秘主義だとして強く批判した³³⁾。賢者のすばらしさは自然界の異変とは関係なく、自らの見識によるものであると主張するのに、“意識”という語を造ったのである。

例(1) 陰見黙識，用思深秘。眾人闊略，寡所意識。見賢聖之名物，則謂之神。

（《論衡・實知》王充 88）

日本語に訳すると、「（孔子などの）賢者が、何らかの物事を見たことがなくても、それに関しての情報を他方で知ると内心で暗記する。考え深くて外に現さない。一般大衆が粗忽で、そのような見識をほとんど持たない。だからめったにない物事の

29) 中国、後漢の王充著の思想書。30巻85編。実証主義の立場で、天人相関説を迷信論として否定し、陰陽五行説、災異説をとる漢代儒家思想を徹底的に批判した。

30) 何九盈、王寧、董琚、商務印書館編集部（2015）《辞源》商務印書館、p. 1517

31) 本来の儒家思想とは違い、道家、法家、讖緯説などの思想を混ぜ合わせようとしたものである。

32) 前漢から後漢にかけて流行した予言的な学説を言う。讖とは、謎によって未来を予言するもの、緯とは、陰陽五行で経書を神秘的に解釈しようとするものである。

33) 笠原祥士郎（2005）『王充の立場 序説』『北陸大学紀要』（29）、p. 156

名称を呼べる賢者を神と称する」³⁴⁾の意味である。この《論衡》での「意識」は、物事に対しての考え方や判断力を指すであろう。また自らが見たり聞いたりすることで得た経験と知識によって、物事を深く見通し、正しく判断する、優れた処理能力を持っているというところも暗示する³⁵⁾。この意味が一般に持続したのは民国時期³⁶⁾までに到り、古文と近代文献からもよく見られる。

例(2) 燕、趙之士聞之，謂我直相聚為賊，了無意識。 (《資治通鑑》司馬光 1085)

例(3) 不以光武為情有厚薄，亦不以郭氏為不當廢者，其意識遠也。

(《文献通考》馬端臨 1307)

例(4) 而賢者又添一番意識見解。 (《竜溪王先生全集》王畿 1498-1584)

例(5) 種種無意識之舉動，可發大噓。 (《澄齋日記》惲毓鼎 1882-1917)

例(6) 只恨這等好兵士，不象歐戰時候的用于敵國，卻拿來犧牲在這等無意識無作用的內爭之中。 (《民国演義》蔡東藩 1916-1926)

例(2)、(3)、(4)の“意識”は原義の意味を持っているが、文中ではそれぞれ「今までの見識」³⁷⁾、「広い見識」と「新たな経験による見識」の意味を表すと思う。例(5)、(6)の三字漢語の“無意識”は、例(2)の“了無”＋“意識”の組み合わせとは違う。例文から見ると、「行為」（“舉動”）と「内戦」（“内争”）はここで同様に修養や学識に欠けることによって生じたものを形容する。つまりここでの“無意識”は現代中国語や日本語の意味とは異なり、「見識が狭いこと」を意味する上でマイナス的イメージをも持っている。

以下の意味変化をより深く分析するために、この原義の語釈を【意味①—A】と標記する。また【意味①—A】から派生した意味に全部【意味①】をつける。

2) “意識”の意味変化

魏晋南北朝時代（220—589）ではの複数の王朝の交替に伴って、君臣間によく使

34) http://www.ziyexing.com/files-5/lunheng/lunheng_78.htmlにより。

35) 周逸仙(2015)「『論衡』の「実知」・「知実」から見えた理性主義について」『課程教材教学研究：小教研究』、p. 45

36) 1912～1949年。中国の近代を指す。

37) http://www.360doc.com/content/20/0927/21/31920670_937899833.shtmlにより。

われている【意味①—B】が派生した。本節では実例による語釈分析でここでの「意識」を「考えること」・「知ること」と定義する。意味的範囲から考えると、【意味①—B】は語源の【意味①—A】よりさらに上位的であることがはっきり見える。それは意味の接近による語義の拡大で、下から上へ向かうもの³⁸⁾——“意識”が、「すぐれた見解」の意味から「考えること」・「知ること」として使われるようになったことである。このように語源から派生した新語義が現れる。用例を挙げると次の通りである。

例(7) 臣之今啓，實無意識。 (《南齊書・豫章文献王伝》蕭子顯 502-519)

例(8) 以文俾識此意識者。 (《百官箴》許月郷 1200)

例(9) 廟堂不以人心為憂，政本不以人才為重，意識互歧，議論滋繁。
(《烈皇小識》文秉 1609-1669)

例(10) 諸武員之獻議，多無意識，不知所雲。 (《清宮禁二年記》裕徳菱 1903-1944)

例(7)は、「今日臣の上奏文には、本当に何の考えもない³⁹⁾」という意味である。“意識”は「考え」を表すが、特に「向こうに伝えたいこと」を指す傾向が強いと言える。例(8)、(9)、(10)はそれぞれ官吏・兵士、臣下たち、そして武官たちの考えを指していると思われる。原義の意味変化はここではっきり見える一方、【意味①—B】を持つ“意識”の定着性は、【意味①—A】と同様に近代まで続いていたということが分かる。

次に、唐王朝で現れた【意味①—C】における説明である。この意味分野の誕生は、使用者が指示物に対して抱いた主観的態度の変化によるものである。例えば、下記のように、父が“意識”を使って、息子が才知に富むかどうかのことを判断する。つまり心理的要因⁴⁰⁾で、主観的な評価が“意識”に付与され、また人間がどう

38) 例えば、「せともの」が「瀬戸で作られた陶器」の意味から「陶器の総称」になった。前田富祺(1985)『国語語彙史研究』明治書院、p. 798参考。

39) <https://www.my2852.com/ls/nqs9/027.htm>により。

40) 倉又浩一(1984)『言語学入門』大修館書店、p. 152参考。ある事柄に強い関心を持っていると、その慣用されていた表現を他の事柄にも適用しようとする気持に駆かれ、そこから意味変化が起こる。例えば、「女中さん」が「お手伝いさん」に言い換えられたのは、「女中」の持つ封建的ニュアンスを嫌って、「お手伝いさん」の持つニュアンスを受けやすいからである。同様に、「意識」の【意味①—C】に、「他人に強い期待や望みを持つ」というニュアンスが付与されたことが見られる。このように、人間の心情と結びついた意味変化が生じたと考えられる。

思うかの判断が加わったことになったのであると考えられる。

例(11) 高祖嘗試觀諸子意識，各使治亂絲。 (《北齊書·文宣記》李百藥 636)

例(12) 此兒意識過吾。 (《北齊書·文宣記》李百藥 636)

例(13) 丁大聲軀才拔起，意識豪略，咳如挺鐘，言同奔河。 (《今世說》王暉 1676頃)

例(14) 至於那些更不如你的人，是天生的沒有意識、不生氣血的畜生，那就無從罵起了。
(《九尾龜》張春帆 1926)

例(11)と(12)の“意識”は、“聰明才智”(「聡明で優れた才能と知恵」)を意味している⁴¹⁾。“諸子意識”と“此兒意識”はそれぞれ「息子たち」と「この子」の「才知」を表すと考えられる。そして例(13)の“意識豪略”とは、深謀遠慮の才知である。例(14)の“天生的沒有意識”とは、生まれつき頭が悪いという意味である。元来の【意味①—A】の「すぐれた見解」と比べると、聡明な判断能力を持っていることがはっきり分かる。つまり、意味範囲の面では、ここでの「意識」は「考える」という意味分野を超える傾向が強い。また、【意味①—C】は近代までも使われたことがあるので、その定着性は言うまでもなく強いと言えよう。次の【意味①—D】はこれと同じ史書から生じたものである。この意味分野は同様に、主観的な態度、或いは一時の感情を語に与えた結果によるものであると言える。

例(15) 意識不關貌，何謂醜者必無情。 (《北齊書·宋遊道伝》李百藥 636)

ここでの「意識」は「思想・感情」を指している⁴²⁾。例文は、「思想や感情は外観に関わりがない。何故容貌が醜い人なら必ず感情を持たないと言う」という意味である。「意識」が「考え方」という原義から新たに「考え」や、「物事に対しての気持ち」として用いられるようになり、この意味的範囲が【意味①—B】と似ている。「感情」の意味をも包括するので、別の分野の言葉で分類した。

次に清初期出現した新義である「気づくこと」を意味する「意識」は、原義と同じく「思考」の分野に属するものであるため、それを【意味①】から派生した語で

41) 古代漢語編集委員会(2000)《古代漢語詞典》商務印書館、p. 1859

42) 参照同上。

あると定義する。一方、コンテキストでの意味変化を明らかに説明するため、「気づくこと」を意味する“意識”を【意味①—E】、【意味①—F】と【意味①—G】に分けて表記する。

まず【意味①—E】の“意識”におけるもともとの意味的範囲は、連想によってここに転用されることが見られる⁴³⁾。それは意味分野の上で、元の語義特徴の一部のみを用いて、異なる分野に語義変化するということである⁴⁴⁾。詳しく言うと、思考面の言葉として「考え」を表す“意識”と「目的を持ってすること」を表す“意識”とに、「何かをしようとする気持ち」を意味する共通の部分があるからである。次に【意味①—E】における具体例は、

例(16) 稍有意識者，舉網投井。 (《明季北略》計六奇 1662—1687)

例(17) 他今日去會秦士林，不是無意識的閑逛，卻另有一層用意。
(《留東外史》平江不肖生 1916)

例(18) 金鳳假裝無意識地看了壹眼，果然有人。 (《三俠劍》張傑鑫 1920)

例(19) 如果說兇手是人，有意識的，所以應該和他計較。 (《上古秘史》鐘毓龍 1936)

例(20) 一种不可抑制的吸引力紧紧牵住了她，她开始有意识地在一段时间里，也就是杜喜春放学的那个时间里，借机到村头路口去转悠。 (《天幕下的恋情》肖云星 1992)

ここでの“意識”は「目的をもって何かをしようとする事」を指しているであろう。例(16)の“意識”は、「(他の臣下を)陥れようとする事」を表している。例(17)、(18)の“無意識”と例(19)、(20)の“有意識”は別々に「気づいていない状態」と「わざわざ気づいている状態」を示し、動作の自覚性や、目的性が明らかにされたということが分かる。

ところが、【意味①—E】の発達で、品詞推移に伴う意味変化が生じた。それは、名詞としての“意識”が「気づくこと」から、動詞の「気づく」へ変わる事、すなわち、類義的な語義に移っていくということである。次の文献から【意味①—F】

43) 前田富祺(1985)『国語語彙史研究』明治書院、p. 796

44) 国広哲弥(1982)『意味論の方法』大修館書店、pp. 114-116参考。例：「校門付近の樹木からは声が降るように落ちており」(井上靖『夏草冬濤』新潮文庫、p. 34)「降る」には、「雨・雪・あらわれなどの水分の小片」、「空から」、「頭上から」、「落下する」、「広い範囲にわたって」などの意義素が含まれるが、ここで、「広範囲にわたって」が活かされていると考えられる。

と【意味①—G】の例を見てみよう。

例(21) 等他意識到的時候，已被撞出好幾步去。 (《雍正劍俠圖》常傑森 1921)

例(22) 聽見東配房上有響動，他意識到來了夜行人。 (《雍正劍俠圖》常傑森 1921)

例(23) 面对这种社会经济异常凋蔽的情况，明太祖朱元璋和明成祖朱棣意识到，如不采取有力措施进行扭转，任其延续下去，对于新生的明王朝十分不利。

(《漫话讲洞大槐树》张崇发 1985)

【意味①—F】は、「事柄がどうなっているかを気にすること」の意味であると考えられる。例文の“意識”はそれぞれ「はねられること」（“被撞”）、「夜歩き人が来ること」（“來了夜行人”）と、「新しい王朝にとっては非常に不利であること」（“对于新生的明王朝十分不利”）に対しての注意を言い表す。すなわち何が発生することを気に留めることの意味である。

例(24) 他雖坐在龍椅上，卻並沒有意識到皇帝的責任重大。

(《武宗逸史》齋秦野人 民国時期)

例(25) 現在他意識到…顧此失彼。 (《雍正劍俠圖》常傑森 1921)

例(26) 我紧紧握住金老师的手，感觉到他手心里有个软软的泡，我意识到这是劳动的收获。

(《老师敲门来》田作文 1958)

例(27) 当三个小伙伴意识到他们的发现所具有的意义时，激动得喘不过气来。

(《小幻想家的惊人发现》张剑峰 1990)

【意味①—G】は「見つけること」という意味である。上述した例は各々に、「皇帝としての責任重大」「皇帝的責任重大」、「こちら立てればあちらが立たないこと」（“顧此失彼”）、「これは労働の成果」「这是劳动的收获」と、「彼等の発見の意義」「他们的发现所具有的意义」である。“意識”・“意识”はここで「ある物事の本質に対して気に掛けること」を意味することが確認できた。要するに、「物事を気にすること」という基本的な意味を持つこの三つの語義は、文中の指示対象や、よく使われる場面の付加によって、語感における傾向的な差ははっきりしている。上述した分析でまとめた【意味①】の意味の変遷は表5にまとめた。

表5 “意識”における華製語義の意味交替

	意味範囲	使用時期	定着性
意①—A	すぐれた見解	1世紀～近代	定着
意①—B	考えること・ 知ること	6世紀～近代	定着
意①—C	才知	7世紀～近代	定着
意①—D	思想・感情	7世紀	不定着
意①—E	目的をもって すること	清～現在	定着
意①—F	事柄が発生する 傾向を気に 留めること	近代～現在	定着
意①—G	見つけること	近代～現在	定着

表5から【意味①】の成立やその後の変容が別々に意味の拡大と、意味分類の転移によって明らかになっていることが分かる。また【意味①—E】、【意味①—F】と【意味①—G】の意味を持つ“意識”は、現在も定着した語として広く使われている。これに反して、新語の普及で、【意味①—A】、【意味①—B】、【意味①—C】、【意味①—D】の定着と関係なく、これらの語義を持っている“意識”は既に棄てられた旧語とされてしまったのである。

3) 日本における漢籍系“意識”の受容

(1) 受容した意味①—B

受容した漢籍系漢語としての「意識」が、それぞれ「心に識る」⁴⁵⁾、「心に悟ること、わかること、また考えること」⁴⁶⁾と定義される。【意味①—A】を持つ“意識”と同様に『論衡・実知』に由来するものであると記載されているが、この意味範囲⁴⁷⁾が上述した「すぐれた見解」を指す語源であった「意識」と比べるとさらに広く、逆に【意味①—B】とされた「考えること」により近い。では、【意味①】はいつ頃からどのように日本に移入されたのであろうか。これについてまずそれに関連する実例を調査した。

1860年代以降、漢字廃止運動⁴⁸⁾が日本で盛んに行われた。雑誌に掲載された「国

45) 諸橋轍次(1984)『大漢和辞典 四巻』大修館書店、p. 4517

46) 尚学図書(1989)『日本国語大辞典』小学館、p. 126

47) 柴田武他(2003)『類語大辞典』、講談社参考。「識る」、「悟る」と「わかる」は〔識別・分別〕、「考える」は〔思考〕という項目に分けられている。

48) 1866年、明治維新の前夜に、前島密が将軍の徳川慶喜に、漢字御廃止之議を献じた。

語国字問題」をめぐる論争の中で、漢学や儒教に言及するものは少なくなかった。その中、漢字に対して「批判」と「反批判」の二種類の声が上がっていた。それに伴って、漢字や孔子を再認識する流れが生じた。

明治後半、漢学・儒学に対する関心が高まり、それと共に、漢字の使用がまた注目されるようになってきた⁴⁹⁾。阪谷素⁵⁰⁾などの漢学者・儒学者が、新聞や雑誌を土台にして、漢籍系の“意識”を次のように日本に導入した。

例(28) 故に國の立は人の立による。人は心を以て主領とす、故に人の立は心の立による。心は意識の本體にして萬事に應じ功用極て多端にして混雜迷惑神經を轉倒し易し、故に其主を確立して方向目的明白ならざる時は事物皆狐狸妖怪となり轉倒錯亂して禽獸に劣るに至る。 (「政教の疑(一)」『明六雜誌<22>』阪谷素 1874)

例(29) 凡そ世の中に、「自分は兎に角、自分の腕で働いて飯を食つてゐる」といふ意識ほど嬉しいものはない。

(「男子の眼に映じたる鉄道院の女雇員」『女学世界』一六 玲瓏 1909)

ここでの「意識」は「考えること」を意味し、【意味①—B】と標記する。例(28)の「心は意識の本体にして」とは、「心の立は考えの立」という意味である。阪谷は、明治期の「文明観」と「開化観」の前で⁵¹⁾、国民の思考の方向性に言及した時、「意識」を使ってその考え方の重要性を読者に伝えたように見える。例(29)の「意識」は「自分は兎に角、自分の腕で働いて飯を食つてゐる」という「一時的な考え」を指していると思われる。日本語の近代化とともに、【意味①—B】の意味を持っている「意識」は日本語に受け入れられたが、旧語として衰退してしまったのである。

(2) 受容した意味①—E、F、G

19世紀後半に、鎖国状態が解消されると、西洋文明とともに、活版印刷術が日本

49) 方光鋭(2009)「明治期における国語国字問題と日本人の漢学観」『言葉と文化』、pp.187—192

50) 別名は阪谷朗廬。幕府から明治期の漢学者、儒学者。江戸時代末期は教育者として、明治維新後は官吏としても活動した。

51) 李セボン(2012)「阪谷素の「民権」理解——「学業」による「民権」確立の道——」『アジア地域文化研究』(8)、p.10

に入ってきた。同時期の中国で、翻訳と出版が再開され、漢籍の書物や漢訳洋書が大量に日本に入ってきた⁵²⁾。文明開化の風潮とともに、19世紀末20世紀初、「気づくこと」——【意味①—E】、【意味①—F】と【意味①—G】を意味する“意識”が受容語彙として日本の新聞や、雑誌に現れた。『日本国語大辞典』(1989 : 126)における解釈では、

「(イ) ある意図をもってすること。

(ウ) 自分やまわりのようすがどうなっているかに気づくこと。

(エ) 特別にある人や物事を気にかけること。」

と述べられている。これを参考にして、(イ)、(ウ)、(エ)をそれぞれ【意味①—E】、【意味①—F】と【意味①—G】と定義する。例を挙げると次の通りである。

例(30) 此の國粹を擴大するは普天下を利益する所以なるを意識せしめ、人間の大神職の如何に偉なるかを瞑悟せしむるもの、其の小悪徳を洗滌するの効ある、異しむべけんや。
(「戦争と文学」『太陽』坪内逍遙 1895)

例(31) これまでの新聞の発展は、社主が意識して遂げさせた発展ではなかった。

(『青年』一三 森鷗外 1910)

例(32) “開幕戦は特別なものではあるが、特別に意識したくない”と言う松坂の、微妙な投手心理が働いたのかもしれない。

(『Sports Graphic Number』橋本清・永谷脩 2002)

例(33) ここからは、プレデザイン段階でサイト設計を煮詰める際に、また実際にデザインを行う際に意識していただきたい考え方を解説していきます。

(『Web Designing』上野学 2004)

ここでの「意識」は【意味①—E】を表している。例(30)の「意識せしめる」は「意識させる」の同義語で、「意識をするように仕向ける」という意味でその行為の自発性を明確にした。すなわち自覚的に何かをしようとする点が、ここではつき

52) 沈国威(2016)「漢字文化圏における近代語彙の形成と交流」笠間書院、p. 34

り見える。例(31)の「意識」はこれと同様に、「自分自身の意図で行なわれること」を意味すると考えられる。つまり「新聞の発展」という事件の達成は、外からの影響によって進んでいったのである。例(32)と(33)の「意識」は現代語として使われる用法である。文中の「開幕戦」と「考え方」は「わざわざ気づくこと」を表すであろう。

例(34) けれどかの君のあれ程の意識したなら、屹度お泣きになるでせうね。

(「熱烈なる少女の恋」『女学世界』一六 内藤千代子 1909)

例(35) その時健三は相手の自分に近づくのを意識しつつ、何時もの通り器械のようにまた義務のように歩こうとした。

(『道草』夏目漱石 1915)

例(36) 私は自分が、首すじまで赤くなったのを意識した。

(『斜陽』太宰治 1947)

例(37) 選挙戦終盤になってようやく各政党のテレビ広告が目立って流れるようになったが、市民はむしろ検問所の数や米軍ヘリの増加などで選挙の近づいたことを意識しているという。

(『読売新聞』読売新聞東京本社 2005)

ここでの「意識」は【意味①—F】を意味する。例(34)と(36)の「意識」は、別々に「熱情」と「恥ずかしさ」に気づくことを示すと思う。すなわち「向こうの感情や気持ちがどうなっているのかを感じる」という意味である。例(35)と(37)は同様に「近づくこと」、つまり「向こうの動作や行為傾向を気づくこと」を表すであろう。両方とも「物事の大勢が何か特定の方向に傾くことを注意すること」を指していると思われる。

例(38) 吾人はた無限前程の窮盡を意識せん時、能く此の浩歎なきを得るや。

(『戦争と文学』坪内逍遙 1895)

例(39) 此為替を出奔の路用にする不孝を意識せずには居れなかった。

(『黒い眼と茶色の目』八徳富蘆花 1914)

例(40) すぐに子どもができたことが、不妊治療を始めたきっかけだ。あと半年で三十歳という年齢も意識した。

(『朝日新聞』大久保孝子・大藤道矢・斉藤泰生・朝日新聞社 2002)

例(41) もちろん、「病」を抱えながら前向きに生きるのはとても難しいことですが、死を間近に意識したときに、こころの大きな転換が起こることがあります。

(『がんと向きあうこころの本』坂田三允 2005)

例(38)～(41)は【意味①—G】に関する例文である。「窮盡」と「不孝」は、「物事が終わろうとするところ」、「親を大切にしないこと」を表す。文意を組み合わせると、怠ってはいけないということを指すと考えられる。そして「年齢」と「死」もそれらと同様に、特別にある物事を指すと言える。つまりここでの「意識」は、「気を付けるべきことの前で心にとめて考えること」を意味している。

ところが、日本語としての「意識」の【意味①—B】と【意味①—E】、【意味①—F】、【意味①—G】は、中国語のそれらと同様に、同じに〔思考〕という大分類に属するが、小分類から見ると別々に〔考えること〕と〔気にすること〕に分けられる⁵³⁾。

両語における近代までの意味のズレは多方面にわたっていると言える。例えば【意味①—B】の分野での中国語の“意識”は、臣下・官員を指示対象とする場合が多く見られる。彼らの思想や何か言いたいことを指すということから始まり、史の変遷で大衆の考え方も含めて意味する傾向がある。この使用範囲の拡大は清末民初(19世紀末20世紀初)ではっきり見える一方、同時期の日本(明治以降)においての【意味①—B】は例(28)、(29)のように、特別な指示対象を指す傾向がほとんどなく、単に一般的な考え方を示している。また、「気づくこと」を意味する【意味①—E】の“意識”は、名詞の機能を果たしており、「意識」は日本に導入された時からすでに、名詞由来動詞として使われたのである。つまり両語での相違点には品詞の違いが見られる。

53) 「意識」が「あることを気にすること」或いは「気を配ること」を意味する時、小分類では〔気にする〕に分けるが、大分類では〔思考〕に属する。辞書の意味によると、【意味①—B】は〔識別〕・〔思考〕に属するが、それに関しての実例から出てきた【意味①—B】なら、大分類では〔思考〕に含まれるが、小分類なら〔考える〕に分ける。大分類から見れば、【意味①—B】と【意味①—E】、【意味①—F】、【意味①—G】においての意味範囲は同じであるが、小分類と言え、別々に〔気にする〕と〔考える〕の分野に分けることがある。柴田武他(2003)『類語大辞典』、講談社を参考。

4. 仏典系「意識」について

1) 中国における仏典語“意識”の成立

梵語manovijñānaの訳語“意識”が、仏典語としてアジア各地に普及したのは紀元前後中国からである。『仏光大辞典』（2001:5449）では、これを「六識・八識の一で、意根によって起こる識」と定義する。漢魏西晋の時代で、インドや西域から伝えられてきた仏典などが中国語に移入し始めた。後漢の桓帝時代⁵⁴⁾に、安息国⁵⁵⁾出身の安世高⁵⁶⁾が洛陽に渡来し、中国で初めて経典を訳出した。彼が漢訳した『六方礼経』が在家者の論理道徳を説いたものであり、その中に“意識”が最初に仏典語とされ、しかも広範囲に用いられようとしたのである⁵⁷⁾。訳経に掲載された例文は次の通りである。

例(42) 貪婬於意識，痛想無厭足。 （《六方礼経》安世高 148～172）

例(43) 除此二障，意識稍明，内外經書，讀便解悟。 （《浄業賦 序》梁武帝 511頃）

例(44) 非眼所見非耳鼻舌身意識所知。 （《楞伽師資記》浄覚 708）

例(45) 意根生意識。 （《禅林僧宝伝 第九》 釈惠洪 1071～1128）

例文での“意識”は仏教から由来した訳語である。簡潔に言えば、眼や耳などの感覚器官がそれぞれとらえる色や声などのものを対象とし、それを認識する精神の動きや、心の動きという意味である。この概念は後漢に生まれた例(42)から由来する。現代日本語に訳すると、「意識は感受した刺激に溺れ迷い、貧って飽き足ることが無い⁵⁸⁾」を意味する。例(43)の“二障”（二障）も仏典語で、「心を乱す煩惱の障」と「智慧を惑わせる所知障」を示す。訳すると、「この二つの障を除去すると、心が少し清浄になり、どんな経書を読むと悟れることになる」という意味である。そして訳経の全盛期は隋唐宋時代であり、当時活躍した高僧たちが例(44)の禅宗の伝承史と例(45)の禅僧たちの伝記を撰した。例文の内容は「意識」のこの語釈

54) 桓帝(146年—168年)は、後漢の第11代の皇帝。在位期間は146年—168年である。

55) パルティア帝国。古代イランの王国。（紀元前247～紀元後224）

56) 西アジアのパルティアの王子であったが、仏教に志した。147年頃中国に渡り、約20年間に仏典の翻訳に従事した。

57) 「古籍コーパス」により。

58) http://www.horakuji.com/BuddhaSasana/Ekayana/roppourai_kyou/translated.htmlにより。

に等しい。それを【意味②—A】と標記する。

南宋以来の仏教は全盛期を過ぎたが、仏文化の伝承は多領域で依然として見られる。

例(46) 無色聲香味觸法，無眼界，乃至無意識界。 (《西遊記》吳承恩 1574頃)

例(47) 眼識色為眼識界，耳聞聲為耳識界，並鼻識界、舌識界、身識界、意識界，為六識界。 (《元代野史》田騰蛟 1912-1949)

例(48) 意識界者，前十八界也。無此意識則無無明，亦無無明盡，所謂無無明盡者，只是無明不起也。 (《中和集》李道純 13世紀80年代頃)

例(49) 到孔門只如枉木著繩，壹毫邪氣不得。禪家有理障之說。愚謂理無障，畢竟是識障。無意識心，何障之有？ (《呻吟語》呂坤 1593)

例(50) 無眼界，無意識界，無聲色香味觸法，不用醫。 (《目經大成》黃庭鏡 1774)

例(46)、(47)の“意識”は上述した「六識」についての解説で、別々に小説と野史に引用されたものである。その他の例は道教、儒教、医学に関わる古文であり、その中の“十八界”、“識障”、“眼界”などの仏典語も同様に、他分野の哲学思想や、医術などを釈明しようとした場合に用いられたものである。例えば例(48)は、【意味②—A】の機能で道家の中和思想における修業を詳しく述べた。これと同様に、例(49)の“無意識心，何障之有？”とは「意識の心も持ってなくて、どうして(儒家思想)を認識する障害があろうか⁵⁹⁾」という意味である。例(50)は「万物は空と感じる病人を治す必要がない」という意味で、別々に儒教と医学分野の思想理論における解説である。このように、“意識”の【意味②—A】が仏教文化の領域だけではなく、各領域で広い範囲に及んでいることが分かる。【意味②—A】の意味も現在まで続いていることが明らかである。

実際、意味分野の上で、仏典系の【意味②—A】は古代中国語の“意識”で、一貫して中心的位置を占めていたと言われている。前述した仏典語の“意識”の使用範囲の広さから見ると、この分野に関する社会的受容性がかなり高いということは言うまでもない。漢籍系の【意味①】のそれらに比べると、この分野の“意識”が

59) <https://www.pinshiwen.com/zhiyan/shenyin/2019051234179.html>により。

さらに高い定着性を持つと言っても過言ではない。17世紀前後、【意味②—A】の活発化と共に、“意識”が中国の医学界でも受け入れられるようになってきた。仏教が中国での発達とともに、当時盛んに使われた仏典語を追従する大衆心理⁶⁰⁾によって、“意識”が頻繁に使われていた。語義変化の視点から言えば、社会的要因で、当時注目されていた単語である“意識”が中医界に取り入れられた⁶¹⁾。ただし、この団体の中だけで一時的に通用していたことが確認されたのである。

ところが、元々仏典語としての“意識”は、「識」を意味するものである。この「識」について、『仏教大辞典』（2018）では、「物事を認識・理解する心の働き」と定義している。この「心の動き」の意味は、次の医学書での“意識”の語義特徴と非常に似ている。

例(51) 採用正立背靠牆姿勢，不息，行氣，運用意識導氣，使內氣從頭至足而止。

（《養生引導法》胡文煥 1368-1644）

例(52) 初禪之喜樂，由覺觀而生，與身識相應；此中喜樂，從內心生，與意識相應，

所以名同而實異。 （《心医集》祝登元 1650）

例(53) 途窮思返，斬絕意識，直截皈禪，通身汗下，險矣！險矣！

（《医問法律》喻昌 1658）

例(54) 觀此則諸癩可以意識矣。

（《内径博議》羅美 1675）

例(51)、(52)は心身養生に関する話題であるが、“意識”は「精神の動き」や「心の動き」を意味してそのまま使われたのである。例(53)の“斬絶意識”と例(54)の“可以意識”は「意識を切ること」と「意識を回復すること」という意味で、現在の新漢語である【意味③—A—イ】を持つ“意識”と非常に類義している。ゆえに、この意味分類を【意味③—A—イ】と定義する。特に注意すべき点は、例(51)と(54)のように、仏典語から派生した「心の動き」を意味する“意識”が単独に医書に引用されたことは少ない。この節で述べたほとんどの“意識”は仏典語とともに使用されている。調査の結果、この原義から派生した語義の使用率は非常に低い。

60) 米川明彦(1989)『新語と流行語』南雲堂、p.69参考。例えば、大宅壮一が言い出した「一億総白痴化」は大衆に受けた1957年の流行語である。それは、有名人が使った言葉を追従する心理的原因によるのであると言われている。

61) 倉又浩一(1984)『言語学入門』大修館書店、p.152

定着性の低さを考えると、この現象は仏典語の発展がもたらした医学用語への影響と判断しても無理ではなかろう⁶²⁾。

2) 日本における仏典語“意識”の受容

仏教が朝鮮半島を経て日本に伝来したのは6世紀中頃、宣化3年(538)若しくは欽明13年(552)である⁶³⁾。その後、推古8年(600)から遣隋使の派遣により、聖徳太子が仏教などの思想を受けて、日本仏教の原点と称される『三経義疏』⁶⁴⁾を著した。大乘仏教の精神が日本に伝えられた場合、仏教系漢語も次第に出現してきた。奈良時代の『続日本記』宣命に見える「観世音菩薩」⁶⁵⁾、「袈裟」⁶⁶⁾、「如来」⁶⁷⁾や、平安時代の『源氏物語』夕顔に見える「法師」⁶⁸⁾、「願文」⁶⁹⁾、「念仏」⁷⁰⁾などが受容語彙として使われ始めたのである⁷¹⁾。

12、13世紀に、禅宗もしくは律宗を修行する目的で入宋した栄西⁷²⁾・道元⁷³⁾などの僧侶が新仏教の思想を受容した後、戒律を重視すること⁷⁴⁾を主張し始めた。受容

-
- 62) “意識”が中国の医学分野で用いられることは、仏教の発展や、和製漢語が中国に逆輸入されたことと深く繋がっている。それで本章の第三節でまた補充して説明する。
- 63) 仏教が日本への伝来について、『日本書紀』には552年の十月、百済の聖明王が釈迦仏金銅像、幡蓋、経論などを贈ったと記されているが、『上宮聖徳法王帝説』では538年十月に聖明王が仏像と経典を贈ったと言われる。
- 64) 聖徳太子の撰とされる『法華経義疏』、『維摩経義疏』、と『勝鬘経義疏』の三書の総称。
- 65) ⑤Avalokiteśvara①spyan ras gzigs dbang phyugなどの訳語。仏教における代表的な菩薩で、大悲の精神を象徴する菩薩である。観世音菩薩を信仰すると、様々な利益を受けることが説かれている。『Web版 新纂浄土宗大辞典』(1943)を参照。
- 66) ⑤kaṣāyaの訳語。インドで仏教修行者と他宗教の修行者とを見分けるために定められた制服。参照同上。
- 67) ⑤①tathāgata①de bzin gshegs paの訳語。過去の諸仏の如くに来る者、すなわち仏のこと。参照同上。
- 68) 僧のこと。仏法に精通したもの。参照同上。
- 69) 法会の主催者である願主が、追善・算賀・逆修・造寺造像供養といった法会に際し、仏に対して述べる誓願を記した文章をいう。日本では、7世紀半ばの経典奥書や仏像の光背に刻された銘文等が願文の初期の例になる。多く作成されるようになるのは、9世紀半ばからであり、10世紀から13世紀にかけて多くの願文が作成された。願主自らが記す場合もあるが、平安時代の願文は、願主より依頼を受けた文人官僚が願主の願意を汲んだ内容を起草し願主の認証を得る場合が多い。工藤美和子(2008)『平安期の願文と仏教的世界観』思文閣出版を参考。
- 70) 仏を念ずること、憶念すること。仏の相好や功德を心に思い念じることは、観念の念仏といい、仏教一般において重要な行法として展開する。参照同上。
- 71) 沖森卓也(2010)『はじめて読む日本語の歴史』べれ出版、pp. 99-152。
- 72) 平安末・鎌倉初期の僧。日本臨済宗の開祖。
- 73) 鎌倉時代の僧。日本曹洞宗の開祖。「座禅こそが最高の修行である」と主張した。
- 74) 沖森卓也(2010)『はじめて読む日本語の歴史』べれ出版、p. 188参考。当時の旧仏教に対して「素質を重んじ、厳格に規律を守り、生死を一如と見て泰然自若としている」態度が、武士の精神と通じ合っているということである。

の仏典語としての「意識」が、貴族・武士・僧侶の間で歌われた歌謡に現れた例を見ると、

例(55) 諸法は意識の成す所や。 (『宴曲 五』明空・月江ら 1296頃)

『日本国語大辞典』(1989)と『新纂浄土宗大辞典』(1943)の解釈を参考にして、「意識」の語義は上で述べた【意味②—A】に等しいことが分かる。例(55)の「諸法」も仏典語で、「世の中に存在する一切の有形及び無形の事物」を示す。つまり、「世間万物に意識が宿っている」という意味であろう。これは仏教思想の唯識論における説教であり、自己およびこの世界のあらゆる諸存在は客体として実在しているのではなく、個人的に構想された識以外に存在するものはないという哲学思想である⁷⁵⁾。この唯識論の日本への伝播は、中国からインドに渡った唐代の僧、玄奘三蔵⁷⁶⁾と深く繋がっている。彼が漢訳した『成唯識論』⁷⁷⁾を中心にして法相宗⁷⁸⁾が立てられ、それで中国における唯識の研究が始まった。その後、法相宗が日本に伝えられ⁷⁹⁾、それとともに唯識論などの仏教学も日本に伝わってきたのである。唯識論に関する例文を挙げてみよう。

例(56) 若独散意識縁自界五塵等。 (『成唯識論本文抄』作者不詳 1291-1443⁸⁰⁾)

例(57) 独散意識縁自界五塵相分為レ撰性境将如何。

(『成唯識論同学抄』作者不詳 1217以後)

例(58) 独散の意識とも闇昧の意識とも云へり。 (『貞享版沙石集』無住 1283)

75) 渡辺俊彦(2014)「思想としての唯識論—最澄と徳一の論争—」『中央大学社会科学研究所年報』(19)、pp.176—178

76) 唐代の中国の訳経家。法相宗の開祖。また元代に成立した小説『西遊記』の題材になったと言われるインド紀行『大唐西域記』により、西域の事情を紹介した。

77) 法相宗・唯識宗が所依とする論典の一つ。

78) インド唯識派の思想を継承する、中国の唐時代創始の大乗仏教宗派の一つ。

79) 日本仏教における法相宗は南都六宗の一つとして、遣唐使により7世紀から数次に渡って伝えられた。そして8-9世紀に隆盛を極めた。

80) 太田久紀(1972)「日本唯識研究——『本文抄』と『同学抄』——」『印度学仏教学研究』、p.40 参考。『本文抄』も『同学抄』も撰述の時期は正確には不明であるが、『本文抄』については正応4年(1291)以前成立、嘉吉3年(1443)頃まで加筆とか言われ、『同学抄』については、建保年(1217)頃のものと言われている。いずれも唯一人の著者の撰述ではなく、長い論議の歴史を踏まえて集成されたものであることは間違いなく、成立の時期に多少の前後があったとしても、背景となつた基盤の唯識学界は共通のものであったということが出来る。

「独散意識」とは、眼、耳、鼻、舌、身の前五識と区別される第六番目の心の識である。例(56)は「独散の意識が自界五塵を縁ずる」という意味で、例(57)は「独散意識が縁ずる時の相分は性境かどうか」を意味し、唯識論において取り上げられた議論のテーマと言われる⁸¹⁾。例(58)の「闇昧の意識」は、「暗い考え」を表すと思われる。「闇昧」は仏典語ではないが、一般語として仏典語の「意識」と組み合わせられて用いられることができる。このような使い方は延慶2年(1309)頃、『金沢文庫古文書』に収録されている『行位章釈残裏文書⁸²⁾』でも見える。そこで「意識」が「都」と組んで、「都意識」として使われた。このように、仏典語としての「意識」の活用が次第に現れてきたのである。

次は、承久3年(1221)5月15日に書かれた奈良国立博物館蔵の例文である。

例(59)無色声香味触法、無眼界、乃至無意識界。 (「奈良国立博物館蔵」1221)

ここでの「意識」は同じく「六識や八識の一つ」を意味する。これは当時盛行していた経文であり、上述した例(46)の《西遊記》にも引用された。

また漢訳した『般若心経』⁸³⁾の書き下し文と仏教に関する講義にある「意識」が次のように見られる。

例(60)眼耳鼻舌身意もなく、色声香味触法もなく、眼界もなく、乃至意識界もなし。

(『般若心経』訳者未詳 年代不詳)

例(61)「人間は考える動物」だといいますが、この考えの主体はこの意識であるわけ
です。

(『般若心経講義』高神覚昇 1938)

例(62)鼻の香を嗅ぐも。舌の味を嘗るも。身の觸を感ずるも。又其微細の香味を知り。
微細の冷煖澁滑を知る事能はざるを推知すべし。況や吾人の意識が。

(「佛教入門(一)」『太陽』1895)

81) 太田久紀(1972)「日本唯識研究——『本文抄』と『同学抄』——」『印度学仏教学研究』、p. 802

82) 紙背文書ともいう。古文書の裏に残された別の文書。新しく書かれた文書や記録に対してもとの文書を指す。

83) 『般若波羅蜜多心経』の略。鳩摩羅什訳の『摩訶般若波羅蜜大明咒經』が現存中最古の漢訳と言われるが、現在、玄奘訳とされているものが最も広く普及されている。

長澤弘隆⁸⁴⁾は解釈において例(60)の「眼も耳も鼻も舌も身体も意もなく、形も声も香りも味も触れられるべきものも認識対象もない。眼の世界もなく、意による識別の世界に至るまでない⁸⁵⁾」を意味解釈している。また高神本人は、「この心の働きの、一切のものを広く認識するわけだ」と、例(61)の「意識」を分かりやすく述べている。例(62)は例(60)と同様に、「意識」が「五感」によるものであると述べている。

次に、『大乘起信論』⁸⁶⁾の漢訳文“所謂、衆生依心意意識。”における解説文である。

例(63) 心に依って意・意識が転ずる。 (『大乘起信論』 訳者不詳 年代不詳)

竹村牧男(1983:807)はここでの「意識」に「業識」・「転識」・「現識」・「智識」・「相続識」と、5種あると論じた⁸⁷⁾。「業識は不覚⁸⁸⁾心が起動したところ、転識は能見⁸⁹⁾を生じたところ、現識は一切境界を現じたところである。智識は染浄法⁹⁰⁾を分別するのであり、相続識は念を起しつづけるものである」が説かれている。

次に『撰大乘論』⁹¹⁾と『唯識入門』に見えた「二識説」における例文である。

例(64) 所依止を伴う意識の識は、見であると知られるべきである。

(『撰大乘論』 訳者不詳 年代不詳)

例(65) 唯識仏教は、心の構造として眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六つの表層の心と末那識・阿頼耶識の二つの深層の心という八つの心識を考え、それによって私たちの心の実態を解明しようとした。 (『唯識入門』 多川俊映 2013)

84) 真言宗智山派満福寺住職。

85) 『般若心経』梵文和訳ノート。http://www.mikkyo21f.gr.jp/kukai-ronyu/nagasawa/new-55.html
により。

86) 大乘仏教に属する論書。著者は馬鳴(アシュヴァゴーシャ)と伝えられているが、西インドから中国に渡来した訳経僧真諦が撰じたものであるという説もある。

87) 竹村牧男(1983) 「『大乘起信論』の心識説について」『印度学仏教学研究』(62)、p. 807

88) 仏の智慧に目覚めないこと。

89) 主観の状態。

90) 古代インドのパラモン教徒が誕生、結婚など生涯の各時期に通過儀礼として家庭内で行った宗教的儀式。

91) 大乘仏教の唯識説を体系的に論述した無着の論書。

竹村（1983）の解説によると、上述した例文は「意識とその所依止（意・末那識）⁹²⁾が見⁹³⁾で、他の一切識（眼識等）は相⁹⁴⁾である」と言う。すなわち、意識及び意のみ見で、他の一切識は相となるのである。

まとめて見ると、【意味②—A】を持つ「意識」が日本に定着したことが確認されている一方、多くの場合に日本の仏教学の分野で流行っていることが分かった。

【意味②】と言え、仏教文化の普及とともに現在までも中日両国で定着した語義として認められるが、語彙力の面では多少違いが存在する。仏典語としての“意識”は古代の中国では儒教、道教、文学、ひいては医学などの領域に引用されたことが多々あり、語の中心的な意味の機能を担っていると言っても過言ではない。それに比べて、日本語の「意識」は仏典語として受容されてから一貫して仏教関連の文献に出現したとは言えないが、主に僧侶・貴族・武士を中心に使われたと言える。

5. 和籍系「意識」について

1) 日本における和籍語「意識」の成立と発達

本節では日本で作られた和製漢語「意識」の概念を、【意味③】と定義する。この意味の成立は、西洋文化が日本に導入されたことによるものである。徳川幕府の鎖国体制によって、キリスト教に関係のある文化交流には厳しい制限が設けられた。当時西洋の中で唯一交易が許されたオランダは書物の中で、キリスト教に関係ないもの、つまり医学・天文学・物理学・数学・物理学・測地学・化学など物質的・実用的な学問に限って研究することが認められる。蘭学が興隆することになったが、哲学などはその対象ではなかった⁹⁵⁾。幕末は蘭学に引き続き洋学を受容する際に、オ

92) 我に執着して存在の根拠となる心の働き。意識がなくなった状態にも存在し、迷いの根源とされる。

93) 見解のこと。Lusthaus Dan（2002）によると、仏典語の見とは、思考、感覚、行動によって強く形づくられ影響を及ぼす、過去の体験の解釈である。

94) 見られるものの姿。

95) 寅野遼（2013）「日本における哲学——西周による哲学の受容を手がかりに——」『東洋大学大

ランダ語の翻訳によって自然科学の分野においての新たな知識がもたらされようになった。江戸時代に日本に入ってきた西洋の技術や文化などが蘭学として次第に地方に普及した。当時、西洋医学に関しての新概念に相当する語彙があったわけではなく、訳者たちは中国語を借用して、和製漢語を多く創作した。『解体新書』（1774）では、「神経」、「視覚」、「動脈」、「十二指腸」、「軟骨」などの医学用語が作り出された。そこで、[意識]が原語の“innerlykezinnen・innerlicheSinnen”の訳語——「内感覚」⁹⁶⁾として最初に現れたのである⁹⁷⁾。まずこれを【意味③—A—ア】と標記して検討してみる。

次に江戸時代の蘭学資料に収められた翻訳医学書、『解体新書』（1774）と『医範提綱』（1805）における例文である。【意味③—A—ア】を表す「意識」が和製漢語としてそこに登場した。

例(66) 夫れ頭は円にして一身の上に居す。意識の府なり。(略)頭の蔵する所の者は脳及び意識なり。
(『解体新書』 前野良沢・杉田玄白ら 1774)

例(67) 凡ソ神経ノ用二用アリ。一ハ意識ノ用ヲナシ、一ハ運化ノ用ヲナス。意識ノ用ヲナス神経ハ、身体諸部己ガ意ニ随テ運用スルノ諸器に循リテ視聴臭味、感触、知覚、動揺、屈伸等ノ官能ヲナサシメ。(『医範提綱』 宇田川玄真・藤井方亭ら 1805)

例(66)の「意識の府」は「内感覚の中心」を表し、また「頭の蔵する所の者は脳及び意識なり」とは「頭の内におさめ貯えるものは脳、及び内感覚である」という意味であると考えられる。例(67)は「意識」の定義についての解説である。作者が「神経」を「意識」と「運化」に分けて述べたとき、「意識」は「感覚器官を動かせる」機能を果たすことであると明確に説明した。すなわち『解体新書』の「意識」と同様に、例(67)の「意識」も「内感覚」を意味していることが分かった。

しかし、この意味分野の「意識」はその時代で、京大精神科の浜中淑彦（1985）

学院紀要』、p. 4

96) 『日本国語大辞典』（1989）の解説によると、内部感覚とは「身体内部の刺激源から出される刺激によって身体内の状態や変化を意識させる感覚」という意味である。尚学図書（1989）『日本国語大辞典』、小学館を参考。

97) 浜中淑彦（1985）「『解体新書』の訳語「意識」をめぐって——東西医学における「意識」概念変遷の一側面」『日本医史学雑誌』31(2)、p. 209

が定着した医学訳語かどうかについて疑問を抱いた。今日の医療分野で、「意識障害」⁹⁸⁾や、「意識レベル」⁹⁹⁾が医学用語として広く用いられているが、江戸後期以後の蘭学文献では「意識」がほとんど用いられていない。その代わりに「神識」、「運営」¹⁰⁰⁾、「神思」、「思念」¹⁰¹⁾などと邦訳されたことが多々あると述べた。つまり、「内感覚」を意味する「意識」は最初に医学界の訳語として用いられたが、語の使用率が低くて定着しなかったのである。

一方、明治時代に入ると、新たに「神経」という概念が与えられた後、「意識」がまた医学界で用いられるようになった。『Web版世界大百科事典』(2000)によると、医学新語としての「意識」は「通常目覚めていて、外界から与えられた刺激を正しく認識して適切な行動に関連づけていく諸過程を維持する機能の全体」と定義されている。これを【意味③—A—イ】と標記する。例は次の通りである。

例(68) 蓋心臓ノ運営ハ。吾人意識ノ作用ニ由リテ。(『初学生理書』塩原恵助 1882)

例(69) 意識障害及虚脱ノ救急處置 (『臨床彙講(8)』久賀六郎譯 1907)

例(68)を訳すると、「神経中枢の機能で心臓が動く」という意味であろう。例(69)は、「意識が清明ではない状態や、気力が失せてぼんやりしている状態になった傷病者を救助すること」の意味と言われている。

大正以降の医書や、雑誌、小説、ニュースサイトなどで見えた例文では、

例(70) 老人は町を歩いてゐる途中、突然心臓麻痺の發作を起して番町の家へ擔込まれた。彼はそのうちに意識を回復して、枕頭に侍してゐるかゝりつけの長野醫師に、『儂はどうしたのだね?』と訝しげに訊ねた。

(「(探偵小説)二ツの影」『婦人倶楽部』一二 松本泰 1925)

例(71) 意識不明の患者や衰弱している患者の場合 (『姿勢と体位』柴田明子 1951)

98) 意識障害とは、外界からの刺激に反応できる機能が低下した状態である。

99) 意識レベルとは、患者の意識障害の程度である。

100) 「神識」と「運用」は、宇田川玄(1973)訳の「西説内科撰用」(J. de Gorterの“Gezuiverde Geneeskunst” 1744)による訳語である。浜中淑彦(1985)「『解体新書』の訳語「意識」をめぐる——東西医学における「意識」概念変遷の一側面」『日本医史学雑誌』31(2)、pp. 209—211参考。

101) 「新思」と「思念」は、緒方洪庵(1858)訳の『扶氏經驗遺訓』(C. W. Hufeland “Enchiridion medicum” 1836)による訳語である。参考同上。

例(72) 「意識レベル」の低下を活用しよう。

(『人間を変える：部下を変え自己を革新する心理学』守部昭夫 1968)

例(73) 子供を墮すこともさることながら、麻酔をかけられて意識がなくなることらしい。
(『愛のごとく』渡辺淳一 1984)

例(74) そのまま、ぴくりとも動かない。完全に意識を失っているようだ。

(『魔宮の攻防』栗本薫 2003)

例(75) 意識失い嘔吐、記憶あいまい、新型コロナ、脳まで侵入か？

(『朝日新聞』市野塊 2020)

例(70)～(75)の「意識」は、「感覚器官から中枢に伝達する知覚神経」を指していると考えられる。例えば、例(70)の「意識を回復する」とは、「神経中枢の機能をよい状態にさせること」、例(71)の「意識不明」とは、「刺激に対する反応が損なわれている状態」、例(72)の「意識レベル」とは「刺激に対する反応の程度」、例(73)の「意識がなくなる」と例(74)の「意識を失う」とは「脳機能低下状態で生じた失神」、例(75)の「意識失い嘔吐」とは、「意識がなくなってから吐くこと」である。

以上の例文から見ると、この意味分類の【意味③—A—イ】を持つ「意識」は単独に使われたこともあるし、他の語と組み合わせて医学用語の機能を果たしたこともある。医学新語としての「意識」は、このように普及し定着していたことがはっきりしている。

2) 和製漢語である「意識」の意味変化

『解体新書』の刊行後、鎖国下の日本では外国から新しい文化や事物を積極的に受容しようとする風潮が高まってきた。明治期の文明開化の思潮で、既存の漢語に新しい意味を与えて創作した新造語が多くなってきた。その風潮に従って、導入された新概念である【意味③】が次第に定着した。栗島記子¹⁰²⁾(1996)、手島邦男(2001)と徐水生(2009)は“consciousness”の訳語として生まれたのは啓蒙思

102) 栗島記子が、『英和字彙第二版』(1882)、『和訳英字彙』(1888)、『和訳字彙』(1888)と『新漢訳英和辞典』(1955)では、「意識」がconsciousnessの訳語として出てきたということを証明した。

想家である西周の作であると述べている。また「意識」が和籍系漢語として定着したのは、井上哲次郎（1881）が書いた『哲学字彙』によるものであるという説もある。

【意味③】について『日本国語大辞典』（1989:126）における解釈では、

「目ざめているときの心の状態。狭義には、自分や自分の体験していることやまわりのことなどに気づいている心の状態。哲学では中心課題であり、特に観念論では自然や物質の独立性を否定し、これを根源的なものとする。」〔解体新書（1774）〕〔哲学字彙（1881）〕

とあり、『大漢和辞典巻四』（1984:4517）には、

「心理学で、心が覚醒して知覚ある常態をいふ。即ち知覚・情意等、すべての心意作用の 総称。consciousness」

と述べられている。【意味③】の意味分化を詳しく検討するため、ここで上述した哲学用語とされた「意識」を【意味③—B】、心理学用語とされた「意識」を【意味③—C】と標記する。しかし、『解体新書』（1774）に由来する「意識」は「内感覚」を表し、医学界の用語として造られたということは前節ではっきり確認したが、『日本国語大辞典』（1989）では載っていない。一方、哲学・心理学の翻訳語である「意識」において、西周が撰した『生性発蘊』（1873）に次のような記述が見える。

「英コンシウスニツス仏コンネサンス日ベウツトサイン蘭ベウツトヘイト二意識と訳ス。」

ここで、「意識」は英語“consciousness”の訳語である。ところが、翻訳者としての西周は江戸幕府の一員として、文久2年（1862）にオランダに留学し、心理学や実証的な哲学に触れた後、様々な訳語を造語した。日本で使われている哲学用語の中に、西の訳によって成立したものが多いと言われている¹⁰³⁾。辞書的説明か

ら分かるように、哲学的概念を持つ「意識」は観念論に由来するものである。西周が哲学に関心を持って以来、まずドイツ観念論やイギリスの経験論に注意を向け¹⁰⁴⁾、その後現実的・実証的なものに移行した¹⁰⁵⁾。

一方、19世紀中期以降、心理学が徐々に哲学から独立して新たな学問として成立した。1879年、ドイツ哲学者であるヴントが、世界初と言われる心理学実験室を創立した。ヴントは研究対象を「直接経験すなわち意識consciousness(英)・Bewusstsein(独)である」と定義した。

1870～80年代、【意味③—B】と【意味③—C】を持つ「意識」が次々に哲学、心理学の分野に再登場した。和製語義【意味③】の成立に関して、意味変化における歴史的要因¹⁰⁶⁾から見ると、蘭学やドイツ観念論、実験心理学などと接触した時、その学門のある新概念を表現する語が日本語にない場合、既存語の「意識」を当てることが出てきた。このように、「意識」に新しい意味が生じ、意味変化が起こったことになる。一方、心理学が急発展して哲学から独立することに伴って「意識」における指示物の進化¹⁰⁷⁾が、【意味③—B】から【意味③—C】への語義変化から見える。英語の“consciousness”・ドイツ語の“Bewusstsein”などが、単に哲学用語の役割を担うだけでなく、心理学用語の機能をも果たし始めた時、日本語の「意識」自体も多様に進化していた。例を挙げると、明治以降の雑誌や文学作品によく見られる。次に哲学用語の「意識」についての例文である。これから派生した意味分化を考えると、ここでこれを【意味③—B—ア】と標記して検討する。

例(76) 吾等、眞とに其威光を拜し、肅然として戒愼の念ひ止むことなし。同胞よ、同胞よ。此の意識果して妄なるか。(「皇天の冥助」『女学雑誌』四十 巖本善治 1894)

103) 菅野幸恵(2007)「明治・大正期の日本における西洋の心理学の受容と展開」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』(15)、p. 53参考。

104) 宇野美恵子(2008)「西周の教育思想における東西思想の出会い—沼津兵学校時代を中心に—」『北東アジア研究』3(19)、p. 5

105) 石井雅巳(2018)「翻訳と日本語——西周の言語哲学——」『北東アジア研究』(29)、p. 179

106) 倉又浩一(1984)『言語学入門』大修館書店、p. 151参考。例えば、キリスト教がギリシアに入ったとき、ギリシア語に「天使」を表す語がなかったため、ヘブライ語「天使」の意味に転用された。

107) 前田富祺(1985)『国語語彙史研究』明治書院、p. 794参考。例えば、「車」は、中古・中世には「牛車」を指し、近世には「荷車」、近代には「人力車」、現在は「自動車」というように指す対象が代わってきているのである。

例(77) 即ち、人類が最高、最眞、最美の意識皆な此中にあるを以ての故に、宗教と道徳との觀念は、太はだ緊要、最とも麗はしきものと云ふ也。

(「無神なし性悪なきの弁」『女学雑誌』四十四 作者未詳 1895)

例(78) 而して我が帝國二千五百年以上の歴史は、徹頭徹底、千年一日の如く、此國民任務の觀念を吾人の意識に顯現せしむるものにして(略)。

(「日本帝國の任務」『太陽』中西牛郎1895)

例(79) それには、「マクガバン・レポート」と、健康への意識を高め、医療費の膨張を抑えるために成立した「DSHEA法」が大きく関与しています。

(『とっても知りたい!最新サプリメントかんたん事典』蒲原聖可 2005)

ここでの「意識」はそれぞれ「言動を戒め慎まないこと」、「宗教と道徳」、「國民任務」と「健康」に対しての主観的な認知を指すと考えられる。例(76)の「果して妄なるか」、例(77)の「最高、最眞、最美」、例(78)の「顯現せしむる」と例(79)の「高め」と組み合わせると、気づくべき哲学的思考である「意識」を他人に伝えたいということだろうと思う。

【意味③—C】が認められた例は次の通りである。

例(80) 動機は寧ろ本來的の本體規定にして、決して痛苦として意識中に現はるるにあらず、却りて斯かる作用に對する感動的強迫として其の中に現はるるものなり。

(「フリードリッヒ、パウルゼンの倫理學」『太陽』湯本武比古 1895)

例(81) その時のこの男の心もちから云へば、饑死などと云ふ事は、考へる事さへ出来ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

(『羅生門』芥川龍之介 1915)

例(82) 前夜の針仕事に根をつめすぎたのか、それとも小石川の下田歌子の歌塾の雰圍氣にどこかなじめない違和感を意識の底で感じていたためであろうか。

(『前田愛著作集』亀井秀雄 1989)

例(83) 見られているとわかっているのに一哉に愛撫されると、意識がそちらに集中してしまう。

(『悪魔なあいつにちょっと』藤村裕香 2003)

これらの「意識」は同じく心理作用が起きた状態を指すと言える。例(80)の「意識」は精神的にある苦しみ——「痛苦」に対しての感覚であろう。例(81)の「饑死」

は不幸な事件とはっきり見えるので、「男」の非志向的な気持ちが「意識」によって現れるということが表現される。例(82)の「意識」はしっくりしない感じを示している。そして例(83)は精神状態の集中を表すと思われる。まとめて見ると、ここでの「意識」は精神層面上的な各種の感覚や体験を意味している。

ところが、80年代の啓蒙風潮により、【意味③—B—ア】の後にくる【意味③—B—イ】が成立した。それは上位分野から下位分野への変化¹⁰⁸⁾による意味分類の縮小であると考えられる。これについて、『日本国語大辞典』(1989)には、「罪の意識」、「社会の一員としての意識」を挙げ、「ある物事に対してもっている見解、感情、思想など、社会的、歴史的な影響を受けて形成される心の内容」と解釈する。また、「多く内容を示す連体修飾句がついて用いられる」と説明している。

上述した辞書の語釈¹⁰⁹⁾を参考にして、ここでは【意味③—B—イ】を「【意味③—B—ア】によって得られる社会的態度」と定義する。例文は以下の通りである。

例(84) 自意識が餘り明瞭して、どうも構想に酔ふことが出来ぬ。

(「職業として筆もつ女の一夜」『女学世界』垣わらび 1909)

例(85) 都より吹く風も早長い歳月が流れ、田舎の馭者と學生達の間には歴然たる社会意識の存在があつた。(「文部省懸賞当選映画ふるさとの歌一日活新作一」『婦人倶楽部』作者未詳 1925)

例(86) 階級的意識によって導かれて始めて、それは階級のための芸術となるのである。

(『自然生長と目的意識』青野季吉 1926)

例(87) 犯罪意識なく不正受給 コロナ給付金、申請簡素化を悪用

(『朝日新聞』蒲原聖可 2020)

「自」(自己)、「社会」、「階級的」、「犯罪」について用いられた「意識」が、個々の内容に関しての見解や態度を示していると考えられる。例(84)の「自意識」とは、周囲に関する意識と対立し、外的存在と区別された自分自身についての意

108) 前田富祺(1985)『国語語彙史研究』明治書院、p.798参考。例えば、「はな」が花の総称から、「サクラの花」の意味で用いられたり、「つま」が配偶者の意味から、「妻」の意味に変わったりすることである。

109) 『大漢和辞典』(1984)の説明によると、本稿で論じた【意味③—B—イ】が【意味③—B—ア】に包括される。諸橋轍次(1984)『大漢和辞典』、大修館書店を参考。

識を意味し、例(85)の「社会意識」と例(86)の「階級(的)意識」とは、社会や階級の成員に共有されている意識という意味である。例(87)の「犯罪意識」とは、罪を犯そうとする考えである。いわゆる【意味③—B—イ】の、規定されている特有の観念や思想と見られることもある。

表6 「意識」における和製語義の意味交替

	意味範囲	使用時期	定着性
意③—A—ア	内感覚	江戸	不定着
意③—A—イ	感覚器官から中枢に伝達する知覚神経	明治～現在	定着
意③—B—ア	目覚めているときの心の状態	明治～現在	定着
意③—B—イ	ある社会的態度	明治～現在	定着
意③—C	心が知覚を有している状態	明治～現在	定着

表6によると、【意味③】の成立と分化は語の意味分類の転換や、意味範囲の縮小によってはっきり見える。【意味③—A—ア】の定着性は医学界の専門家から否定されたが、【意味③—A—イ】、【意味③—B—ア】、【意味③—B—イ】と【意味③—C】は定着した新語として現在も広く使われている。

この内容をもとにして、日本語の意味変化を次の表にまとめる。“=”で意味の等しさを表し、“→”で意味の交替で生じた廃語と、それに代えられた新語を区別する。

表7 日本における「意識」の意味変遷

語種	意味成立の原因	古語の意味	現代語の意味
漢籍系漢語	漢学者・儒学者の引用	×	意味①-B →意味①-E、F、G
仏典系漢語	中国から仏教の伝来	意味②-A =	意味②-A
和籍系漢語	西洋医学・哲学の導入	意味③-A-ア →	意味③-A-イ、B-ア、B-イ、C

表7で見ると、漢籍系の【意味①】、大分類の中でいくつかの意味分野は長い間に定着したものとされるが、【意味①—A】と【意味①—C】は日本に伝来したことがない。そして【意味①—B】は受容されたが短期間での使用された結果、日本語として不定着になったと判断される。本研究の調査範囲内で、【意味①—B】は明治初期の漢学者・儒学者である阪谷素が最初に使ったのであり、その時の「意識」は語源である“意識”と同様に名詞の機能を果たしていた。またその後受容

された【意味①—E】、【意味①—F】、【意味①—G】は動詞として機能していた。一方、【意味①—D】は母国語としても定着できず、中日交流で普及の可能性は極めて低い。

仏典由来語としての【意味②—A】は、日本に輸入されてから強く定着した。7世紀から大乘仏教における唯識論の伝来に伴い、「意識」を含む仏典も日本に伝わった。仏典語としての「意識」の使用は13世紀以降の文献から多く見られ、特に仏教学関係の文献から出てきた。しかし、歌謡や説話集でも例が見られるため、使用範囲は広くないが仏教界だけに留まらなかった。

江戸時代、西洋医学が盛んになり、ヨーロッパ由来の医学概念を表すため既存語の「意識」が翻訳借用語として作られた。明治期における西洋哲学の受容と展開で、哲学用語を表す【意味③—B—ア】と心理学用語を表す【意味③—C】が訳語として用いられるようになった。また、言語的要因による意味分化で、【意味③—B—イ】が【意味③—B—ア】から派生した。

3) 中国における和製漢語「意識」の逆輸入

【意味③】の中国語の“意識”の語源は、日本由来の“consciousness”の訳語であるということは《漢語外来語詞典》(1985:390)で述べられている。上述したように、語釈は《辞海》(2009)や《現代漢語大辞典》(2007)と同様に、「人間の脳が客観的・物質的世界に対しての反応・感覚・思惟などのすべての心的過程の総称」と記述されている。つまり、現代中国語の“意識”は日本語の「意識」と同じように哲学・心理学用語と認められている。

それ以前に、“意識”は中国の医学分野で用いられた。それは清朝末期の留学体験がもたらした影響と密接に関係している。19世紀の70年代の中国では、西洋の近代科学や技術を導入し、自強を図ろうとした改革運動の推進で、国費留学生の派遣の政策を取った。特に1898年に起こった戊戌の変法¹¹⁰⁾により、明治維新をモデルにしたい中国から多くの留学生が来日した。彼らは日本語を学習し、近代の文明を積極的に受け入れていた¹¹¹⁾。そして、明治以降、定着してきた医学用語としての

110) 中国清末、1898年に起こった政治改革。明治維新をモデルとした近代化革命を目指す自強運動と言われている。「百日維新」とも呼ぶ。

「意識」が中国に逆輸入された。

例(88) 意識障碍及之虚脱之救急法 (《学海・医学界》王曾憲 1908)

例(89) 乃意識障碍之較悪者 (《学海・医学界》王曾憲 1908)

「意識」と「障碍」との組み合わせはここで一つの医学用語とされた。第三節で述べた「意識障害」と比べると、語形は異なっているが意味が同じである。つまり医学領域で用いられた【意味③—A—イ】が中国に輸入されたのである。例文を掲載した雑誌の編集者らは当時、日本で留学している学生だった。文章を書いた人はその中の一人で、東京帝国大学医科大学で研修したこともある。“意識”が和製漢語として中国語の雑誌に多く見られる。例えば、“潜意识”「潜在意識」(『新教育』卷一1911p.90)、“國民意識”「国民意識」(『東方雜誌』1916p.43)、“兒童意識”「兒童意識」(『教育雜誌』卷十1918p.79)の“意識”は、【意味③—B—イ】の「ある社会的態度」を指している。他方、“人具此意識”「人間はこの意識を持つ」(『中国商業函学校課芸』1916卷十二p.16)の“意識”は哲学用語としてある対象に気づいている心の態度を表すと言える。このように、19世紀末から20世紀初頭にかけて、大量の外来語が日本から中国に伝来した。特に新文化運動¹¹²⁾以降、新思想・文化の革新に伴って、新語の使用が広く定着している。【意味③—A—イ】の例から定着を確認する。

例(90) 其次體溫速升，頭痛眩暈，或作嘔吐，漸漸意識朦朧，陷於昏睡譫語(略)劇烈者三日即死。(《醫學衷中參西錄》張錫純 1909)

例(91) 極度的心神不寧，驚恐不安的憂郁悵惘的狀態，易於受刺激，記憶力衰退，時不時地有幻覺，輕度的意識模糊。(《嗎啡》米·布爾加科夫 1927)

例(92) 内转移会出现内压增高、头痛、恶心、呕吐、抽搐、大小便失禁、意识淡漠，每误诊为结脑、原发脑肿瘤、脑梗塞、椎动脉供血不足。(《科技文献》赖茂生 2004)

111) 清水稔(1995)「中国人留学生と日本の近代」『佛教大学総合研究所紀要』1995(1)、pp.120-137参考。清朝末期、留日学生の派遣政策は戊戌の変法によって確立される。

112) 1915年から1923年にかけて、中国で展開された思想・文化・文学の改革運動。儒教などの封建文化に反対し、民主と科学を提唱した。それによって、当時の近代化の普及に大きな影響を及ぼした。

例の“意识朦胧”「意識朦朧」、「意识模糊」「意識不明」と“意识淡漠”「不明」は同じで、「まわりの肉体的刺激や、精神的刺激に対する適応な反応が損なわれている状態」を意味している。“意識”・“意识”はここで医学用語として受容され、感覚器官における意識を指していると考えられる。

次は【意味③—B】と【意味③—C】の例である。

例(93) 後期創造社の批判和前期創造社の駁斥，在意識上完全不同。

(《眼中釘》郭沫若 1930)

例(94) 一般的業農者，依然沿用著數千年來傳統的生產方法，沒有應用機械和集農經營的意識。

(《我國農村經濟的現狀》大炎 1932)

例(95) 事实上，意识是以自然界为前提的，“物质先于精神，无意识先于意识”。

(《试评费尔巴哈的认识论》林京耀·陈荷清 1965)

例(96) 在小学生的意识里，他们总是这样认为，在学校学到的才是真的。

(《人与社会的探寻》罗国安·赵金昭 1988)

ここでの“意识”は哲学用語として、「ある対象を認識する心の状態」を意味して用いられている。例(93)の“意識上完全不同”は、「別々の立場に立っての観念は異なる」という意味で、例(94)の“意識”は、機械を応用することと集約農業（“应用机械和集农经营”）における認識であろう。例(95)の“意识”は、客観的実在が反映した心理的な活動¹¹³⁾を指し、例(96)の“意识”は小学生の主観的な認知を意味していると思う。

例(97) 克西正在思索瓦盆裏秘密在出神，給祖誠的父親的話喚回了意識¹¹⁴⁾。

(《最後勝利》周毓英 1930)

例(98) 黑麻臉受著一陣清涼，漸漸回復了他的意識，勉強睜開眼，覺得火辣辣漲痛非凡。

(《山坡上》周文 1935)

例(99) 他发现，一般人在60~70岁时渐渐显出意识迟缓，思考障碍，是因为他们从30岁起便有意无意地冷藏自己的脑子不用，但对于许多善于灵活运转脑子的老人，60~70岁

113) 河西章(1962)「マルクス主義哲学における「意識」の意義について：唯物論的心理学の出発点としての」北海道大学人文科学論集』(1)、p. 46

114) 近代からの中国語の例文を簡体字で表記する。

时思考能力毫无逊色于年轻小伙。

(《来自人脑迷宫的数据》陈宝树 1987)

(96)～(99)の“意识”は、「精神面に起こった知覚」を意味する心理学用語である。例の“喚回了意識”と“回復…意识”はそれぞれ「意識は回復した」と「意識を回復する」という意味である。前者は、ぼんやりして気持ちが集中しない状態（“出神”）から戻ることであり、後者は肉体的刺激——すがすがしさ（“清凉”）に対する反応を新たに起こすことを意味すると思われる。また例(99)の“意识迟缓”は「意識面の反応の鈍い状態」を指すであろう。

ところが、多くの辞書では中国語の“意识”の【意味③—B—イ】を【意味③—B—ア】に分類している。例えば《辞海》（2009）と《現代漢語大辞典》（2007）では“民族意识”（民族意識）を挙げて【意味③】を解説している。前述した辞書的解釈と用例分析から見ると、ここでの“意识”は【意味③—B—イ】の「意識」と同義で、「ある社会的態度」を意味している。意味の変遷を詳しく検討するため、本文では“民族意识”のような組み合わせを取って【意味③—B—イ】の用例とする。例を挙げると、

例(100) 於此可見當時朝臣風氣之錮塞，國民對外意識之暗陋也。

(《外交小史》作者不詳 1904—1912¹¹⁵⁾)

例(101) 所謂自我意識，在此種普通感覺上占有頗強的根據。

(《心理學概論》魏肇基 1932)

例(102) 故價值意識與文化意識，畢竟同一精神生活之表現，亦同為教育之動機也。

(《教育哲學》範KL 1933)

例(103) 所以，使命感与前卫意识，“真实才是音乐的中心问题”的美学观，贯穿着全部表现主义的音乐。（《土肥美夫、谷村晃编〈表现主义美术与音乐〉》李际东 1985)

例(84)～(87)と同じで、“意识”は「対外」、「自我」、「価値」、「文化」、「(芸術などの)前衛」との組み合わせによって、それらの物に対する自覚的な態度

115) 『外交小史』には、1904年4月から12月にかけてアメリカで開催されたセントルイス万国博覧会に及んだことがあり、その上清朝末期で編纂された野史と見なされることもある。それでこの作品の創作年代を1904から1912までと推測する。

を表していると考えられる。“自我意識”は例(84)の「自意識」と同じ意味を持ち、“對外意識”は「外国に対する態度」、「價值意識」は「物事がどのぐらい有用であるかについての判断」、「文化意識」は「民族・地域・社会の成員が共有している生活様式・精神的活動に対する認識」、「前衛意識」は「芸術的なものを先駆的・実験的に試みようとする考え」を意味していると思われる。

中国語の“意識”の意味変化を次の表にまとめた。

表8 中国における“意識”の意味変遷

語種	意味成立の原因	古語の意味	現代語の意味
漢籍系漢語	無神論の宣伝	意味①-A、B、C、D、E、F、G →	意味①-E、F、G
仏典系漢語	仏教の伝来	意味②-A、B →	意味②-A
和籍系漢語	戊戌の変法に伴う 留日学生の派遣	意味③-A-イ ¹¹⁶⁾ →	意味③-A-イ、 B-ア、B-イ、C

表8から見られるように、1世紀の中国で無神論の宣伝で、【意味①—A】の“意識”が作られた。この〔思考〕という意味分野における語義は近代までも次第に拡張し、また分化してきた。清朝末期から新語¹¹⁷⁾の出現で、旧語である【意味①—A】、【意味①—B】、【意味①—C】と【意味①—D】を持つ“意識”が完全な廃語となってしまったのである。【意味①—E】は多くの場合に“有意識”(「意識的」)、“無意識”(「無意識」)として用いられている。そして【意味①—F】、【意味①—G】の形成と共に、名詞の“意識”(「意識」)から動詞の“意識”(「意識する」)への転換が生まれた。つまり品詞転換¹¹⁸⁾はここからだと思なされる。

2世紀の初め、イランから大乘仏教の伝来で、“意識”の語形が仏教の訳語とな

116) この意味分野での“意識”の最初の使用時期は20世紀初期(清王朝の末期)であるが、本研究ではこれを古語と定義する。

117) 『国語学大辞典』(1980)は、「新語」を次のように定義した。「新しくその言語社会に現れた、または既存の事物や概念を、新しく表現するため作られ、また正当なその語の自然な語義変化とは言いがたい度を越えた新しい意義を与えられて、その存在権を社会によって認証された語。それまでそのような語形、そのような意義としてその言語社会の語彙の構成要素ではなかった語が新たに出現した時、新語と称される。したがってそれより過去の話ことばにも文字資料にも見当たらない。新語の中、内容や語形の新奇さ、面白さでその時の人々に好まれて口ずさまれ、文字言語にも登場する二至ったものは、特に流行語と称する。」国語学会(1980)『国語学大辞典』東京堂、p. 528を参考。

118) 転換(conversion)とは、語形成の過程の1つで、接辞付加を伴わないで語の品詞を変えることである。たとえば、名詞の fish(魚)に対する動詞の fish(魚)を釣る)は、名詞から動詞への転換と考えることができる。市川真矢(2014)「英語における転換についての一考察:過去30年の「動詞化された名詞」から」『常葉大学短期大学部紀要』(45)、p. 75参考。

り、広い範囲に普及されるようになった。17世紀前後、医学分野で用いられたことがあり、その【意味②—B】は仏典語の【意味②—A】からの派生で、一時的によく使われていた意味と言えよう。

20世紀の初期、戊戌の変法の実施に伴って日本から受容された【意味③—A—イ】は同じく医学用語として使われたが、新しい西洋語の概念が与えられたため、新時代の幕開けとともにその受容性がより高くなった。その後、【意味③—B—ア】、【意味—B—イ】と【意味③—C】ともに西洋からの新哲学を表すために受容され、広い範囲に流行ってきた。

現代語として定着した後、日本語の「意識」と中国語の“意识”のほとんどは【意味①】と【意味③】の機能を担っている。両語が持つ意味的範囲はほぼ同じであるが、若干の誤差が存在する¹¹⁹⁾。“意识”・「意識」を含む語から見れば、日本語の「意識」は多くの語と組み合わせさって新しい語となり、その造語力はより高い¹²⁰⁾。

6. まとめ

以上、中国語の“意识”と日本語の「意識」の意味の変遷について、次のことが分かる。

- ① “意识”も「意識」も、漢籍由来+仏典由来+和籍由来という三重性格を持っている。
- ② 漢籍系の中国語の“意识”はまず、古代の道家思想における無神論の宣伝で「すぐれた見解」を意味するものとして作られた。古代と現代とを比較してみると、古代に存在していた「すぐれた見解」、「考えること」、「才知」が近代までには使われなくなっている。同様に古典的意味として「目的をもってすること」、

119) 語のニュアンスから見ると、日本語の「意識」はマイナス的なイメージを指すことができる。例えば、「虚偽意識」など。これに比べると、中国語の“意识”はこの機能を果たさない。

120) 「虚偽意識」、「黒人意識」、「意識清明期」、「目的意識」、「意識野」、「交代意識」、「意識一般」、「相手意識」などは中国語に存在していない言葉である。

「気に留めること」、「見つけること」が晩清や近代から語彙の中心をなし、現代までにも使われるようになった。明治の漢学者・儒学者が上述した「考えること」意味の“意識”を日本に導入したが、新旧の交替でこの意味の範囲が消滅し、その代わりに「目的をもってすること」、「気に留めること」、「見つけること」が漢籍系の「意識」の中心的な意味になった。その間、品詞の派生に伴う意味変化——名詞が動詞として用いられることは、この三つの流行した意味によって発生した。

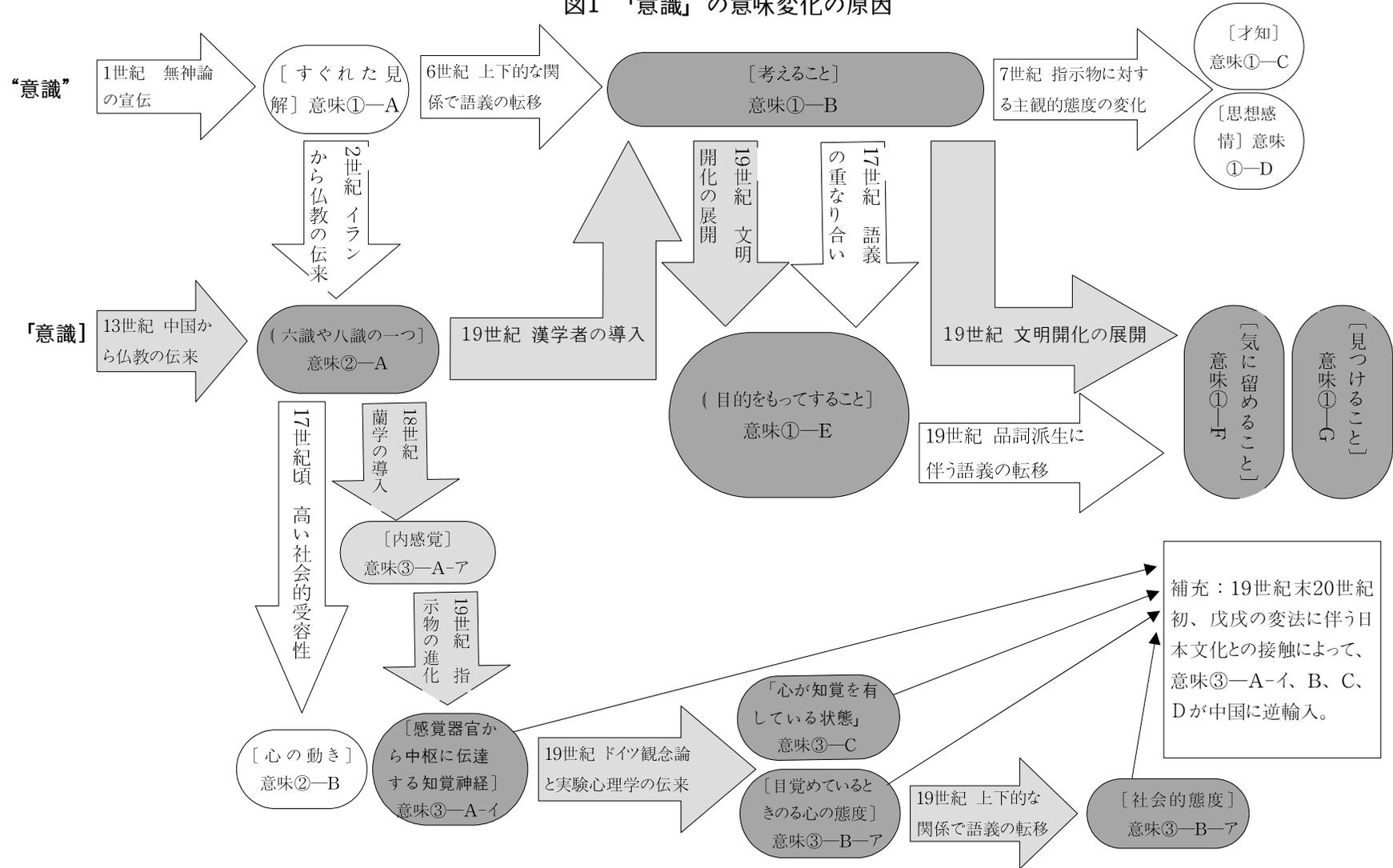
③ 仏典に由来した“意識”は、元々大乘仏教における梵語の訳語として漢訳仏典に現れ、仏教の唯識論の伝播で頻繁に使われていた。その後、日本での仏教文化の伝来と普及につれて、「意識」が仏典語として受け入れられようになった。現在仏教の盛行と共に、「第六識」や「第八識」を意味する“意識”・「意識」の定着性は、中日両語で言うまでもなく強い。他方、仏典語から派生した「心の動き」を示す“意識”が医学分野で使用されたこともあるが、この意味分野はやはり定着しないと言われている。

④ 和製漢語としての「意識」は、最初「内感覚」を意味する訳語として、江戸時代に収められた蘭学資料——医学に関する訳本に見られる。しかし古語から近代語へと転換する過度期にあたって、新造語への違和感から「内感覚」という意味分野が許容されなくなり、誕生してから早々に衰退してしまった。しかし、明治期に「感覚器官から中枢に伝達する知覚神経」が新しい語義として付与され、医学界で受け入れられてから医学用語として定着した。その後、ドイツ観念論と実践心理学の流入とともに、「意識」は各領域の訳語として度々使われ、「目覚めているときの心の状態」、「心が知覚を有している状態」、「社会的態度」を意味する機能を果たすことになった。同時期に中国語では医学・心理学・哲学用語として日本語から受容され、中国語の新語となった。

⑤ 「意識」の意味変化において、まず歴史的要因から考えると語源である漢籍系の「すぐれた見解」、仏典系の「六識・八識の一つ」と和製系の「内感覚」は東・西洋哲学の発展に伴って形成され、そして和製語義の「目覚めているときの心の状態」と「心が知覚を有している状態」の誕生、特に西洋哲学の変化がもたらした影響によるのであると見られる。また、言語的要因における語義の部分転移で、「考え」や「気づくこと」が「すぐれた見解」から派生し、「社会的態度」が「目覚め

ているときの心の状態」から派生した。品詞変化に伴う語義変化で、「気づくこと」が動詞から名詞へ変わっていき、心理的要因における情動の力で、「才知」と「思想感情」が造られた。そして社会的要因で、「心の動き」が中医学の分野で受容されていたことが分かった。一方、日本語における漢籍語・仏典語の受容と中国語における和製漢語の受容は、両国側が異文化との接触によるのであるということを明らかにした。以上の語義変化の原因を図にして見ると次の通りである。中国語の“意识”の意味変化を白色で標記し、日本語の「意識」の意味変化を薄灰色で標記した。そして共通する意味分野は濃灰色で標記する。

図1 「意識」の意味変化の原因



第二章 「思想」の意味の変遷

1. 「思想」の出現と展開

本章は漢・和の二つの面で、漢籍・和籍由来語としての“思想”と「思想」における意味変化を中心に、意味分野ごとの形成と展開及びそれに関連する中日両国における他言語の受容の歴史を検討する。語源を言えば、古い時代の中医学を中心とした養生学の宣伝に伴って、「考えること」を意味する“思想”が、心理的・精神的健康を守る話題と共に誕生した。そこから派生した漢籍系の語義は二つあるが、日本に伝来したのは動詞としての語源と、「考え」を意味する名詞である。そこで日本語の「思想」は本来動詞であるということがはっきりとした。

ところが、漢籍由来語が日本での活躍と、和籍語「思想」の創立はほぼ同じ時期である。明治初期から西洋の哲学、特に自由主義の導入で、これらの新語が急速に流行した。日本語の「思想」は「思想する」という動詞の形でしばしば使われていたが、次第に華製語義の「考え」、和製語義の「哲学的意識」や「思考の筋道」を意味する機能を担ってきた。同時期の中国も近代化を達成していく過程で、和製漢語としての「思想」における各語義を逆輸入した。その結果、現代語としての“思想”と「思想」は、類似した意味的特徴を持つと考えられる。

2. 辞書における「思想」と“思想”の意味

以下、日本語の辞典から「思想」の意味分野を表9でまとめた。

表9 辞典における「思想」の意味分野

	日本語大辞典 (1989:1149)	大漢和辞典 (1984:4399)	デジタル大辞 泉(2020)	大言海 (1980:130)	学研漢和大辞典 (1982:464)	本研究での意 味分類
①-A-ア	心に思い浮かべ ること。思いを めぐらすこと。	おもひやる。おも ひめぐらす。 《盤石篇》(3世 紀)に由来。			思い巡らす。 《盤石篇》(3世 紀)に由来。	考えること
①-A-イ	考え。	考え。意見。	考え。	名詞。心二、 思ヒウカブル コト。カンガ エ。	考え。	考え
②-A-ア	思考されている 内容。『哲学字 彙』(1881)に由 来。	物事を考え、判 断し、推理する 心の作用。其の 結果得た意識の 内容。	考えることによ って得られた、 体系的にまと まっている意 識の内容。	知識作用ノ一 形式。思惟、 又ハ、思考ト モ云フ。	哲学で、思考・ 判断・推理など によって得た筋 道のたった意 識。	意識的内容
②-A-イ	統一された判断 体系。					統一された判 断体系
②-A-ウ	社会、人生など に対する一定の 見解。		人生や社会につ いての一つのま とまった考え・ 意見。			社会、人生な どに対する一 定の考えや見 解

表9のように、日本語の「思想」はここで5種類の意味分野に分けられている。
【意味①—A】における二つの意味分野は漢籍系であるが、【意味①—A—ア】が
《盤石篇》(3世紀)から由来する。また【意味②—A—ア】の初出は『哲学字彙』
(1881)であることが分かった。各辞典からまとめた中国語の“思想”の意味分野は
次のようである。

表10 辞典における“思想”の意味分野

	辞源 (2015:1474)	辞海 (2009:3689)	近現代漢語新 詞源詞典 (2001:246)	漢語外来語詞典 (1985:322)	デジタル現代 漢語大詞典 (2007)	本研究での 意味分類
①-A-ア		思考;思慮。(考 えること。思い巡 らす。)《素問》(前 7-3世紀)に由来。				考えること 思い巡らす
①-A-イ					念头,想法(考 え、意図。)	考え、意図
①-B	思量,想念。(心 にかける。懐かし む。)《盤石篇》 (3世紀)に由来。	想念;思念。(懐 かしむ。思い慕 う。)《盤石篇》(3 世紀)に由来。	想念。(懐かし む。)		想念,怀念。 (懐かしむ。思 い慕う。)	懐かしむ、 思い慕う
②-A-ア		观念。思维活动的 结果。属于理性认 识。(意識。思惟 活動における結	思维活动产生的结 果或形成的观点。 (思惟活動から生 じた結果や見	思维活动的认知 成果,即理性认 识。(思惟活動に おける認識成果。	思维活动产生的 结果或形成的观 点。(思惟活動 から生じた結果	思惟活動から生 じた結果や見方

		果。理性的認識。)	方。)	理性的認識。)日本に由来。	や見方。)	
②-A-イ					某种思想体系(ある思想体系。)	統一された判断体系
②-B					思想意識。指道徳品質方面(道徳品質に関する意識。)	道徳品質に関する意識
②-C					思维的条理脉络。(思考の筋道)	思考の筋道

表10によると、中国語の“思想”における意味分野は7種類に区分されている。その内三つは漢籍系、他の四つは和籍系の意味分類である。辞書記録によると、【意味①—A—ア】の出典は《素問》(前7—3世紀)、【意味①—B】の出典は《盤石篇》(3世紀)である一方、【意味②—A—ア】が日本から輸入された外来語であるということははっきりしている。ただし、中国語の辞典における漢籍系の記載は、日本語の辞典記録と大変異なっている。これについて、次の節で詳しく検討する。

一方、和籍系の意味分野は、日本語の辞書では三つあり、中国語の辞書では四つある。第四節の研究から、日本語の「思想」も中国語の“思想”も、和製語義を五つの分野に分類することができる。

3. 漢籍系「思想」について

1) “思想”の成立

《辞海》(2009:3689)の記録によると、“思想”という語は、中国の春秋戦国時代に編纂された《素問》¹²¹⁾に由来する。《素問》と《靈枢》¹²²⁾を合わせたものは《黄帝内経》¹²³⁾と呼ばれている。当時の医学論文を綴り合せたもの《内経》は紀

121) 『素問』(紀元前722—221)は問答形式で記述され、医学のみならず、易学、天候学、星座学、気学、薬学、運命学などについても論じられている。

122) 『靈枢』(紀元前722—221)は『素問』より新しい時代のもので、実践的に記述されている。内容は診断・治療・針灸術などに重点を置いている。

123) 《黄帝内経》(紀元前722—221)は中国の古典医学書である。この本は黄帝と岐伯ら6名医との問

元前2世紀以前の医学理論と知識を系統的に総括したものである。内容は生理・衛生・病理・養生にまで至り、現存する中国最古の医学書と言われている。その書中の「形体と精神の関係」¹²⁴⁾について言及した“思想”が、冒頭の「上古天真論」の項目に最初に現れた。

例(104) 外不勞形於事，内無思想之患，以恬愉為務，以自得為功，形體不敝，精神不散，亦可以百數。 (《素問 上古天真論》作者不詳 紀元前722年-221年)

辞書での“思想”の解釈は“思考；思慮”(「考えること」や「思い巡らすこと」)を意味する。本章ではこれを“思想”における【意味①—A—ア】と標記する。日本語に訳すると、「外では体を過労させず、内ではところが患わないようにする。心を落ち着かせて、自らが得た功で満足する。すると肉体は疲れず、こころも消散することがない。歳は百まで全うするのである」¹²⁵⁾という意味である。ここでの“思想”は文脈から見て健康における心理的、精神的要素として「あれやこれやと思い回すこと」を指しているであろうと思う。

道教の創始者張陵¹²⁶⁾と三国時代¹²⁷⁾の曹操¹²⁸⁾が、長生きを願うことについて次のように言及している。

例(105) 瞑目思想，欲从求福，非也。 (《老子想尔注》張陵 142年頃)

例(106) 願螭龍之駕，思想昆侖居。 (《精列》曹操 200-220年¹²⁹⁾)

答形式で構成された。編集者や編集年が明らかではないが、複数の人により書かれたという説があり、また新石器時代からの医療活動を始めたという説もある。

124) 郝曉卿(2013)の「『黄帝内経』の叡智—世界記憶遺産の現代的な意義—」『福岡県立学人間社会学部紀要』22(2)から分かるように、《黄帝内経》で論られた養生保健は、肉体と精神の調和ということである。すなわち自然法則に従い合わせ、情緒を調整し、精神を養い、正気を保つことである。pp. 8-9参考。

125) 王財源(2020)「東洋医学における形神観について——こころと身体——」『国際フォーラム 人文学論集』38(1)、p. 3

126) 張道陵という別称もある。中国における原始道教の源流と目される五斗米道の開祖。123歳で没したという。教法の中心は治病である。

127) 中国で、後漢の滅亡後、魏・呉・蜀の三国が鼎立した時代。魏の建国(220年)に始まり、晋の統一(280年)まで。

128) 字は孟徳。後漢末期の丞相・三国時代魏の始祖魏王である。廟号は太祖、諡号は武皇帝。権謀に富み、詩をよくした。いずれも楽府という音楽の伴奏を伴った歌詞を作った。

129) 詩文の最後に見た“年之暮奈何”(「年が暮れ行くのをどうすればよいのだろうか」)から分かるように、《精列》は曹操が晩年に書いたものである。

ここでの“思想”は「考えること」を意味する。例(105)は、「眼を閉じて物事を考え、福を求めようとするのは間違いない」¹³⁰⁾という意味で、例(106)は、「いやむしろ願わくば若き竜の背に乗って、崑崙に住まんことに思いを馳せよう」¹³¹⁾という意味である。つまり崑崙山に棲む仙人のように長生きすることを考えることの意味であろう。

唐宋の詩詞や明清の小説からも同じような意味の例が見える。

例(107) 睡覺心空思想盡，近來鄉夢不多成。 (《早興》白居易 823)

例(108) 思想厚利高名。 (《更漏子·庭遠途程》杜安世 960年-1127)

例(109) 那婆娘把東西收拾起，思想道：“我把石家兩個丫頭作賤勾了，丈夫回來，必然廝鬧。” (《醒世恒言》馮夢龍 1627)

例(110) 騎著驢，玩著山景，實在快樂得極，思想做兩句詩，描摹這個景象。 (《老殘遊記》劉鶚 1903-1906)

例(111) 我的确努力想象过，我曾望着一间木板房，闭上眼睛，思想从一个房间走到另一个房间。 (《生死朗誦》本哈德 2009)

“思想”は「考えること」を意味し、使用の範囲が日常生活までに及んでいる。例(107)の“思想盡”は単に「何も考えないこと」を示し、例(108)～(111)は、「物事を思い浮かべること」を意味すると思われる。詳しく言うと、(108)の“思想厚利高名”とは、「ぼろ儲けをすることと、よい誉れを得ることを考える」、(109)の“思想道”とは「考えながら話す」、(110)の“思想做兩句詩”とは「詩を作ろうとすることを考える」、(111)の“思想从一个房间走到另一个房间”とは「この部屋から別の部屋に入ろうとすることを考える」という意味であると考えられる。

このように紀元前から現在まで、“思想”における【意味①—A—ア】の定着が認められる。

130) 陳霞(2020)「道家から道教まで——『老子想尔注』における解説」『文哲史』(5)、p.3

131) <鉄平訳>により。<https://ameblo.jp/koutoku17/entry-12656405619.html>

2) “思想”の意味変化

(1) 原義の拡大

【意味①—A—ア】の普及とともに、品詞派生による意味変化が生じた。前述した「考えること」や「思い巡らすこと」を意味する動詞が「考え」や「意図」を意味する名詞として用いられるようになった。この新語義を【意味①—A—イ】と標記して検討していく。調査の結果、元代の雜劇¹³²⁾の発展に伴って、演劇用語がより民間化・大衆化になり、それと同時に日常用語としての“思想”の意味がより広くなった。明末清初になると名詞としての機能をしていた【意味①—A—イ】の活用がさらに見られる¹³³⁾。

例(112) 魯智深道：“灑家也是這般思想。” (《水滸伝》施耐庵 1594)

例(113) 徐言、徐召說道：“好時不直得幫扶我們，臨死卻來思想，可不扯淡！” (《醒世恒言》馮夢龍 1627)

例(114) 瑤瑟點頭道：“這個與我思想最合。” (《女媧石》海天獨嘯子 1627)

例(115) 正不解其作何思想，有何感觸，而遽改病態為歡容。(《玉梨魂》徐枕垂 1912)

例(116) 失敗的感覺，被欺騙的感覺，混合著報復的憤恨，突然膨脹起來，驅走了其他一切的思想。(《野薔薇》茅盾 1929)

例(117) 1990年，广东省高校共组织了8批同学到基地去参加社会实践活动，每批同学们的思想收获总结会，方苞同志都要亲自去听。(《中国青年報》作者不詳 1991)

例(112)の“這般思想”とは「こんな考え」、例(113)の“來思想”とは「考えが出てきた」、例(114)の“我思想”とは「私の考え」、例(115)の“作何思想”とは「何の考えを持つか」、例(116)の“其他一切的思想”とは「他のすべての考え」、そして例(117)の“同学们的思想”とは「学生たちの考え」という意味であると言える。つまり16世紀から現在まで、“思想”の【意味①—A—イ】の定着がはっきりしている。

(2) 新しい意味分野の形成

132) 元雜劇。伝説や故事などを内容とする歌劇。

133) 方氷氷 (2015) 「“思想”の語義の変化」『西江月』、pp. 1-6

《辞海》(2009:3689)と《辞源》(2015:1474)を参考にして、「懐かしむこと」、「思い慕うこと」や「心にかけること」を意味する“思想”は、曹植¹³⁴⁾の《盤石篇》に由来している。当時、曹操の病死後、曹植と兄弟との戦いは終わらず、223年雍丘¹³⁵⁾へ遷移されてから、曹植は悲運を嘆いて《盤石篇》を作り、その「悲しみ」の感情を“思想”に入れて新語義とした。これを【意味①—B】と定義して分析する。

例(118) 仰天長太息，思想懷故邦。乘桴何所志，吁嗟我孔公。

(《盤石篇》曹植 223年)

日本語では「天を仰いで長歎息し、思い想いて故邦を懐かしむ。筏に乗りて何の志す所ぞ。ああ、我が孔公。」¹³⁶⁾という意味である。つまり“思想”はここで故郷を懐かしむことを表していると言われている。

また三国時代以後の用例を見ることにする。

例(119) 思想不解説，孤負舟中杯。 (《號州南池候巖中丞不至》岑参 726-769年)

例(120) 露冷水流輕，思想夢難成。 (《訴衷情》魏承班 930頃)

例(121) 不期阮三在家，思想成病。 (《金瓶梅》蘭陵笑笑生 1617)

例(122) 程宰支吾道：“無過是思想家鄉。” (《二刻拍案驚奇》凌濛初 1632)

例(123) 思想你，好淒涼！ (《屈原賦今訳·九歌》郭沫若 1953)

例(124) 想你，思想你，心只有你。 (《心祇有妳》劉德華 1999)

例(122)の“思想家郷”とは「故郷を懐かしむこと」である。上述した例(118)と同様に、故郷への郷愁を覚える気持ちを表しているであろう。他の例では(119)のように友達や恋人を懐かしむことを示していると考えられる。つまり例(119)の“思想不解説”とは「懐かしむ気持ちを言う必要がない」、例(120)の“思想夢難

134) 曹操の五男。字は子建。三国時代の人物で、「詩聖」の評価を受けた。曹操に特別寵愛されたが、奔放な処世態度で、曹操を激怒させてしまったこともある。曹操の死後、兄の曹丕が即位すると、彼は迫られて不遇な後半生を送った。

135) 杞県。中国河南省開封市に位置する県。

136) 龜山朗(1980)「漢魏詩における寓意的自然描寫 : 曹植「吁嗟篇」を中心に」『中国文学報』(31)、p. 12

成”とは「相手を恋しく思うことは夢のように」、例(121)の“思想成病”とは「恋しがって恋しがって病気になってしまう」、そして例(123)と例(124)の“思想你”とは「あなたのことを懐かしむ」と思われる。

以上から、“思想”の【意味①】における意味の変遷を次の通りにまとめることができる。

表11 “思想”における原義の意味交替

	意味範囲	使用時期	定着性
意①—A—ア	考えること。思い巡らすこと。	前7-3世紀～現在	定着
意①—A—イ	考え。意図。	16世紀～現在	定着
意①—B	懐かしむこと。思い慕うこと。	3世紀～現在	定着

表11で、“思想”の原義及びそこから派生した意味の定着が明らかである。語源としての【意味①—A—ア】は、長時間にかけて使われていたが、品詞派生のために旧機能を持っていた動詞の代わりに「動詞由来名詞」の【意味①—A—イ】がよりよく使われることになった。また【意味①—B】と【意味①—A】は同じ〔思考〕の意味分野に属する¹³⁷⁾。【意味①—B】は〔懐かしむ〕の小分類に分けられるが¹³⁸⁾、大分類にしては〔思考〕に含まれる¹³⁹⁾。

3) 日本における漢籍系“思想”の受容

漢籍系“思想”の【意味①】は、【意味①—A—ア】、【意味①—A—イ】、【意味①—B】の三つの意味に分けられることは例(104)～(124)から確認できた。【意味①】に関して『日本国語大辞典』(1989)では、二つの小分類を一つとし、『大漢和辞典』(1984:4399)と『学研大漢和辞典』(1982:464)では、【意味①—A—ア】と【意味①—A—イ】を別々に分けている。しかし【意味①—B】についての記載は上述の各辞典に載っていない。本研究の調査の範囲内でも、この意味分類における実例は見つからない。ここで、日本に輸入された漢籍系の「思想」について検討してみたいことにする。

137) 『類語大辞典』(2003) 講談社、pp. 195—198と、『類語国語辞典』(1985) 角川書店、p. 617参考。

138) 『デジタル類語例解辞典』(2003) 小学館を参考。

139) 『デジタル類語例解辞典』(2003) 小学館を参考。

『日本国語大辞典』(1989)では中国語から“思想”の受容は室町時代に遡り、永禄2年(1559)の『いろは字』に見い出される。当時の室町幕府は、朝貢形式による日明貿易¹⁴⁰⁾を通じて中国との国交を復活した。明(1368～1644)に派遣した遣明使の一行が大量の輸入品を日本に流入させた。その中で儒教・道教・仏教関係の書籍が、幕府の支配階級に非常に適したものと認識され、多く集められた¹⁴¹⁾。【意味①—A—ア】の「思想」は「中国から日本へ」の風潮に乗って日本に導入されたのであろう。ただし、本研究の調査で、漢籍由来語「思想」は明治以降の文献から大量に使われたことが確認できたことから、この時期本格的に普及されたと考えられる。明治初期、人権や民主における新思想が西欧から日本に流入し、国民の自由と権利を要求した自由民権運動¹⁴²⁾が発生した。この新思潮の普及と相まって、【意味①—A】の「思想」が庶民の中に流行語のように深く浸透するようになった。明治5年(1872)、中村正直訳の『自由之理』¹⁴³⁾は当時の運動に大きな影響を及ぼした。

例(125) 普天下の人をして自由に思想し。 (中村正直訳『自由之理』1872)

ここでの「思想」は自由を考えることを示していると考えられる。すなわちただの「考えること」を意味すると言える。このような用法は近代になってから多く見られる。例えば「思想しつゝ生活しつゝ祈りつゝ」のような文章が頻繁に用いられるようになった。『日本人は思想したか』¹⁴⁴⁾(1995)、『思想する「からだ」』¹⁴⁵⁾(2001)などの書名もあった。次の図は『解放群書第41編』¹⁴⁶⁾(1929)の目録で「思想」についての話題である。

140) 応永8年(1401)から天文18年(1549)までに、室町幕府が明の中国と行った貿易。勘合貿易ともいう。

141) 暴凶亜(2019)「日中双方からみた勘合貿易——国益と互惠性」『KGU比較文化論集』(10)、p. 179

142) 明治初期、藩閥政治に反対して国民の自由と権利の伸長を鼓吹した政治運動。憲法の制定、議会の開設、言論の自由などの要求を揚げ、明治23年頃(1890)まで続いた。

143) 啓蒙的翻訳書。原書はイギリスの思想家ミルの「自由論」(「On Liberty」)である。自由民権思想の形成に、最も大きな影響を与えた書物の一つであると言われる。

144) 「日本の思想とは何だったのか」についての書物である。作者は吉本隆明、梅原猛と中沢新一。西欧と違った形で展開した日本思想の意義や、転換期の今におけるその可能性を総括した。

145) 竹内敏晴著。コミュニケーションにおける思索と実践を記した書物。

146) 解放出版社。雄弁法教程における書物。

二、『うまい』演説は雄辯か……………	四八
三、雄辯の生命は何か……………	四八
四、斷じて諸君を欺かずの信念……………	四八
第三章 思想せよ……………	四九
一、如何に思想すべきか……………	四九
二、反動ブルジョアに思想なし……………	五一
三、如何に思想を整理統一すべきか……………	五一
第四章 生活より出發せよ……………	五二
一、聴衆の質問的進歩……………	五二
二、パンを求むる者に石を與ふる勿れ……………	五四
三、無産大衆の生活を智識せよ……………	五五
第五章 曝露せよ……………	五九
一、所謂曝露戰術……………	五九
二、何を曝露すべきか……………	五九
三、如何に曝露すべきか……………	六三
一、智識の準備 二、調査 三、感情	
的より實證的……………	六三
第六章 條理に徹せよ……………	六五
一、條理を生かす工夫……………	六五
二、社會科學の研究……………	六六

図2 「思想せよ」・「如何に思想すべきか」・「如何に思想を整理統一すべきか」

図2で「思想せよ」と「思想すべき」は、それぞれ「考えよ」と「考えるべき」という意味である。これらの「思想」は動詞として「考えること」を表す。また「如何に思想を整理統一すべきか」での「思想」は名詞としての機能の【意味①—A—イ】で、すなわち「考え」を意味する。

近・現代の雑誌や図書からの【意味①—A—ア】に当たる例を見ると、

例(126) 我は民約論者には非ねども尚民約の事に就て少しく言はんには、氏が如く創造蒙昧の人民は一致結約の如き事を思想し得ざりしと云ふは亦非なり(略)。

(「國家學要論」『国民の友』高橋五郎 1888)

例(127) 斯の如き美風を有し、慈悲に傾き易き天性を備ふる露人は駸々として善に進み、惡を退け易しと思想さるれども、是唯た言語上のみ。

(「露國人情」『太陽』小西増太郎 1895)

例(128) 国民は現在如何に思想しつつあるか。

(『時潮に対して:社会問題研究批判』文明批評社 1919)

例(129) 人間は脳髓をかりて思想するか。 (『唯物論は真理か』永野芳夫 1931)

例(130) 人間は自由に思想する特権を持っている。

(『幸福への道』小西増太郎訳 1948)

例(126)～(130)の「思想」は同様に「考えること」や「思い巡らすこと」を意味する。別々に「大衆を団結させることを考える」、「容易に良いことをして悪いことを退けると考えられる」、「どう思っている」、「脳髓で考える」と「自由に考える」ということであろうと思う。ここで、(128)～(130)は単に思考することを示すが、(126)と(127)の「思想」は事柄をさまざまに考えるという意味である。つまりより深く考えを巡らすことを意味していると思われる。

さて、【意味①—A—イ】を持つ「思想」の名詞的用法について『デジタル大辞泉』(2020)では「新しい思想が浮かぶ」、『広辞苑』(1978)では「誤った思想」を取り上げている。二つの「思想」とも「考え」を示している。1880年代以降の【意味①—A—イ】における例では、

例(131) 而して今後一二年は、實に此の非常の時勢に屬す、而して其の速力たるや、吾人が思想すら尚ほ及ぶ能はざるを恐る、況んや吾人が實行の之に伴ふをや。

(「現今政治上の位置」『国民の友』作者不詳 1888)

例(132) 蓋し學問は實用と相離るべからざる事素よりなれど、又一方より見れば更に女子の品性を作り、健全なる思想と高尚なる趣味とを養はしむるものとも云ふ事を得べければなり。

(「學問と趣味」『女學世界』作者不詳 1903)

例(133) 彼はもう考えるのが厭になって来たので、そういう思想を打ち払うために、頭を左右に振った。

(『神經病時代』広津和郎 1917)

例(134) 意志や思想を変えるプロセスとして、テロリストの調査を行ったイスラエル心理学者アリエル・メラリがトンネルに喩えて説明しています。

(「個人の考え、思想を変えることができるのか？」 作者不詳 2017)

例(135) アクセシビリティは高い技術と正しい思想により実現する。

([石川准 ウェブサイト] 2021)

ここでの「思想」は「考え」を指す。例(131)の「思想すら尚ほ及ぶ能はざる」

とは「考えることさえできない」という意味で、「思想」はあるところまで達する考えを示すと考えられる。(132)～(135)の「思想」は考えて得た判断や決意を意味しているであろう。詳しく言うと、例(132)の「健全なる思想」とは「正常で偏っていない考え」、例(133)の「そういう思想」とは「そんな考え」、例(134)の「思想を変える」とは「考えを変化させること」、例(135)の「正しい思想」とは「道理にかなっている、事実合っている考え」と思われる。

上の図2のように、【意味①—A—ア】を指す「思想する」と【意味①—A—イ】を指す「思想」が共通的に用いられた。

例(136) 此れに反し純乎たる工商人は、其思想する所、唯一身一家に止り、(略)其の思想の貧乏なる、亦た更らに甚しきものあり(略)。

(「隠密なる政治上の變遷(二)」『国民の友』作者不詳 1888)

「其思想する所」とは、工商人が「考えているところ」や「意図をもって何事しようとするところ」のことである。そして「其の思想」とは「彼等の考え」であり、文脈から意味を推測すると商業的利益に焦点を絞ることについての考えを指していると言える。

以上から、【意味①—A—イ】の“思想”と「思想」は現代語に近い。そして二つの語の意味範囲や語の使い方は大部分が一致していることを確認した。古語としての中国語の“思想”は三つの意味分野の【意味①—A—ア】、【意味①—A—イ】と【意味①—B】を意味するが、日本語の「思想」は単に【意味①—A—ア】の機能を果している。しかも幕末以後に移入された自由主義の風潮を土台にしてようやく広い範囲で受け入れられていくようである。中国語の“思想”における【意味①—B】の定着は強いが、日本語としてはほとんど受容されていない。また【意味①—A—イ】の日本への輸入は、明治時代に入ってからである。現代語としての“思想”と「思想」における漢籍系の意味分野では、前者は最初から現在まで三つの意味範囲を持ち、それに比べて後者である日本語の「思想」は二つの意味分野を持っている。

4. 和籍系「思想」について

1) 日本における和籍語「思想」の成立と発達

幕府から明治にかけて西洋の様々な思想が入ってきた時、漢語に訳されたり、外国語がそのまま使われるようになった。特に新造漢語で翻訳することが多かった。明治中期以後、『哲学字彙』¹⁴⁷⁾(1881)での哲学用語を直接利用することがますます増え、「思想」がその中の一つとして“thought”の訳語とされた。『日本国語大辞典』(1989)では次のように記載されている。

「広義には意識内容の総称。狭義には、直接的な知覚や具体的な行動と対比して、文や推論などの論理的な構造において理解されている意味内容。」〔哲学字彙〕(1881)

この用法を【意味②—A—ア】と標記する。調査によると啓蒙思想家である中村正直が訳した『自由之理』(1871)に「思想及ビ議論ノ自由」という文が見える。実際、18世紀にヨーロッパで行なわれた思想文化運動に伴って啓蒙の理念が次第に普及していき、思想家たちが「自由」を重視して絶対君主の抑圧から解放されることを求めるようになってきた¹⁴⁸⁾。このように、自由主義の思潮が日本に伝来し、この訳本である『自由之理』の出版とともに日本の自由思想のブームが起こった¹⁴⁹⁾。明治7年(1874)から、日本国民の自由と権力を要求した自由民権運動が盛り上がってきた。それと同時に、「思想」が訳語や新語として「合衆国人権利ノ思想」(土居光華訳 1878 『欧米大家所見集：偶評券之3、4』p. 18)、「思想ハ地位ニ從ツテ異ナリ」(末廣重恭1879 『嚶鳴雑誌(2)』p. 1)などの用法で用いられるようになった。明治14年(1881)、「思想」が新語として『哲学字彙』に収められた。西洋

147) 『哲学字彙』が明治初期の国語資料、特に訳語研究の資料として重要な文献である。明治維新後に導入された新概念を日本語に訳すにあたって、一つの術語に多様な訳が生まれ、訳語を統一し定着させることが必要であった。この要求を応じるため『哲学字彙』が編纂された。

148) 山崎耕一(1994)「啓蒙思想とフランス革命(1)最近の研究史から」『武蔵大学人文学会雑誌』25(4)、p. 111

149) 王曉雨(2015)「近代日中における翻訳事業と思想受容——「自由」を実例として」『関西大学東西学術研究所紀要』(48)、p. 175

文明と頻繁に接触した際、雑誌、新聞、小説などの各分野の学術用語が一般社会に広まっていた。和製語義を持つ「思想」がこのように広い範囲で用いられるようになった。次に挙げる文がその解説例である。

例(137) 而して因襲の久き、遂に之に安んじて、己れが新思想、新言論を發揮するの自由を奪はれしを知らざるヲ、猶長く奴隷たりし人が、舊に甘んじて、其身心の自由なきを知らざるがごとし。

(「羅馬字を以て日本語を綴るの説(一)」『東洋学芸雑誌』矢田部良吉 1882)

例(138) 或いは歌ひ、或いは祈り、或いは修め、或いは聴きて、天地世界人類万物などに對して濶大崇遠の思想を開發す。(『教育と伝道』作者不詳 1894)

例(139) 文字を知らざるものは、文字によりて傳へべき思想を悟ること能はず。

(『思想を読むの眼識』巖本善治 1894)

例(140) われらは、文字によりて、前代の人の思想を究め、現時の人の思想を知り、さらに、これを次期の人に傳ふるがゆゑに、世は、層一層と、文明におもむくなり。

(『高等小学校国語1期』文部省 1904)

例(141) そこで民間のお知恵をおかりしながらいろいろな仕事をやって、収入を多少ともレール外でふやしていきたいという思想でございます。(『国会會議録』1977)

例(142) 最初は、物を動かすなどの物理現象中心でしたが、次第に靈媒を通じた、自動書記や言葉を発する靈言などによる、思想的啓蒙を目的とした靈訓へと移行してゆきました。(『スピリチュアル』中村隆司 2002)

ここでの「思想」は「哲学的な考えで得た意識の内容」を意味すると思われる。

例(137)の「新思想」とは「新しい意識」、例(138)の「濶大崇遠の思想」とは「遠大、且つ立派な理想的・目標的内容」、例(139)の「文字によりて傳へべき思想」とは「文字で伝えられる意識的内容」、例(140)の「前代の人の思想」と「現時の人の思想」とは、「前の時代及び当時の人々の意識的内容」を意味していると言われている。また例(141)は「収入を上げることについての意識」を指し、例(142)は「思想」と「的」の組み合わせで名詞を形容動詞化して、「意識的内容に関わる啓蒙」を表す。これらの指示対象は別々に異なるが、「思想」は同様に人生や社会などについてのまとまりの意識の内容を示すことが明らかになった。

2) 和製漢語である「思想」の意味変化

「思想」は【意味②—A—ア】の新漢語として使われ始めたが、その後意味分化が活発に行われ、【意味②—A—イ】と【意味②—A—ウ】の形成と展開になった。

【意味②—A—イ】についての辞典記録で「思想」は「統一された意識的内容」を指している。意味範囲から見ると、【意味②—A—ア】から【意味②—A—イ】へ変化する過程で、使用範囲が狭くなる。例えば「政治思想」や「近世思想」のように、限定辞の付与で語義の縮小がはっきりしている¹⁵⁰⁾。次は、【意味②—A—イ】の「思想」についてである。

例(143) 今日動もすれば日本人民は政治思想に乏しとか政治世界は不活潑なりとか評するものあり。

(「政治家の所得減少し、商工業の繁昌すへき時代」『国民之友』 矢野龍溪 1887)

例(144) 未だ顯れざりし教育思想は、大に母氏の力によりて、開展することとなれり、彼は母の勸告に従ひ、千七百九十七年の初め、大學を去りて、端西國インテアラーケンの知事、スタイゲアの兒童の自宅教師となりぬ。

(「ヘルバルトの母(下)」『女学雑誌』 桜井鷗村 1894)

例(145) 士農工商の階級が依然頭に残つてゐて、實業をいやしみ金錢にかゝはる者は小人として、つまはじきするといふ有様ですから従つて經濟思想などは皆無であります、近年小學校に於て、此幣を矯めん爲種々と苦心慘憺して、實業思想の養成につとめてみますので大分其効果がみえる様ですけれどもまだなか(略)。

(「山陰道の名邑 石州津和野の風俗」『女学世界』 苔の花 1909)

例(146) 明治維新後の社會に、大なる影響を與へたるは西洋思想の輸入なり。

(「第十一課 福澤諭吉」『高等小学校国語1期』 文部省 1904)

例(147) 鳥獸保護思想の普及啓もうを図るため、徳島県において、愛鳥週間行事及び全国鳥獸保護実績発表大会を実施する。(『環境白書』 環境庁 1976)

例(143)～(147)の「思想」は「体系的にまとまっている意識の内容」を言っている。その中での「政治思想」、「教育思想」、「經濟思想」、「實業思想」、「西洋思想」、「鳥獸保護思想」は、それぞれ「まつりごと」、「教え育てること」、

150) 倉又浩一(1894)『言語学入門』大修館書店、p. 151参考。例えば、墨→朱墨→白墨→赤い白墨のように、限定辞が付いた結果、非限定辞の意味の一部が失われたりすることになる。

「生産・分配・消費する活動」、「生産・販売に関わる実業」、「欧米」、「鳥とけだものを庇うこと」についての体系的な見解や意識を指すと考えられる。つまり例(143)の「思想」は政治に関する体系化された意識を示しているであろう。例(144)の「思想」は学校教育や家庭教育、社会教育などを含む知識・技能の学習を促進する意図的な働きかけの活動に関する意識を意味していると思う。例(145)の「思想」は別々に物質の生産・分配・消費の全過程、すなわち金銭の出入りにおいての意識と、商品の生産・売買に関わる事業においての意識であると言える。例(146)の「思想」は西洋文明・文化から得られたまとまった体系的な意識の内容を指し、例(147)の「思想」は鳥獣被害防止のために捕獲を禁止される意識を意味していると思われる。このように「思想」は二字漢語や多字漢語と組み合わせて多字熟語として使われた。

次に【意味②—A—ウ】の「傾向的な意識」は『日本国語大辞典』（1989）に一つの例の「独立の思想」が挙げられる。ここでの「思想」は前述した【意味②—A—イ】と同様に、修飾語の付与で意味範囲が狭くなっている。この意味は現代までも多く残っている。例を挙げると次の通りである。

例(148) 氣でも狂ひはせぬかと笑はれるか心配を掛るかなれども愛國の思想に於て間違ふとも心に如此と思ふ所は演説して正さねばなりません。

（「尊王攘夷説」『明六雑誌』阪谷素 1875）

例(149) 山嶽の美なく殆ど赤裸々たる印度の地、伊太利の詩人の如く厭世の思想を發生せしめたる素より然り。

（「日本風景論を読む」『女学雑誌』布川静淵 1894）

例(150) 我邦女性の詩人たりしもの、則ち詩的思想を有せるもの甚だ多し曰く捨女、曰く秋色、曰く智月、曰く千代、曰く園、其他古今東西、其例枚擧するの遑あらず。

（「悲哀の美と女性」『女学雑誌』布川静淵 1894）

例(151) それから社会主義の某首領は蟹は柿とか握り飯とか云う私有財産を難有がっていたから、白や蜂や卵なども反動的思想を持っていたのであろう、事によると尻押しをしたのは国粋会かも知れないと云った。

（『猿蟹合戦』芥川龍之介 1923）

例(152) 武力でもって対決しなければならない南朝にとって、武士層と貴族的復古思想、それに、後醍醐の専制的思想というものが、依然として対立しており、多事多難であった。

（『人物日本の女性史』脇田晴子 1977）

前述の辞書的説明を参考にして、例(148)～(152)の「愛国の思想」、「厭世の思想」、「詩的思想」、「反動的思想」、「專制的思想」とは、それぞれに「自分の国を愛すること」、「世の中をいやなものと思うこと」、「詩の趣を持つこと」、「歴史の流れに逆向して、進歩を阻もうとすること」、「独断で思うままに物事を決すること」に対する一定な見解、意識という意味を表していると考えられる。「愛国の思想」、「反動的思想」、「專制的思想」にある「思想」は同じく政治について抱いている意識を指すが、別々に愛国心を持って自国に対する愛着や忠誠の意識、旧体制の維持を図ろうとする立場で改革に反対する態度、独裁者が独断で思いのままに事を行う意識を表しているであろう。また「厭世の思想」と「詩的思想」はある社会的態度を示し、「思想」はそこで「生きていることはつまらないという悲観的な態度」と、「詩のような美的な快感を呼び起こそうとする意識」を意味すると考えられる。

以下、【意味②—B】の「道德・倫理に関する意識」と【意味②—C】の「思考の筋道」についての分析である。この二つの語義は中国語辞典の意味として取り上げられる。本研究の調査では、日本語の「思想」もこれらの意味を含んでいることが分かる。【意味②—B】は「道德・倫理」に対する関心を表現したい心理から生まれた意味変化である。それは、人間の道徳的判断に注目する時、その関心度を「思想」に転用したことによるのである。また意味範囲の重なり合いで、【意味②—C】が【意味②—A—ア】から変化したことがはっきり見える。詳しく言うと、まず「考え」は、「意識的内容」と「思考の筋道」が共通しているとされ、この類義の部分をもとに、異なる分野に新たな意味が発生するということである。この二つの意味範囲について分析する。次に【意味②—B】における例を挙げる。

例(153) 兒童の野蠻の思想を保有するは既に本誌第五號に於て之を論ぜり。

(「古代の事物の容易に消滅せざる所以を論ず」『東洋学芸雑誌』松下丈吉 1882)

例(154) 文事の改良は精神上の改良即ち道德思想の改良を第一と爲し文風の改良即ち字句言語の改良を第二と爲す。 (『文事之改良』高橋基一 1887)

例(155) 其思想を高ふし、其品位を重ふし、一國政事家の顔色を窺ふて、其議論を爲し、政治家一喝の下に、著書を絶版し、其議論を變更するが如き人の痕を絶たんこ

とを願はざるを得ず、 (『日本の學者』作者不明 1888)

例(156) われわれユダヤ人の考え方からいえば、裁判官は正義及び人間性についてのより崇高な思想と概念を持ち合わせていなければならないのである。

(『日本人は死んだ』 M. トケイヤー著・箱崎総一訳 1975)

例(157) その学者の教え方が悪かったのか、はたまた権太の聞き方が悪かったのか、その辺の事情は詳らかではございませんけれども、どうも、ここに至って高邁な思想の高邁な部分はすっ飛んでおりまして、幽冥界も不老不死の仙術に拘り替わっておるようでございますな。 (『豆腐小僧双六道中ふりだし』京極夏彦 2003)

ここでの「思想」は「道徳・倫理に関する意識」を指している。例えば例(154)の「道徳思想」は単に「道徳に関する意識」を意味するが、例(153)の「野蠻の思想」は「教養がなく、粗野な態度」、例(155)の「其思想を高ふし」は「その意識状態を高めること」、例(156)の「崇高な思想」は「気高く偉大な精神」、例(157)の「高邁な思想」は「気高く優れている精神状態」を意味すると言われている。まとめると、これらの「思想」は全部道徳観に関わる思想レベルを指していると思われる。その上、思想レベルの高さによって、異なる場合で使われることがある。例えば例(153)と(155)のように、「思想」が単純に道徳的な価値観を指している場合もあり、例(154)、(156)、(157)のように、善悪・正邪の判定基準で生じた意識を指している場合もある。すなわち、道徳的・倫理的判断において【意味②—B】を指す「思想」は、マイナス且つプラスのイメージを抱いていると言える。

次は【意味②—C】における例である。

例(158) 予はヘルデル氏に逢ひ初めて詩術は世界萬民の共有物にして決ツして精緻の思想に富める僅少人の専有物に非ざることを知れりと、嗚呼ゲエターの基礎を開きしものは彼れの父母なり。 (『ゲエター論』石橋忍月 1888)

例(159) 蓋氏は思想明了ならずして太初始めて起れる社會と其後に數多相接するに至れる社會とを混同して妄説を爲す而已。 (『國家學要論』高橋五郎 1888)

例(160) 吾人が願ふ所は、敢て悉皆の機密を盡く暴露せよと云ふにはあらざれども、明白に爲さるるだけは、成可く明白に爲し、國民をして成可く一國の兵力に就て精確なる思想を得せしめん事を當局者に向つて望まざるを得ず(略)。

(『日本の国防を論ず(三)』作者不詳 1888)

例(161) メメント・モリ(死を忘れるな)の心掛けをこのように明確な思想として説いた人物は、外にはいなかったのだから。(『清貧の思想』中野孝次 1992)

例(162) そして、常に明るい思想を持つ。常に景気の良い言葉を出す。常に発展的な考え方をする。(Yahoo!ブログ 2008)

ここでの「思想」は「思考の筋道」を意味すると考えられる。例(158)の「精緻の思想」とは、「きわめてくわしく細かい思考」、例(159)の「思想明了」とは「思惟が明らかであるさま」、例(160)の「精確なる思想」とは「詳しくて的確な思考」、例(161)の「明確な思想」とは「明らかで確実な思考」、例(162)の「明るい思想」とは「考えがはっきりしているさま」という意味であると思う。「思想」を「思考の筋道」と解釈すると、筋道を立てて考えることを意味する上で、人間の思考力を指していると言える。

以上、「思想」の【意味②】における意味の変遷を表12にまとめた。

表12 「思想」における和製語義の意味交替

	意味範囲	使用時期	定着性
意②—A—ア	哲学的な意識的内容	明治～現在	定着
意②—A—イ	体系化された意識的内容	明治～現在	定着
意②—A—ウ	傾向的な意識	明治～現在	定着
意②—B	道德品質に関する意識	明治～現在	定着
意②—C	思考の筋道	明治～現在	定着

表12から分かるように、他の意味分野と比べて見ると、【意味②—A—ア】がより総括的・概括的に意識的内容を指す。【意味②—A—イ】が体系化された意識を表し、【意味②—A—ウ】が傾向的な見解を表す。また【意味②—B】と【意味②—C】は別々に道德品質に関する意識と思考の筋道を意味する。ここで、【意味②—C】は〔筋〕という小分野に属するが、〔思考〕の大分野にも属する¹⁵¹⁾。他の意味分類は同様に〔思考〕という分野に分けられる¹⁵²⁾。言うまでもなく、和籍由来語「思想」の各語義の定着性は明治期から現在までも極めて強い。

151) 『類語大辞典』(2003)講談社、p. 200

152) 『類語大辞典』(2003)講談社、p. 201と『類語国語辞典』(1985)角川書店、p. 621

次に、日本語の「思想」の意味の変遷を表13にまとめた。

表13 日本における「思想」の意味の変遷

語種	意味成立の原因	古語の意味	現代語の意味
漢籍系漢語	日明貿易の展開	意味①-A-ア →	意味①-A-ア、A-イ
和籍系漢語	自由主義の風潮	×	意味②-A-ア、A-イ、A-ウ、B、C

16世紀、日明貿易の展開とともに、【意味①—A—ア】を意味する「思想」は漢籍の流入と共に日本語に輸入された。しかしこの意味的範囲の活用は明治初期から始まったようである。当時、自由主義の風潮で、中村正直などの啓蒙思想家や知識人が「自由」・「民主」を主張する際、それらを「思想せよ」と提唱した。このように、彼らの著作に【意味①—A—ア】——「考えること」を意味する「思想する」、【意味①—A—イ】——「考え」を意味する「思想」が次々に現れた。それと同時に、西洋概念を表すために、彼らは「思想」という既存の漢語を使って訳語とした。和製漢語の「思想」はまず【意味②—A—ア】を表し、そして意味の分化と拡張で、【意味②—A—イ】、【意味②—A—ウ】、【意味②—B】、【意味②—C】の機能をも担おうとしている。このように「思想」が多義化された。

3) 中国における和製漢語「思想」の逆輸入

明治維新後、西洋哲学の概念を表す訳語が日本から中国へ伝えられた。19世紀末、戊戌の変法の中心人物である康有為¹⁵³⁾と梁啓超¹⁵⁴⁾は、近代化した日本に学び、日本語書籍を翻訳することを主張して大量に創刊した¹⁵⁵⁾。それと同時に、中国各地で刊行されていた新聞や雑誌に和製漢語の姿がよく見える。特に晩清から民国時期にかけての雑誌は、日本の新聞記事を土台にし、和製漢語を通じて新文明を取り入れようとする姿勢を明らかにした。新聞の中で、国際情勢や外国語記事を翻訳したものが載せられている『実学報』¹⁵⁶⁾が、晩清の定期刊行物の中で比較的早

153) 清末民初にかけての思想家。戊戌変法の担い手。西洋思想に触れてから、西洋訳書における学識を広めた。

154) 戊戌変法の担い手。康有為と戊戌の変法を試みたが、失敗に終わり、日本に亡命。

155) 仲玉花(2017)「梁啓超の翻訳活動について——1900年前後の翻訳活動を中心に——」『或問』(32)、p. 45

156) 1897年から上海で発行された定期刊行物。外国の新聞や、書物を翻訳する欄は全体の43%の分

い時期のものと考えられる。そこで様々な新漢語が中国に逆輸入され、「思想」がその中の一つとして出現した¹⁵⁷⁾。

中国における和製漢語としての受容例として、『東亜報』¹⁵⁸⁾(1898)、『清議報』¹⁵⁹⁾(1900)、『新民叢報』¹⁶⁰⁾(1902)、『新世界学報』¹⁶¹⁾(1902)、『大陸報』¹⁶²⁾(1902)に見える。“孔子為思想家”(『東亜報』大橋鉄太郎作 卷二 p. 4)、“十九世紀思想變遷”(『清議報』加藤弘之作 卷五十二 p. 3339)と“人種之思想”(『大陸報』 卷一 p. 7)に見える“思想”は、上述した【意味②—A—ア】を持つ。また“中國學術思想”(『新民叢報』1902 卷九 p. 79)と“學術思想史”(『新世界学報』1902 p. 7)にある“思想”は【意味②—A—イ】の分野に分けられる。

このように、19世紀末20世紀初、中日両国で掲載されていた雑誌の普及によって、新しい意味の“思想”の受容が促進されていたことが分かる。より細かく説明するため、この和籍系の“思想”を意味分野によって分けて考察していきたい。まず“思想”の【意味②—A—ア】について分析し始めよう。例文を挙げると次の通りである。

例(163) 在階級社會中，每一個人都在一定的階級地位中生活，各種思想無不打上階級的烙印。
(《實踐論》毛沢東 1937)

例(164) 中國知識分子的“天”與現代思想的“自然”相吻合，偉大，走著它自己無情的路，與基督教慈愛的上帝無關。
(《中国人的宗教》張愛玲 1944)

例(165) 其余如经济、政治、文化、学术、思想各方面的史料，应有尽有。

(《略論時代在歷史研究中的地位》周谷城 1961)

量を占めておる。そのうちの「東報訳」、「東報訳補」は訳された日本新聞記事を紹介する。翻訳記事は日本の新聞記事をソースとして翻訳作業が行われたため、言葉遣いの面では他の刊行物より和製漢語の影響を大きく受けたと言われている。

157) 秦春芳(2010)「『実学报』に見える近代中国語の日本漢字語借用」『広島大学国語国文学会』(205)、pp. 1-10

158) 日本で発刊された最初の中国語雑誌ともされている。1898年6月29日に神戸で刊行されたこの旬刊誌には、新漢語の情報が大量に翻訳・掲載されている。記事の内容は、宗教、政治、法律、商務、芸学の五つの分野に及んでいる。蔣海波(2013)「『東亜報』に関する初歩的研究—近代日中「思想連鎖」の先陣として—」『現代中国研究』(32)、pp. 19-21参考。

159) 1898年、梁啓超は戊戌政変に敗れて日本に亡命し、横浜で『清議報』の発行を計画した。

160) 『新民叢報』は中国語の雑誌で、1902年の創刊から1907年まで刊行された。主編は梁啓超。

161) 1902年から上海で創刊された半月刊。

162) 1902年に上海で創刊された刊行物。創刊者は留日学生の戩翼翬と日本人の田歌子。

例(166) 思想的正确性也只有通过实践来检查。

(《人間の正しい思想はどこから来たの?》蕭前 1964)

例(167) 这是我们在打击经济领域严重犯罪活动中要进一步解决的一个思想。

(《既不畏“虎”也不轻“蝇”》黎言 1982)

上述した“思想”は哲学的な意識内容を表していると思われる。例(163)の“各種思想”とは「さまざまな意識的内容」、例(164)の“现代思想”とは「現在の時代における意識的内容」ということで、一般的に20世紀半ば以降に生じた西洋文明に関する意識を指しているであろう。例(165)の“思想”は各領域の用語——“经济”(「經濟」)、“政治”(「政治」)、“文化”(「文化」)、“学术”(「學術」)と並べて用いられる。そして例(166)の“思想的正确性”は「意識的内容の正しさ」、例(167)の“一个思想”は「ある意識」を表すと言える。

次に“思想”の【意味②—A—イ】における分析である。

例(168) 二人學術思想，既各不同，用人行政，意見尤多歧異。

(《清史稿》趙爾巽 1928)

例(169) 章太炎对孔学颇有非议之处，因而容易使人误解章太炎是反对传统的封建统治思想。

(《辛亥革命前章太炎之封建意識試析》羅耀九 1962)

例(170) 不过美学成为一门独立的科学虽不过两百多年，美学思想却与人类历史一样的古老。

(《美学》朱光潜 1980)

例(171) 李向平在《学术月刊》今年第四期上撰文，他从唯识宗与中国历史上的王权政治、社会秩序、儒家思想、结构转型等方面的特殊关系入手，对唯识宗的兴衰过程作出了新的阐释。

(《仏教思想史之一個新闡釈》亦麗 2000)

例(172) 教育部在“九五”期间启动了《高等教育面向21世纪教学内容和课程体系阶段计划》，计划涉及教育思想、观念、教学内容、课程体系结构、教学方法等各个教学方面。

(《人民日報》2001)

ここでの“思想”は「体系的にまとまっている意識の内容」を意味すると言える。例(172)の“教育思想”は例(144)のそれと同義で、「教え育てることに関する意識」を指す。例(168)～(171)の“學術思想”(學術思想)、“封建统治思想”

(封建統治思想)、「美学思想」(美学思想)と「儒家思想」(儒家思想)は、別々に「専門的な研究として行われる学門」、「君主が地方に諸侯を封じた統治制度」、「自然や芸術における美の本質について研究する学問」、「仁を根本とする道徳を説いた、孔子を祖とする中国の儒教」に関するものの体系的な意識を示すと考えられる。例文から見ると、「教育思想」と「學術思想」の“思想”は同様に、知識獲得に関わる意識を指しているであろうと思う。「美学思想」と「儒家思想」は哲学に関わる意識を表すが、前者の“思想”は美的現象を追求する意識を意味し、後者の“思想”は儒教を追求する意識を意味していると思われる。また、「封建統治思想」は政治に関する意識であり、「思想」はそこで土地を媒介として成立する社会的な制度を唱える意識を指すと言える。

次に【意味②—A—ウ】を持つ“思想”についてである。この意味分野は中国語辞典では見られないが、例(173)～(177)にある“思想”の意味的特徴は、これに相当一致するように見える。例は次の通りである。

例(173) 你認為她又優氣又愚蠢，同時她的愛國思想也使你感到厭煩。

(《飄》米切爾 1936)

例(174) 如果革命阵营的人也有浓厚的利禄思想，那就很容易为君主立宪制度所诱惑而脱离革命。

(《辛亥革命前章太炎的封建意識試析》羅耀九 1962)

例(175) 到了封建社会，在政治上是君主集权制国家，占统治地位的世界观主要是“忠君”思想，并且是以男性为中心的家长制社会。

(《樹立共產主義世界觀走歷史的必由之路》馮定 1979)

例(176)他认为，中国队应该很好地向对方学习，解放自己，丢掉想赢怕输的思想包袱。

(人民日報 1997)

例(177) 孙功成对他们进行了初步的图书馆知识培训，培养他们树立为读者服务的思想。

(《科技文献》賴茂生 2004)

ここでの“思想”は「傾向的な意識」を指すと考えられる。例(173)の“愛國思想”とは「自分の国を愛する意識」、例(174)“利禄思想”とは「利益を取ろうとする意識」、例(175)“忠君思想”とは「君主に忠義を尽くす精神」、例(176)“想赢怕输的思想包袱”とは「勝とうとする精神的な圧力」、例(177)“为读者服务的

思想”とは「読者にサービスを提供しようとする意識」と思われる。まとめると、(173)～(177)の“思想”は、ある特別な物事に対する一定の意識を意味していると言える。例(173)の“思想”は例(148)のそれと同様に、愛国心を持って自国に対する愛着や忠誠を表し、例(175)の“思想”は、君主のために忠誠を尽そうとする意識、例(176)の“思想”は負けないように勝とうとする意識、(177)の“思想”は読者のために奉仕したいという意識を表すと考えられる。

次に“思想”の【意味②—B】における例である。

例(178) 你嫌不舒坦，不美气，故意找我岔子，你这是啥思想！走！”

(《李双双小传》李準 1960)

例(179) 昨天晚上他恼怒地抛开了这个思想。这简直是屈服呀。

(《壁血黄沙》作者不詳 1998)

例(180) 有的小组长可能认为领导干部是管人的，思想修养一般都较好，参加党小组生活会实际意义不大，这样的想法也是不对的。

(《福建日报》张官生 1992)

例(181) “我们过去发生的各种错误，固然与某些领导人的思想、作风有关，但是组织制度、工作制度方面的问题更重要。”

(《人民日报》2003)

例(182) 爱同学，尊师长。克勤俭，好思想。

(《文汇报》作者不詳 2004)

例(178)～(182)の“思想”は「道德品質に関する意識」を表すと言われている。例えば例(178)の“你这是啥思想”とは「あんたは何を考えているんだ」という意味で、“思想”はここで「不道德な考え」を指すと思われる。また例(179)の“这个思想”とは“屈服”(屈服)に関する意識、すなわち「相手に負けて服従しようとする意識」ということである。そして例(180)の“思想修养一般都较好”とは「倫理意識や教養がよい」、例(181)の“某些领导人的思想”とは「リーダーたちの道德品質」、例(182)の“克勤俭，好思想”とは「勤勉節約はよい意識」という意味であると思う。上で述べた(153)の「野蛮の思想」のように、例(178)、(179)と(181)の“思想”はマイナス的なイメージを持ち、消極的な意識や態度を指していると言える。例(181)の“思想”は思想上のミスを示し、“过去发生的各种错误”「過去に発生した様々な(行動)のミス」はリーダーたちの意識的な誤りによる

なのであるという意味であろうと思う。これに反して、例(180)と(182)の“思想”はここで例(156)の「崇高な思想」と(157)の「高邁な思想」ように、思想レベルの高さを表すことによって、プラスのイメージを持つということが見られる。

次に“思想”の【意味②—C】についての解説例である。

例(183) 編輯和譯著的人，都是思想清楚的戰士與作家。

(《一個偉大的印象》柔石 1930)

例(184) 她思想縝密，描寫細膩，比其他的同學高出許多。(《閨與女人》冰心 1943)

例(185) 思想上趋于理性，行为表达方式上也走向理性。(《科技文献》頼茂生 2004)

例(186) 那个让人心碎的话题我不想了，统称为，思想不集中。(ブログ 年代不詳)

例(187) 但是，也应该看到，部分学生思想上的灵活是不够的。

(《科技文献》頼茂生 2004)

“思想”はここで「思考の筋道」を指している。例(183)“思想清楚”は「思考の筋道が明らかであるさま」、例(184)“思想縝密”は「考えがきめ細かい」、例(185)“思想上趋于理性”は「理性的思考に向かうこと」、例(186)“思想不集中”は「考えがまとまらない」、例(187)“思想上的灵活”は「頭の回転が速い」を意味すると思われる。その内、“思想清楚”は例(159)～(162)と同じ意味範囲を持つ、“思想縝密”は例(158)の「精緻の思想」と同じ意味範囲を持つことが見られる。これらの“思想”は筋道を立てて物事を考える力を指していると考えられる。例(185)の“思想”は物事を概念的に思考する能力、例(186)の“思想”はまとめられない考え、例(187)の“思想”は物事を理解して素早く対応できる考える力を示すと言える。

次の表14は、中国語の“思想”の通時的意味変化を表にまとめたものである。

表14 中国における“思想”の意味変遷

語種	意味成立の原因	古語の意味	現代語の意味
漢籍系漢語	中医学の宣伝	意味①-A-ア、A-イ、B =	意味①-A-ア、A-イ、B
和籍系漢語	戊戌の変法に伴う創刊	×	意味②-A-ア、A-イ、A-ウ、B、C

表14を見ると、紀元前の中国での古典医学の成立と発展で、【意味①—A—ア】を持つ“思想”が作られた。養生や長生きを願う意味を込めた文に、「考えること」が重要な話題としてよく現れ、その後、時間の流れとともに、この意味分類の使用範囲が次第に拡大していく。原義から生じた品詞性の移行は16世紀頃発生した新義、【意味①—A—イ】に見られる。そして意味分野の拡張で、古典語義としての【意味①—B】が誕生した。この三つの語義は現在までも認められるが、使用率の減少で現代語における周辺の語義と判定できる。

一方、戊戌の変法の影響で、清末から民国初期にかけて、多くの和製漢語が中日で掲載されていた中国語の刊行物に見られる。その内、新しい語義、【意味②—A—ア】を持つ“思想”が中国語の新語として、雑誌や新聞などに頻繁に再登場し、それと共に、【意味②—A—イ】、【意味②—A—ウ】、【意味②—B】と【意味②—C】も新漢語から派生した新しい意味分野として、刊行物と共に中国に伝来してきた。言語における新旧交替により、和籍系の“思想”が生まれてから現在まで広範囲に用いられ、そしてそれに関連する各意味分野は、既に現代語の“思想”の中心的語義になった。

以上から、和製漢語の発展で、現在、華製語義の【意味①】が周辺の意味になったということは、“思想”と「思想」の共通点であると考えられる。一方、和製語義の【意味②】に関しての五つの意味分野は、中日両言語においても新しいもの、且つ類似的なものとして頻繁に使用されている。

5. まとめ

中国語の“思想”と日本語の「思想」における意味変化について考察した結果は次の通りである。

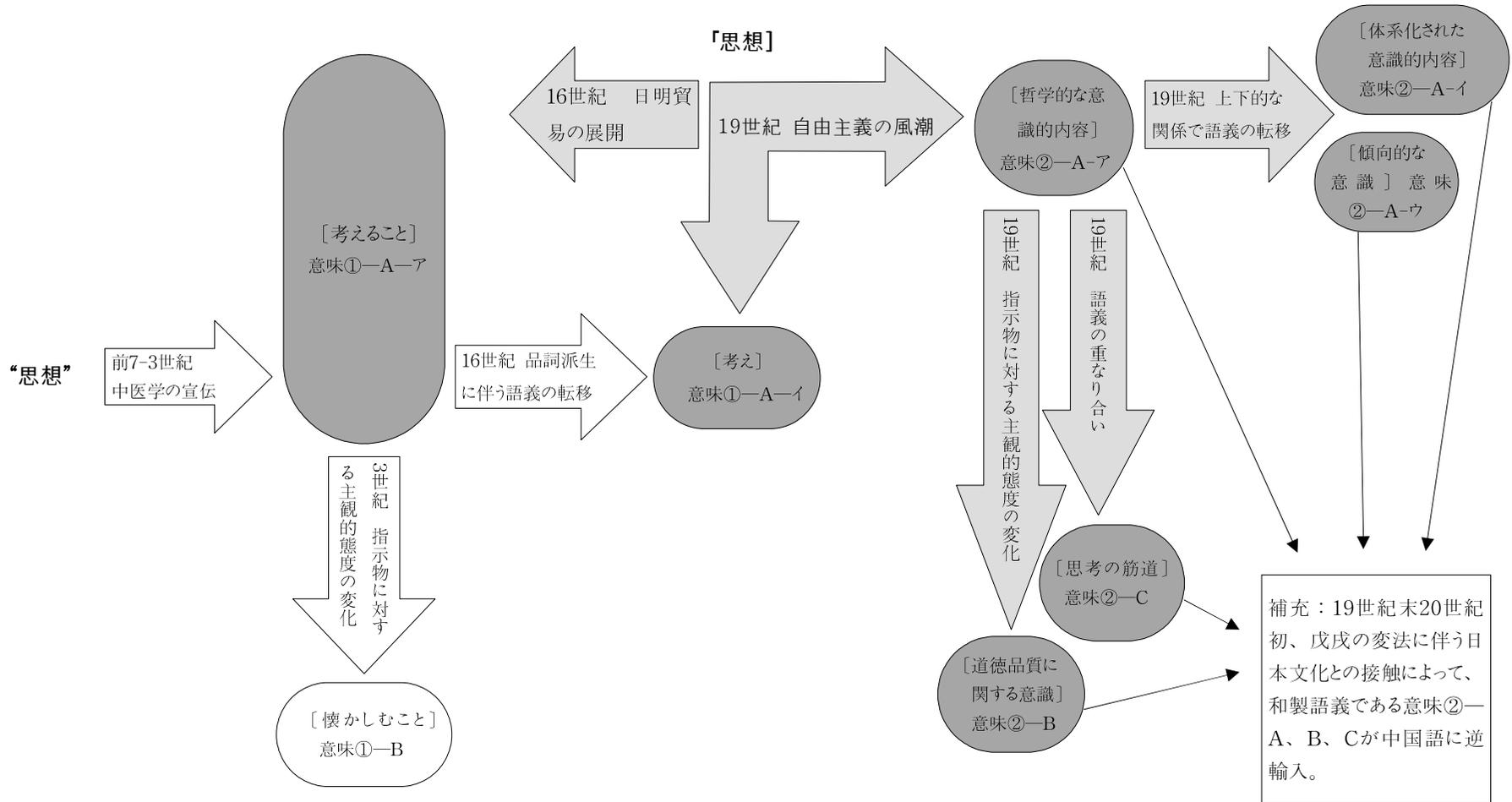
- ① “思想”も「思想」も漢籍由来語＋和籍由来語という二重性格を持っている。
- ② 漢籍由来語の“思想”は、最初《素問》という医学書に由来するということを確認した。中医学界や道家思想における養生方法が非常に盛んであった際、“思

想”が「考えること」を意味する語として作られた。古典語であった“思想”は「考えること」、「懐かしむこと」、「考え」を表す語として存在していたことが分かった。そして、「考え」を意味する“思想”が品詞転換によって「動詞由来名詞」になることが注目される。この三つの分野は現在まで使われようになったが、語義の交替でその重要性が極めて低い状態になった。一方、16世紀、日明貿易の展開により、「考えること」を表す「思想」が日本に導入され、明治維新後、大量に流入した西欧の自由主義思想の影響下で、「考え」の意味分類も日本語に輸入されたが、やはり周辺の意味になった。

③ 欧米先進国の自由主義を導入し、思想における近代化を進めていくにつれて、和製漢語の「思想」が哲学用語の訳語として明治初期から用いられるようになった。最初は「哲学的な意識内容」、そして「体系化された意識的内容」、「傾向的な意識」、「道徳品質に関する意識」、「思考の筋道」を意味する新しいものとして次第に重視されてきた。これらの和製語義が中国に伝来した後、抵抗感をまったく受けずに受容されたことが明らかに見える。現在、和籍系の意味分野は需要が高まる語義特徴として“思想”と「思想」の中心的意味になったことが分かった。

④ 「思想」における意味変化の原因と言え、まず歴史的要因について、漢籍系の「考えること」と和籍系の「意識的内容」は、それぞれに中医学と西洋の自由主義思想の発展によって形成されたということである。また言語的要因における品詞転換で、「考えること」が「考え」に変化し、動詞の機能を果たし始めた。上下的な関係における語義の転移によって、「体系化された意識的内容」と「傾向的な意識」が「意識的内容」から生まれ、意味変化における部分転換——意味分野の重なり合いで、「思考の筋道」が派生した。そして心理的要因で、「懐かしむこと」と「道徳品質に関する意識」は、人間が表現したい感情を付与され、転用された後一般化するようになった。最後に、「懐かしむこと」という意味分野を除いて、他の華製語義と和製語義は、中日交流、或いは日本と西洋の交流に伴う新文化の受容とともに、中日両言語に相互に輸入されてきたことが分かった。これらを次の図3でまとめる。

図3 「思想」の意味変化の原因



第三章 「観念」の意味の変遷

1. 「観念」の出現と展開

この節では、漢籍・和製由来における漢語の位置付けに注目し、仏典語の発展が日本語に与えた影響、室町時代から明治時代にかけての和製漢語の発展、及び中国に伝わった和製漢語の高い位置を反映していると言われる「観念」を対象に考察したい。

まず初めに、「観念」という語の起源と仏典系の意味を明確にし、日本における「観念」の形成と展開が、遣唐使の導入に通じることを述べる。そして、仏典語の活用で生まれた和製漢語を明らかにし、「観念」が和製漢語になってからどのような意味変化が起こったのかを調査する。さらに、西欧から観念学の伝来で、「観念」が借用された漢語として、新漢語になった過程とその要因を考察する。最後に、歴史的変遷とともに、中日両言語の交流で生まれた意味分野ごとの変化、及びそれらの変化が“观念”と「観念」に与えた影響を概観する。

2. 辞書における「観念」と“观念”の意味

まず、五冊の日本語の辞典から取り上げられた「観念」における意味分野の説明である。

表15 辞典における「観念」の意味分野

	日本国語大辞典 (1989:594)	大漢和辞典 (1984:10792)	新言海 (1969:365)	Web版学研国語 大辞典(1988)	Web版学研全訳 古語辞典(2014)	本研究での 意味分野
①	仏語。物事を深	仏語。真理、	仏語。観察思	心を静めて仏教	真理を悟るため	仏語。真理、

	く考えること。	仏体を観察思念すること。	念すること。	上の真理について考えること。	に、仏・菩薩の姿を心の中に描いて念ずること。	仏体を観察思念すること。
②—A	覚悟すること、あきらめること。『虎明本狂言・宗論』(室町末-近世初)に由来。	あきらめ、覚悟。	あきらめ、覚悟、決意。	覚悟すること、あきらめること	覚悟すること、あきらめること。	覚悟すること、あきらめること。
②—B	哲学で、何かを意識したり、考えたりした時に、意識の内にあられる内容。『生性発蘊』(1873)に由来。	心的現象、概念。	記憶・想像・概念を指す。	意識的内容		意識的内容、概念
②—C	考え、意識			考え		考え

表15から、日本語の「観念」は4種類の意味分野を意味することが分かった。仏典語としての機能についての説明は、表16の中国語の辞書記録とほぼ同じである。また、「覚悟すること」や「あきらめること」を表す「観念」は、室町末期の『虎明本狂言・宗論』に由来すると記載されている。そして和製新語義、「意識的内容」や「概念」を意味する「観念」の出典は『生性発蘊』(1873)であると載せられている。次に、五冊の中国語辞書からまとめた「観念」についての解説である。

表16 辞典における“観念”の意味分野

	大辞海 (2016:1188)	漢語外来語詞典 (1985:126)	近現代漢語新詞 詞源詞典 (2001:93)	現代漢語詞典 (2016:479)	デジタル現代 漢語大詞典 (2007)	本研究での 意味分野
①			佛教用語, 指对特定对象或义理的思维和记忆。(仏語、特別な物事や義理における思惟と記憶)			特別な物事や義理における思惟と記憶
②—B	客观事物在人类脑子里留下的概括的形象、表象(客観的な物事が人間の脳に残ったイメージ、表象)	客观事物在脑子里留下的概括形象(客観的な物事が人間の脳に残ったイメージ。)日本に由来。	客观事物在人类脑子里留下的概括的形象、表象(客観的な物事が人間の脳に残ったイメージ、表象)	客观事物在人类脑子里留下的概括的形象(客観的な物事が人間の脳に残ったイメージ)	观点, 概念(見地、概括的な意味内容)	概括的な意味内容

㉑-c	思想意识(思想意識)	思想意识(思想意識)		思想意识(思想意識)	思想意识(思想意識)	思想意識
-----	------------	------------	--	------------	------------	------

中国語の“观念”は、3種類の意味的範囲を持つということをここで示している。それらは仏典に由来したものと、和籍に由来したものによって構成されると記述されているが、語源における出典の表記は見られない。これについては検討する必要があるだろう。

3. 仏典系「觀念」について

1) “觀念”の成立

《丁福保仏学大詞典》(2011)と《仏学次第統編》(2008)では、“观念”を“观察思念真理及佛体也”(「真理と仏体を觀察思念すること」)と解釈する。これを意味する仏典語としての“观念”は最初、中国の南朝宋時代¹⁶³⁾(420-479)の劉宋訳経¹⁶⁴⁾から出てきた。その内、求那跋陀羅¹⁶⁵⁾が訳した《雜阿含經》¹⁶⁶⁾(443)は、原始仏教の基本経典として大変重視されている。そこで“觀念”が用語として作られた。例は次の通りである。

例(188) 有四念處，何等為四？謂身身觀念處¹⁶⁷⁾；受：心；法法觀念處¹⁶⁸⁾。

(「道品誦」《雜阿含經》求那跋陀羅 443年)

163) 中国南北朝時代の南朝の王朝。周代の諸侯国の宋や趙匡胤が建てた宋などと区別するために、帝室の姓を冠し劉宋とも呼ばれる。首都は建康、今の南京。

164) 劉宋時代、あるいは南朝宋時代の仏教の漢訳経。

165) 中インド出身の訳経僧(394-468)。バラモン階級(インドの最高位の司祭階級)出身である。功德賢と訳す。幼時から天文、書算、医学、呪術を広く通じたが、仏法に帰依して出家した。諸国で遊学し、劉宋元嘉12年(435)、海路を経て広州に到着。南朝宋の文帝によって迎えられ建康に入る。来朝後は、様々な大小経典の翻訳に従事。後の中国仏教に多大な影響を与えた。

166) 仏教の漢訳《阿含經》の1つ。阿含とは、サンスクリット・パーリ語のアーガマの音写で、「伝承された教説、その集成」という意味である。

167) “身身觀念住”、“身身念”、“念身”、“自觀身”、“觀身如身念處”、“身念”と訳したこともある。

168) “法法觀念住”、“法法念處”、“自觀法”、“觀法如法念處”、“法念處”、“法念處”と訳したこともある。

《阿含辞典 庄春江居士編》(2013)の解説では、“身身觀念処”は“保持在身上看到生理的变化, 分辨此身从何来, 为谁所造”という意味である。日本語に訳すると、「体の生理的变化に注目して、この体はどこから来たのか、だれが作ったのかを識別する」という意味である。そして“法法觀念処”は“保持在法上看到的變化, 知内心有結、无結; 观无常、断、无欲、灭”を意味し、訳すると、「法の変化に注目して、みぞおちのあたりが苦しいかどうかなど、すべての考えを観察する」という意味であると思われる。

“觀念”が中国で誕生したことにより、インド哲学における觀念論¹⁶⁹⁾の発展が見られるようになった。例えば「觀念念仏」¹⁷⁰⁾が仏典語として用いられるようになったことなどがある。そして、善導大師¹⁷¹⁾が著した《觀念法門》¹⁷²⁾(615)が有名な仏典として普及された後、承和6年(839)、円行¹⁷³⁾によって日本に導入されることとなった¹⁷⁴⁾。

次に、永嘉玄覺¹⁷⁵⁾が撰した仏典と唐代詩人が作った五言詩¹⁷⁶⁾からの例である。

例(189) 物物斯安，觀念相續；心心靡間，始終抗節。

(《<禪宗永嘉集>序》魏靜 665-713)

例(190) 觀念幸相續，庶幾最後明。

(《遊法華寺》宋之問 656-712)

例(189)の“觀念相續”は、「雑念を持たず、ある物事だけに注意を集中させること」を意味すると考えられる。この文は仏典に使われていただけでなく、詩作にも使われていた。例えば、例(190)を日本語に訳すると、「幸いに注意力を集中し

169) Dhammapadaが論じた「一切唯心造」から分かるように、インド仏教における觀念論は、唯心的傾向がある。西康友(2005)「インド思想の心——インド思想の源泉」『中央学術研究所紀要』(34)、p. 174と『仏教哲学大辞典』(1986)聖教新聞社を参考。

170) 阿弥陀仏を観察し思念すること。参考同上。

171) 中国浄土教の僧。「称名念仏」を中心とする浄土思想を確立する。「終南大師」や「光明寺の和尚」とも呼ばれる。

172) 首題に『觀念阿弥陀仏相海三昧功德法門』とあり、尾題にはこれに「經」の一字が付加されて『觀念阿弥陀仏相海三昧功德法門經』とあるが、一般には略して『觀念法門』と称されている。

173) 平安時代の真言宗の僧。入唐八家の一人。

174) 日蓮(1276)『報恩抄』、p. 337

175) 中国の唐代の禅僧。俗姓戴。字明道。号永嘉玄覺。諡は無相禅师。禅宗の六祖慧能の直弟子である。彼が作った『証道歌』は日本の曹洞宗で現在でも読まれていると言われている。

176) 中国の古典詩の形態の一つ。五字句によって構成された詩の総称。

て観察思念することができるので、最後には明らかになるだろう」という意味である。

次に、遣唐使における入唐請益僧である円仁¹⁷⁷⁾の日記、『入唐求法巡礼行記』¹⁷⁸⁾に記されている文である。

例(191) 四王八部龍神天人及諸聖眾或舉物悲哭之形，或閉目觀念之貌。

(『入唐求法巡礼行記』円仁 838-847)

ここでの“觀念”は同様に仏教の真理を観察し思念することを意味する。前述した漢文を日本語に訳すると「四十二像の容貌は、或いは物を持ち上げて慟哭し、或いは目を閉じ觀念する。」¹⁷⁹⁾という意味である。

次に、宋朝以降の仏典の例である。

例(192) 簡而易行者。唯西方淨土也。但能一心觀念。總攝散心。

(《楽邦文類》宗暁 1151-1214)

例(193) 喜曰。吾以一夕觀念。便蒙接引。自省四大。了無疾苦。

(《浄土聖賢録》彭希涑 1783頃)

例(192)の“一心觀念”とは、「精神を一点に集中して考えること」で、例(193)“一夕觀念”とは、「わずかな時間をかけて物事を深く考えること」である。これら二つの“觀念”は対象を正しく見極めることを指すとされている。

2) 日本における仏典系“觀念”の受容

仏典系の「觀念」の語義について、『Web版 新纂浄土宗大辞典』(1943)では次のように記されている。

177) 慈覚大師ともいう。9世紀の日本人僧である。最澄に師事した天台僧で、のちに山門派の祖となる。入唐八家の一人。

178) 日記式の文体で書かれる。838年、博多津を出港した場面から始まり、中国の揚州へ向かい、847年に日本に帰国するまでを記述する。

179) 拝島大師(2018)「慈覚大師円仁讃仰「入唐求法巡礼行記」研究—その29—」参考。

「対象を観察し思念すること。心の散動を静めて対象に集中し、その状態に生じた正しい智慧によって真理や存在の本質を観察し思念するはたらきのこと。その結果として悟境への到達がもたらされる。なお西洋哲学で用いる観念の語は、古代ギリシャの「イデア」に由来する近代の術語に対する翻訳語である」¹⁸⁰⁾。

「観念」は「仏教上の真理を観察し思念すること」を意味するという点は、上述した日本語辞典における意味記述と一致している。これを参考にし、検討する。

まずは「観念」の出典についての論説である。『日本国語大辞典』(1989)の記載によると、仏典語としての「観念」は最初に、平安初期弘法大師¹⁸¹⁾の漢詩文集、『遍照發揮性靈集』¹⁸²⁾(835頃)から出てきた。彼は、上述した円行(839年《観念法門》を日本に導入した)、円仁(《入唐求法巡礼行記》(838-847)の著者)と同様に、入唐八家¹⁸³⁾の一人として中国語の“観念”、或いは日本語になった「観念」を使用した。つまり、平安初期830年代、入唐八家によって、【意味①】を持つ“観念”が中国から日本に伝えられたと考えられる。しかし、調査によると、出典の『性靈集』は弘法大師の弟子が編成したものであり、「観念」がその中に載せられている「請奉为国家修法表」¹⁸⁴⁾に現れるが、弘法大師がそれを上表した年代は弘仁元年(810)であることが確認された¹⁸⁵⁾。

当時、「葉子の変」¹⁸⁶⁾が収束した直後の10月、帰朝した弘法大師が国家の安泰を祈念したいと上表した。彼は、密教が鎮護国家のためには最大の効力を発揮するということを提唱した。上表文では、唐では歴代の皇帝をはじめ高位高官が、密教に基づき、灌頂を受けて陀羅尼を誦持し仏を観想しているとある¹⁸⁷⁾。その本文は

180) 広松渉他(1988)『岩波哲学・思想事典』岩波書店参考。

181) 空海の諡号。中国より真言密教をもたらした。803年、遣唐使の医学を学ぶ留学僧として、唐に渡る。入唐八家の一人。

182) 空海がおりに触れて作った詩・碑文・願文・表白などを、弟子の真済が集成編集したもの。当時の宗教、文学、政治などを知る貴重な資料である。

183) 平安初期、日本から唐代の中国に渡り、密教経典を伝えた八人の僧。最澄、空海、常暁、円行、円仁、恵運、円珍、宗叡をいう。

184) 「国家の奉為に修法せんと請う表」。弘法大師は入唐で体得した「鎮護国家」という思想を、日本においても実践したいと考え、帰朝後上表しており、承和元年(834)11月に、「宮中真言院の正月の御修法の奏状」で密教の修法を行うことを上奏し、12月29日太政官符に勅許された。翌年より「後七日御修法」が行われたとされている。

185) 鶴浩一(2013)「平安時代の宮中真言院について」『高野山大学大学院紀要』(13)、p.25

186) 810年に起こった宮内政変。平城上皇に寵愛されていた藤原葉子が兄仲成らとともに、平城への遷都と上皇の重祚を企てた事件。上皇は出家、仲成は処刑され、葉子は自殺した。

次の通りである。

例(194) 親授灌頂、誦持観念。

(「請奉為国家修法表」『性靈集 - 四』弘法大師 835頃)

より簡単な日本語に言い換えると、「(官位に進んだ時)親り灌頂——頭に水を注ぐ儀式¹⁸⁸⁾を授けられて、聖經を読みながら仏の真理を観察し思念する」という意味である。「観念」はここで、動詞の機能を果たして語源と同じ意味的範囲を持つことがはっきり見られる。

次に平安末期の『今昔物語集』からの例である。この説話集は天竺(インド)、震旦(中国)、本朝(日本)の三部で構成され、「観念」という語は、巻第十五の本朝付仏法(僧侶の往生譚¹⁸⁹⁾)に現れた。

例(195) 我レ、一心に極楽ヲ観念スルニ

(『今昔物語』一五 作者不詳 1120頃)

ここでの「観念」は「極楽」における真理を観察し思念することを意味する。「極楽」とは「阿弥陀仏の浄土」であり、「極楽ヲ観念スル」とは「(死後に)極楽浄土という素晴らしい世界に生まれ変わることを願う」という意味である¹⁹⁰⁾と考えられる。

その後、鎌倉時代に入ると、日本語としての「観念」の活用性がより高くなり、語の使用範囲の広がりも見える。仁治1年(1240)、観念寺が伊予の豪族・越智盛氏によって創建された¹⁹¹⁾。図4は「観念寺文書」である。

187) 武内孝善(2011)「安史の乱・葉子の変と密教」『京都・宗教論叢』(6)、pp. 42-43

188) ⑤abhiṣecanīまたはabhiṣekaの訳。『Web版 新纂浄土宗大辞典』(1943)参考。

189) 例(193)は第八話「比叡山ノ横川ノ尋静、往生セル語」に由来。比叡山の横川の僧、尋静が、73歳の正月についに病いに臥しがた、弟子たちとともに毎日三度、念仏を唱えた。青木敦(1990)「末法世前夜の文学——平安中期の仏教説話における「念仏往生譚」の様相——(三)」『跡見学園短期大学紀要』(26)、pp. 3-4

190) 石橋義秀(2011)「平安仏教から鎌倉仏教への展開：『今昔物語集』の仏教説話を通して(第三九回光華講座)」『真宗文化：真宗文化研究所年報』20、pp. 20-40

191) <http://rekisitanbou.seesaa.net/article/274198815.html>により。

一方、日蓮¹⁹²⁾が「観念」を使っていくつかの
 仏典語を作った。正嘉元年（1257年）8月、多くの
 死者を出した大地震が鎌倉に起こった。日蓮
 は自然災害の原因を仏法に照らして究明し、災
 難を止める方途を探ろうとした¹⁹³⁾。その結果、
 彼は『一念三千法門』、『守護国家論』、『災
 難対治抄』などの著作を著し、「観念心地」¹⁹⁴⁾
 （日蓮(1258)『一念三千法門』p. 435)を日本の仏
 典語として使った。のちに、「観念思惟」¹⁹⁵⁾
 （日蓮(1268)『聖愚問答抄』p. 519)と「観念工
 夫」¹⁹⁶⁾（日蓮(1268)『聖愚問答抄』p. 517)も
 次々に仏教界で用いられるようになった。

次に、鎌倉時代の民部郷や家臣が著した日記
 である。

例(196) 是又知生死必滅之習、飛花落葉之観念、灑涙
 者也。 （『民経記』¹⁹⁷⁾勘解由小路経光 1233)

例(197) 合掌にて御観念共也
 （『上井覚兼日記』上井覚兼 1582)

仁治元年是歳

是歳、新居盛氏、伊豫桑村郡上市村ニ観念寺ヲ創建ス、

〔観念寺文書〕〇三 伊豫

右観念禪寺者、根本大檀那散位越智宿禰盛氏、相當親父玉氏十三廻之忌辰、
 延應二年^{庚戌}子次始奉造立之寺也、漸經七十年、新居禪定阿延慶三年^{庚戌}再
 被致修造者也、又經五年、正和四年^{乙卯}次新居盛康、兼盛重被致修覆者也、又三
 十六年後、貞和六年^{庚寅}次二月三日、住持比丘繼印、改本基一生加修造之者也、
 始自延應二年、至貞和六年、已上一百一十年也、

二六〇

図4 観念寺文書

例(196)を現代日本語に訳すると、「この世では、生命あるものは必ず死滅するときが来るとことを知り、咲く花もやがて散り、青葉もやがて色づいて落ちるとことを考えると、世の無常を悟って涙がこぼれた」¹⁹⁸⁾という意味であると思う。また、例(197)は、「左右の手の平を合わせて、専至一心に仏の真理を観察し思念する¹⁹⁹⁾」という意味であると思われる。こ

192) 鎌倉時代の仏教の僧。鎌倉仏教の一つである日蓮宗の宗祖。
 193) 小松邦彰他 (2015)『法華経と日蓮』春秋社、p260
 194) 経文を読まなくて、心で法を観念すること。《仏教哲学大辞典》(1986) 聖教新聞社を参考。
 195) 観察し思念すること。また諸法の真理を分別すること。参考同上。
 196) 一心に、諸法の真理を観察し思念すること。参考同上。
 197) 鎌倉時代中期の公家社会の行事が記されている重要史料。
 198) 「生死必滅」と「飛花落葉」は、《仏教大辞典》(2018) 商務印書館を参考。

こでの「御観念」は、日本語的な敬意表現であるということから見れば、受容された「観念」はすでにこの時期、日本語に完全に融合されていたということである。

次に、室町時代の天皇皇族実録からの例である。

例(198) 仏陀寺長老知練を召して観念法問を講ぜしめられる

(『後土御門天皇実録』藤井謙治・吉岡真之 1482)

上で述べたように、『観念法問』は839年日本に導入された。ここでは、天皇が「仏陀寺の僧、知練を呼び寄せて、その聖經における講義を請う」ことが見られる。

以上、仏典語としての「観念」は、当時日本の上層社会で使用されていたことが明白である。【意味①】は多くの場合に仏典に出てきたが、他の領域——上表文、物語、日記、実録などに使われたことも多々ある。仏典系の受容語としては、その定着は非常に強いと確認された。そして、社会の変化に伴う言葉の需要に応じて、ここでは「動詞から名詞」への品詞転換が「御観念」などから見えた。

4. 和籍系「観念」について

1) 日本における和籍語「観念」の成立と発達

—室町時代の【意味②—A】を中心に—

漢語には、日本人に受容され始めた当初から梵語由来の仏典語が数多かった。「観念」などの仏典語は、最初は主に豪族の間に広がった。鎌倉時代に入ると、一般庶民に広く浸透していき、僧侶以外の者にも用いられるようになった²⁰⁰⁾。中世の語彙体系の特色としては、前代に比べて漢語が増加し、上層社会で使われていた書き言葉としての漢語が、日常語として用いられるようになり、さらには、日本で

199) 『Web版 新纂浄土宗大辞典』(1943)浄土宗を参考。

200) 倉島節尚(2008)『日本語辞書学への序章』大正大学出版会、pp. 189—190

新たに造語した和製漢語が生じた。中世の後半期、室町時代に入ると、狂言という庶民層を基盤に成立した芸能の発展で、口語的な台詞が多く書かれた²⁰¹⁾。『日本国語大辞典』(1989)の記載によると、【意味②—A】が付与された「観念」が、和製漢語として『虎明本狂言』²⁰²⁾に現れた。原語の「観察し思念すること」と、派生語の「覚悟すること」・「あきらめること」には、「考え」や「明白に」などの意味素が含まれる。これらの重なり合う部分によって、元の語義が類義的な意味分野に移動していることが見える。例は次の通りである。

例(199) 観念のいたしやうが有るに。

(『虎明本狂言・宗論』大蔵虎明 室町末 - 近世初)

上述した各辞書的解説によると、「観念」はここで「覚悟すること」や「あきらめること」を意味する。つまり(199)は、「覚悟しよう」、或いは「あきらめよう」を表していると考えられる。

次に、江戸以降の各文献の例である。

例(200) この木瓜にうち添ひて、私が紋の松皮の松の千歳を祈りしにさだめぬ契り、提灯のきゆる命の夕べには、この紋つけて我が仲の経帷子と観念し冥途の道をこのやうに、手を引かうぞや。(「冥途の飛脚」『近松浄瑠璃』近松門左衛門 1711)

例(201) もふこれがこの世の暇乞ひだぞ。観念しろ。(『黄表紙・敵討義女英』1795)

例(202) ア、是も会主への義理しやと観念して書画の注文でも扇面が式百疋唐紙なら五百疋と極札がついてある腕を一言の礼のみで先四五本かゝせられたと思ひなさい。

(『安愚楽鍋』仮名垣魯文 1871)

例(203) 彼は都会の土では萎れ、郷土でやっと息を吹き返すかの植物にも似た自分の宿命を観念した。(『厚物咲』中山義秀 1938)

例(204) 申し開きの道がないのか、あっても無駄だと観念したのか、もう妙子は何を云われても答えなかった。(『細雪』谷崎潤一郎 1936)

201) 全亨式(1999)「中世語の史的研究-大蔵虎明本狂言集の漢語を中心に-」、p. 102

202) 寛永19年(1642)大蔵流十三世宗家大蔵弥太郎虎明が書き留めた狂言の台本である。最初の狂言台本。言葉は室町時代の話し言葉を基本とすると考えられるが、室町時代を通して流動し、言葉に関しては江戸時代の言葉の混入を認めなければならない状態にあったと言われている。蜂谷清人(1995)「狂言の国語史的研究-流動の諸相-」明治書院、p. 57参考。

ここでの「観念」は同様に「覚悟すること」や「明らかにすること」を示している。例えば、例(200)の「この紋つけて我が仲の経帷子と観念し」は、「兄弟の、この経文が書かれた紋付きの死装束である²⁰³⁾と明らかにすること」、例(201)の「観念しろ」は、「別れること²⁰⁴⁾を覚悟しろ」、例(202)の「会主への義理しやと観念して」は、「(交際関係のために)主催者への礼儀²⁰⁵⁾をするものであるよと意識して」、例(203)の「自分の宿命を観念した」は、「避けることも変えることもできない運命を覚悟した」、例(204)の「無駄だと観念した」は、「役に立たないと覚悟した」を意味するであろうと思う。例文から見ると、「観念」は事物を明白に知ることを指していると考えられる。

古典語義と言え、中国語の“観念”は単に【意味①】を意味する仏典語として仏典や、詩集などに用いられる。日本語の「観念」は、【意味①】の機能を担う場合、平安時代の物語や、鎌倉時代の日記抄、室町時代の天皇実録などによく現れる。そして、【意味②—A】の機能を担う場合、庶民までにも使われる日常用語となっている。両者を比較すると、古語としての「観念」の使用範囲がより広い。その上で語の活用性もより高いことが明らかである。

2) 日本における和籍語「観念」の成立と発達

—明治時代の【意味②—B】を中心に—

「観念」は、中国の仏典や、日本の古籍・仏典に見られる語であることが確認できた。これは純粋な和製新造語ではなかったが、古典の意味を転用した点で新語だと言える。18世紀後半から19世紀前半にかけて、観念学はフランスで主導的な哲学思潮とされている。明治期に観念学の導入に伴って、「観念論」、「観念」などの術語も訳語として日本で用いられ始めた。近世哲学での新たな人間中心的認識論²⁰⁶⁾の影響で、西周が『生性発蘊』²⁰⁷⁾を執筆して、様々な術語を訳した²⁰⁸⁾。

203) 『Web版 新纂浄土宗大辞典』(1943)によると、「経帷子」は、死者が納棺に際して身につける白の木綿を用いた裏地のない衣服。経帷子は、死装束の一つとして着物一面に経文が書写されたもので、経衣ともいう。

204) 暇乞ひとは、最後の別れ。『日本国語大辞典』(1989)小学館を参考。

205) 義理とは、職業、階層、親子、主従、子弟などのさまざまな対人関係、交際関係で、人が他に対して立場上務めなければならないと意識されたことである。参考同上。

206) 人間を考慮した認識論。自然環境は、人間が利用するための存在であるという信念のことである。

『日本国語大辞典』(1989)の記載によると、西周は明治6年(1873)の『生性発蘊』で「観念」を訳語造語と確定した。例(205)はその西周の言葉である。

例(205) 観念の字は仏語に出づ、今此書には英のアイデア、仏のイデーなる語を訳す。
(『生性発蘊』西周 1873)

西周は、「観念」をフランス語“idée”と意識しながら、英語“idea”の訳語に当てたことが分かった。上述した各辞書の解説から分かるように、和製漢語の「観念」は、「意識的内容」や「概念」を意味している。では、これを【意味②—B】と標記して分析する。

例(206) 日本料理の基礎観念 (『日本料理の基礎観念』北大路魯山人 1933)

例(207) 私は永年の習慣によつて、眼を紙から一定の距離に置き、今書いた字は言ふまでもなく、今迄書いた一聯の文章も一望のうちに視野にをさめることが出来る、さういふ状態にみない限り観念を文字に変へて表はすことに難渋するといふことを覚らざるを得なかつた。
(『文字と速力と文学』坂口安吾 1940)

例(208) 芸術上でわれわれが常に思考する永遠という観念は何であろう。
(『永遠の感覚』高村光太郎 1941)

例(209) 死は既に観念ではなく、映像となって近づいていた。私はこの川岸に、手榴弾により腹を破って死んだ自分を想像した。
(『野火』大岡昇平 1951)

例(210) まず第一に問題になりますのは、世上俗に言われておりますマルチ商法、これは法律概念的には整理をされていない観念でございまして、実はこの実態が一体どれだけあるか。
(『国会会議録』1976)

例(211) 一体道德という観念が何かということからが問題になって来ざるを得ない。
(『道德の観念』戸坂潤 2012)

例(206)の「基礎観念」とは「日本料理における根本的な概念」という意味であ

207) 該書においては、コントの学説が数多く翻訳引用されておる。そしてコントは、フランスの社会学者、哲学者、数学者、総合学科者。「社会学」を創始する。

208) 西周がコントの統一科学思想に惹かれながら、コントの人間性論に次第に注意を向けるようになった。小泉仰(1970)「西周の『生性発蘊』とコントの人間性論:資料としての検討」『哲学』(56)、p. 1 参考。

り、「観念」はここで大まかな意味内容を表すと言われている。例(207)の「観念を文字に変へて表はす」とは「意識的内容を書いた言葉で表すこと」、例(208)の「永遠という観念」とは「いつまでも変わらずに続くことという概念」、例(209)の「死は既に観念ではなく」とは「死ぬことはもう主観的な意識ではない」、例(210)の「観念」とは「マルチ商法という販売方式における概念」、そして例(211)の「道徳という観念」とは「行為すべき道という主観的概念」である。つまり、例(206)、(208)、(210)の「観念」は客観的概念を示し、例(207)、(209)、(211)の「観念」は主観的な意識を表すと考えられる。

3) 和製漢語である「観念」の意味変化

【意味②—B】から派生した【意味②—C】、「物事に対する考えや見解」について、「固定観念」、「責任観念」、「経済観念」、「時間に対する観念」などが解説例として『広辞苑』(1978)と『日本国語大辞典』(1989)に挙げられている。ここで、上位概念から下位概念への転換ははっきり見られる。それは言語的要因で、限定辞のために意味範囲が縮小するということである。次に、辞書の解説を参考にして各例文を分析する。

例(212) 童生の既に経験して観念を有するもののみを撰択し(略)。

(『小学読本』若林虎三郎 1884)

例(213) 一番先に見付たものが之を食ふ権利があるものとなって居る。(略) 然るに彼等人間は毫も此観念がないと見えて

(『吾輩は猫である』夏目漱石 1905)

例(214) それから安夫が黙ってはじめてことは、何か義務観念にとらわれているようで(略)。

(『潮騒』三島由紀夫 1954)

例(215) 墓に、豪華な鏡や玉を埋納するのは、後世の、「幣」のような観念が、当時もあつたことを思わせる。

(『日本誕生記』安本美典 1993)

例(216) 日本では、空間と時間に関する観念が、特にアメリカとは違います。

(『進むべき道』浜田宏一 2001)

「観念」はある事柄に対する考えを指すと言える。例えば例(212)の「経験して観念を有するもの」は「一定の経験によって、何かの思想や考えを獲得できた

人」、例(213)の「此観念がない」は「(人間は猫のように)、誰かが先に食物を見つけたら誰かが先に食べられるという意識を持たない」、例(214)の「義務観念」は「行わなければならない行為に対する考え」、例(215)の(「幣」のような観念)は「死人のために神に供え物を捧げる²⁰⁹⁾という意識」、例(216)の「空間と時間に関する観念」は「空間・時間に対する考え」を表す。その内、例(212)と(213)の「観念」は、発生した事柄から得られた考えという意味であろうと思う。その他の「観念」は人生・社会からまとまったある物事に対する体系化された考えを意味していると思われる。

以上、和籍漢語「観念」における意味の変遷を次の表17にまとめた。

表17 「観念」における和製語義の意味交替

	意味範囲	使用時期	定着性
意②—A	覚悟すること、あきらめること	室町～現在	定着
意②—B	意識的内容、概念	明治～現在	定着
意②—C	物事に対する一定の考え	明治～現在	定着

室町時代末期に形成された「観念」は、「覚悟する」や「あきらめること」を意味して、〔意向〕²¹⁰⁾・〔願望〕²¹¹⁾という意味分野に属する。また明治時代の和製新造語としての「観念」は二つの意味的範囲を持つが、【意味②—B】及びそこから派生した【意味②—C】は、小分類では〔観念〕、大分類では〔思考〕²¹²⁾に含まれる。これらの和籍系の意味分野は現在までもよく用いられ、語の定着性は強いと見なされる。特に【意味②—C】は活用がある意味分野であると言う。なぜなら、【意味②—C】を表現する時、「観念」と指示物との連体修飾関係を構築しなくても使われるからである。

次に、表18は日本語の「観念」の意味の変遷を整理したものである。

表18 日本における「観念」の意味変遷

209) 『Web版 学研国語大辞典』(1988)学研プラスによると、「幣」は「神に祈るために捧げるもの」を意味する。
 210) 『類語国語辞典』(1985)角川書店、p. 667参考。
 211) 『デジタル類語例解辞典』(2003)小学館を参考。
 212) 『類語大辞典』(2003)講談社、p. 199参考。

語種	意味成立の原因	古語の意味	現代語の意味
仏典系漢語	中国から仏教の伝来	意味①	= 意味①
和籍系漢語	西洋哲学の導入	意味②-A	→ 意味②-A、②-B、②-C

仏教の隆盛と伝播が漢語の和化現象に大きな影響を及ぼしたと言える。9世紀初期、入唐八家が、中国から仏教観念論及び仏典語の「観念」を日本に導入した。仏教が広まるにつれて、仏教に関する言葉も知識階層から庶民にまで広がり、それはやがて日常の生活用語に取り入れられていった。鎌倉時代に入ると、仏典語として活躍していた場合、「観念」が動詞から名詞へと転換することは珍しくない。例えば、「観念思惟」、「観念工夫」、「観念心地」、「御観念」などの和製仏語や、和語との複合語が次第に造られている。ここで「観念」と和語との融和がはっきり見られる。

室町末期に入ると、「観念」における受容性の高さから新しい和製語義【意味②—B】が誕生した。その後、明治期から西洋観念学の導入に伴って、「観念」が訳語としてまた新概念【意味②—B】を付与された。和製漢語として用いられ始め、そして新義から派生した【意味②—C】の機能も果たしてきたということである。

4) 中国における和製漢語「観念」の逆輸入

上述した中国語の辞書における意味記述から分かるように、「観念」の和製新語義、【意味②—B】と【意味②—C】が中国語に導入された。19世紀末から20世紀初頭、中国にとって、日本は「近代知」の源泉であったと言われている。当時の中国知識人は東西文化思想——伝統文化観と近代化の新思潮を融合しようとする際、大量の和製漢語を受け入れた。和製漢語としての「観念」はその風潮に伴って中国語に導入された。例を挙げると、“宗教的観念”「宗教における意識思想」（『清議報』巻百 p. 1）や、“滿漢之観念”「滿漢における意識思想」（『清議報』巻七十三 p. 4637）、“観念之進歩”「観念の進歩」（《浙江潮》²¹³⁾巻二 p. 125）、“近世世界史之観念”「近世世界史の意識思想」（《大陸》巻二 p. 21）などが次々に、戊戌の変法に伴って中国語の刊行物に現れた。以下は中国の新語“观念”の例である。まずは【意味②—B】についての分析である。

213) 1903年から東京で創刊された月刊。

例(217) 倘所印證之義，其表裏適相吻合，善已；若稍有牽合附會，則最易導國民以不正確之觀念，而緣郢書燕說以滋弊。 (《梁啓超文集》梁啓超 19世紀末20世紀初)

例(218) 光緒二十八年春，余等始返北京。及余得見宮闈，誠不能無恐怖之觀念。
(《清宮禁二年記》裕德齡 1905-1912)

例(219) 他的主要觀念也只是‘孔子之道不合現代生活。
(《〈吳虞文祿〉序》胡適 1921)

例(220) 可惜他所說都是零星片斷，不能給我一明晰的觀念。
(《餓鄉記程》瞿秋白 1922)

例(221) 不知熱帶之地，不憂凍餓，故人多慵惰，物易壞爛，故薄於所有觀念。
(《晚清文選》鄭振鐸 1937)

例(222) 由于东、西部在经济基础、人的观念意识等方面存在巨大差异，信贷政策因此在不同区域产生不同的效果。
(《科技文献》賴茂生 2004)

中国語の辞書記録を参考にすると、ここでの「觀念」は「見地」や「概括的な意味内容」を表すことが分かった。例(217)の“不正確之觀念”とは「正しくない意識」、例(218)の“恐怖之觀念”とは「危害が加えられると思うこと」、例(219)の“主要觀念”とは「肝要な見地」、例(220)の“明晰的觀念”とは「明らかな見地」、例(221)の“薄於所有觀念”とは「全ての見地が狭い」、例(222)の“人的观念意识”とは「人間の見地・意識」と思われる。例(218)の“觀念”は、主観的意識を指すが、他の“觀念”・“观念”はある立場に立って考えられたものを意味していると考えられる。

次に【意味②—C】に関する例文である。

例(223) 李自成者，迫於飢寒，揭竿而起，固無革命觀念，尚非今日廣西會黨之儕也。
(《駁康有為論革命書》章炳麟 1903)

例(224) 通商衙門諸大臣曲意從之，惜無舉前事以相詰責者，即此已見當時吾國朝臣之外交觀念矣。
(《外交小史》作者不詳 1904—1912)

例(225) 你想我們中國的人，都是這般卑鄙齷齪的性格，那裏還有什麼顧全公益的胸襟、組織團體的觀念？
(《九尾龜》張春帆 1926)

例(226) 不合理的社會制度，不自由的婚姻，傳統觀念的束縛，家庭的專制，不知道摧

殘了多少正在開花的年青的靈魂。 (《<春天裏的秋天>序》巴金 1932)

例(227) 每个民族几乎无例外地都需要清除私有制度以及它在观念上遗留下来的垃圾。

(《東方》魏巍 1978)

例(228) 这次活动旨在推动全社会进一步树立尊老敬老、爱子教子的观念，为老人、孩子办好事、办实事。 (《人民日報》1999)

“观念”はここで「物事に対して持つ一定の思想意識」を指すであろうと思う。例えば、例(223)の“革命觀念”とは「社会組織を急激に変革することに対する考え」、例(224)の“外交觀念”とは「国際間の交渉に対する考え」、例(225)の“組織團體的觀念”とは「集団や集合体における思想意識」、例(226)の“傳統觀念”とは「伝統的な思想意識」、例(227)の“观念”とは「私有財産制度に対する考え」、例(228)の“尊老敬老、爱子教子的观念”とは「老人を敬って、子供を可愛がって育てるという意識」であると思われる。修飾語の付与で、“觀念”・“观念”はそれぞれの指示物に対するある程度の意識や考えを表すことが見られる。

次に、中国語の“观念”の語義変化を表19にまとめた。

表19 中国における“观念”の意味変遷

語種	意味成立の原因	古語の意味	現代語の意味
仏典系漢語	仏教の伝来	意味① =	意味①
和籍系漢語	日本から西洋哲学の導入	×	意味②-B、②-C

表19に示したように、インドから伝来した仏教の普及に伴って、5世紀中頃、【意味①】を持つ“觀念”が中インド出身の訳経僧によって造られた。それとともに、インド哲学思想——仏教の觀念論も漢訳仏典を土台にして中国に導入された。調査によると、この仏典系の意味的範囲は最初から今までも定着していると確認された。

一方、19世紀末から20世紀初頭、西洋新思潮が盛行していた時代に、和製漢語である「觀念」が中国に逆輸入され、【意味②—B】と【意味②—C】を機能する“观念”が、日本から由来した外来語として急速に知識人たちに受容された。

そして、中日両言語の近代化とともに、【意味②—B】と【意味②—C】が次々に日本語の「觀念」、中国語の“观念”に与えられた。両語にとって、これらの新語

義は現在中核的な意味特徴として高い位置を占めている。しかし、古典語義であった【意味①】や【意味②—A】を含めて考えると、今“观念”は三つの意味分野を持ち、「観念」は四つの意味分野を持っている。すなわち、意味的範囲の誤差があるということが分かった。

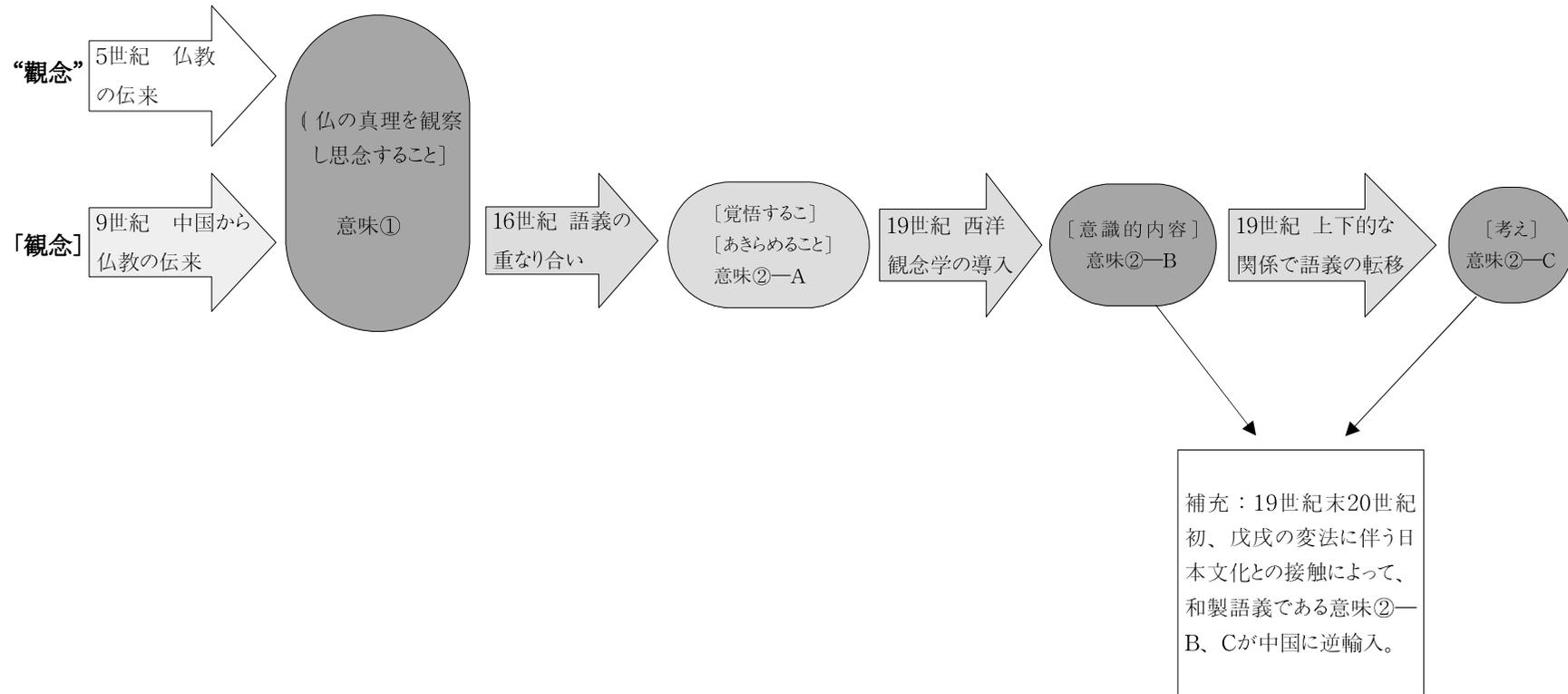
5. まとめ

中国語の“观念”と日本語の「観念」における意味の変遷について、次のことが明らかになった。

- ① “观念”も「観念」も仏典由来語＋和籍由来語という二重性格を持っている。
- ② “观念”は元々「仏における真理を観察し思念すること」を意味する訳語として、漢訳仏典《雑阿含経》(443)に現れたということを明らかにした。仏教が中国での隆盛のために、この語源の意味は現在までも認められるが、近代化に伴う和製漢語の導入と発展で、この意味分類の位置がより低くなった。一方、「観念」が日本では、最初に中国から導入された仏典語として用いられていた。第一章で述べた仏典語の「意識」と比べると、「観念」が日本での受容性が相当高いことが確認された。9世紀初期から、仏典系の「観念」は上表文、説話集、日記、実録など多分野でよく使用されていた。始めは権力者や貴族階級の用語であった「観念」は、次第に武士階級から庶民にまで広がって使用された。それと同時に、動詞から名詞への品詞派生も生まれた。
- ③ 仏典漢語が一般大衆への深い浸透のために、「覚悟すること」や「あきらめること」を意味する「観念」が、和製漢語として『虎明本狂言』(室町末)に現れ、そして現在まで用いられている。19世紀、西洋観念学の影響で、「意識的内容」という新語義が『生性発蘊』(1873)に見られた。同時に、新義から派生した「意識」という意味範囲も急速に流行した。19世紀末から20世紀初頭にかけての和製漢語の導入で、この二つの意味分野を機能する“观念”が、中国でより重視されてきた。その結果、それらが語義の中心的位置を占めるようになった。

④ 「觀念」の意味変化について、大きく歴史的要因と言語的要因を分けて説明できる。仏典語の「觀察し思念すること」と新漢語の「意識的内容」は同様に、異文化——インドにおける仏教文化と西洋における觀念論のある新概念を表現するために、訳語として造られた。また、意味の重なり合いから出てきた「覚悟すること・あきらめること」と、上下的な関係による意味変化で派生した「考え」は、言語的要因における意味変化であると考えられる。また、中国語の“观念”にとっての意味変化は、和製語義の「意識的内容」と「考え」の付加ということである。それは、近代化に伴う新文化及び新語の受容、すなわち歴史的要因によるのであるということを示した。まとめると、次の図の通りである。

図5 「観念」の意味変化の原因



第四章 「認知」の意味の変遷

1. 「認知」の出現と展開

本節では、和籍系の「認知」における各意味分野の由来、及びそれに関わる歴史的变化の過程を確認する。「認知」は、西洋の博物学が、日本における博物学研究や教育などに深い影響を与えたことにより、明治期に翻訳語として形成された。その後、日本社会の近・現代化とともに、新しい法律案を作る場で、そして欧米から認知心理学を受け入れる場で、「認知」に次々と新語義を付与され活用されてきた。一方、「認知」は純粹の和製漢語として、需要に応じて中国語に借用された。

2. 辞書における「認知」と“認知”の意味

次は、五つの辞典からまとめた日本語の「認知」における意味的解説である。

表20 辞典における「認知」の意味分野

	日本国語大辞典 (1989:1891)	大漢和辞典 (1985:10910)	デジタル大辞泉 (2020)	Web版学研国語 大辞典(1988)	Web版新明解国 語辞典(1989)	本研究での 意味分野
①	ある事柄をはっきりと認めること。『具氏博物学』(1876-77)に由来。	認めしる。わかまへる。	ある事柄をはっきりと認めること	ある事柄をみとめ知ること。	ある物事の実在を疑いのない事実と認めること。	はっきり認めること
②	法律上の婚姻関係の内男女の間に生まれた子を、その父または母が自分の子と認めること	規定の法式により、私生子の父又は母なる事を認める旨の意思表示をすること	婚姻関係にない男女の間に生まれた子について、その父または母が自分の子であると認め、法律上の親子関係	事実上の父または母が、婚姻外で生まれた子を自分の子であると認めること	自分が、その子の父(母)であることを認める法律上の手続き。	私生子を自分の子であると認めること

			係を発生させること			
③	心理学で、知識獲得の過程とそれによって得られた知識。知覚に比べて高次の認識。 “cognition”に由来。		心理学で、知識を得る働き、すなわち知覚・記憶・推論・問題解決などの知的活動を総称する。	ものの意味を知る知的な働き。	感覚器官の動きに経験などの力を加えて知識を得たり、何らかの判断を下したりする心理的な過程。	知識を得る働き

表20から、日本語の「認知」は三つの意味分野を機能することが分かった。その内、【意味①】の出典は『具氏博物学』（1876-77）であり、【意味③】は“cognition”の訳語であると記述されるが、【意味②】の典拠に関しての内容はない。次は中国語の“認知”に関する意味分野のまとめである。

表21 辞典における“認知”の意味分野

	辞海 (2009:3266)	Web版国語辞典 (2015)	デジタル現代漢語大詞典(2007)	Web版漢語大詞典(2018)	現代漢語詞典 (2016:1102)	本研究での 意味分野
①			认识和感知(認識する・感知する)		通过思维活动认识、了解。(思维活動によって認識し、了解する)	認識する
③	认识。获得知识的活动。(認識、知識を得る動き) “cognition”に由来。	个体知觉、记忆与运用讯息的过程。(个体知覚、記憶)		认识、思维或知覚的自身发展。(認識、思惟、知覚の発展)		知識を得る働き

表21のように、現代中国語としての“認知”は二つの意味分野を持つ。英語の“cognition”に由来すると記載されるが、和籍に由来するかどうかについての記録は全く見い出されない。「認知」は日本における純粋な和製漢語かどうかについて、次の節から詳細に考察を行う。

3. 和籍系「認知」の成立と展開

1) 日本における和籍語「認知」の成立

幕末より、欧米で博物学が盛んになり、多数の博物誌が出版された。当時の西洋学者は日本の動植物の研究を希望していたが、日本は鎖国政策を取っていたため入国ができなかった。そのような中で、日本との貿易を許されていたのはオランダと中国(清)のみであった。同時期の日本では、中国から『本草綱目』(1578)²¹⁴⁾の輸入をきっかけに本格的な本草学²¹⁵⁾研究が盛んに行われ始めた²¹⁶⁾。そしてオランダ学者らの導入で、ヨーロッパ由来の博物学書の翻訳が行われた。その東西の動植物書が大きく違っていると発見された後、蘭学の隆盛とともに、西洋博物学の研究がより興った²¹⁷⁾。明治以降、日本の本草学はやがて博物学へと移行し(明治末にかけて博物学はさらに進展し、現代生物学へと転じていく)、小学校からの理科教育²¹⁸⁾に採用され、動植物の知識は日本国民にあまねく教授されることになった²¹⁹⁾。明治元年(1868)、米国で出版された挿絵入り自然史——“A Pictorial Natural History”²²⁰⁾(1842)が、『具氏博物学』²²¹⁾として翻訳され、小学校で博物を教えるための教科書として使われるようになった。「認知」が訳語としてそこに現れた。

例(229) 我が見聞認知せる他人の容貌性質行状等を。

-
- 214) 中国の代表的な薬学著作。明の李時珍の作。動物・植物・鉱物約1900種について、名称・産地・処方例などを記述し、歴代本草学を集大成したもの。博物学的傾向が強い。慶長12年(1607年)、林羅山が長崎で本草綱目を入手し、徳川家康に献上している。これを基に徳川が本格的に本草研究を始めている。
- 215) 博物学ともいう。中国及び東アジアで発達した医薬に関する学問を指す。主として薬用となる植物・動物・鉱物を研究する学問で、特に植物を対象とした。
- 216) 謝蘇杭(2019)「近世本草学の「実学」の基盤」『東アジア「近世」比較社会史研究その2』、p. 44
- 217) 本草学は中国で生まれた学問であるが、奈良時代には日本に移入され、江戸時代に入ると、目覚ましい発展を遂げたが、やがて博物学へと変容していったと言われている。磯野直秀(2004)「江戸博物誌を顧みる」『参考書誌研究』(61)、p. 1参考。
- 218) https://www.tamagawa.jp/campus/museum/info/pdf/detail_14904-pdf-01.pdfにより。「明治5年(1872)に「学制」が頒布されて、近代学校制度が始まると、博物学は小学校教育の中に取り入れられた。近代科学の合理的な自然観を基に、身近な自然を観察し、科学的な考え方を養う博物学は、動物、植物、金石(鉱物)に分科され、物理、化学、生理と並んで学校教育の中で重視されている。明治中期になると、博物学は物理、化学、生理を統合した「理科」という科目になり、科学教育の基礎を担う科目分野になった」と言われている。
- 219) 三重大学附属図書館(2015)「本草学から博物学へ」、p. 9
- 220) サミュエル・グリスウォルド・グッドリッチ著。アメリカ合衆国の作家・編集者。児童文学をメインとする。ペンネームはピーター・パーレー。
- 221) 天文・地理・鉱動植物・化学・地学など総合的な内容。

(『具氏博物学』須川賢久訳 1868)

『日本国語大辞典』(1989)によると、「認知」はここで「ある事柄をはっきりと認めること」を意味し、元々動詞の機能を果たすことが分かった。ここでこれを【意味①】と標記して次の例文を分析してみる。

例(230) 明治今代の青年の脳髓中一箇の妄念有るを認知したり、少くとも舊大藩及び大小を論ぜず特に武張りたる舊藩士の子息にして且つ其性來活潑雄勇なる生物の中に往々這般の妄念の伏在するを認知したり(略)。(『隨感隨録』中江兆民 1887)

例(231) 若し西洋の思想を批評する事の眞に何たるを知る人あらば、必ずや予が言の無用ならざるを認知すべし。(『批評論』西堂居士 1888)

例(232) 貧でも幸福があり得、富んでも不幸があることは、少しく世相を看破した人にあつては誰も認知していることであることは、喩たとえば砂糖の有無多少が必ずしも美味不美味に正比例をなさぬと同じきが如くに受取られるのである。

(『貧富幸不幸』幸田露伴 1923)

例(233) その形を私は即座に認知した。十字架であった。(『野火』大岡昇平 1951)

例(234) 三条はようやく危険人物ではないと認知したのか、友好的な態度で接するようになってきたのだ。(『紅の悲劇』太田忠司 2002)

例(230)の「妄念有るを認知したり」と「妄念の伏在するを認知したり」はそれぞれに、「誤った心の思いがある」と「誤った心の思いが潜んで存在する」をはっきり認めることを指すと考えられる。例(231)の「予が言の無用ならざるを認知すべし」とは、「未来を予測するという言葉は役に立たないということを知らなければならない」、例(232)の「誰も認知している」とは「皆知っている」、例(233)の「即座に認知した」とは「すぐ認め知った」、例(234)の「危険人物ではないと認知した」とは「危ない人ではないと確認した」という意味であると思う。

2) 日本における和籍語「認知」の意味変化

明治期に入ると、西洋近代法の影響を受けて、日本における法律上の嫡出子の法的地位が明確化されてきた。明治6年(1873)、太政官第21号布告によって日本の法

制史上初めて「私生子」の名称が現れた²²²⁾。それとともに、「私生子認知」という話題も出てきた。内容は次のようである。

例(235) ①私生の子は出生によって生母との間にだけ親子関係が発生し、その身柄は生母が引受けること、また②父に対しては任意認知のみを認め、子や生母側からの「父の搜索」(強制認知)を否定した。(『太政官第21号布告』1873)

ここでの「認知」は【意味②】の「私生子を自分の子であると認めること」を指している。「任意認知」と「強制認知」は別々に「個人の自由意思に任せて私生子を認めること」と「他人の意思に反して無理に私生子を認めること」を意味すると考えられる。次に、この意味分野が用いられてきた例である。

例(236) 英國には私生子認知の法なく法律上之に父母なし。(『法律時評』岡田三面子 1901)

例(237) (愛人ノ死後)むつ子の両親は先方の親たちに、その子どもを認知してくれるように申しこんだ。(『真実一路』山本有三 1936)

例(238) そして逆に実父母との関係というのは断絶してしまうわけで、認知とかあるいは子供の側からの認知請求ですね、それもなくなってしまうということになるわけですね。(『国会会議録』1987)

例(239) 戸籍上はどうであれ実質的な扱いとしては、庶子(父の認知した妾腹の子)としてしか認めなかった、ということである。(『わたしの漱石』米田利昭 1990)

例(240) 自らの(理想と)思い描いていた像とはかけ離れていった息子を認知し難かったに違いない。(『父と子のフィールド・ノート』天沼香 2000)

例(238)の「子供の側からの認知請求」とは「私生子は、自分が実父母から生まれた子と認めるように求める権利」ということである。例(239)の「認知した妾腹の子」は庶子、すなわち私生子に対しての説明である。他の「私生子認知」、「子供を認知して」と「息子を認知し」は同様に、「婚姻関係にない男女の間に生まれた子を、自分の子供と認めること」を意味すると考えられる。このように、【意味

222) 村上一博(1996)「明治・大正期の私生子認知請求」『明治大学社会科学研究所紀要』35(1)、p. 79

②】を指す「認知」の指示物は「私生子」であることが確認された。ところが、本来動詞としての「認知」は、ここで名詞の機能を担っていることが見られる。

一方、【意味③】に関しての意味的解説は上で述べたように、「知識を得る働き」を示す「認知」は、英語の“cognition”に由来する。“cognition”は本来「知識獲得」を意味するラテン語由来で、人間の知的営み全般といった意味である²²³⁾。明治期から1960年代にかけて、英語の“cognition”は多くの場合に「認識」などと訳されていたが²²⁴⁾、認知心理学²²⁵⁾の成立と発展に伴って、「認知」が“cognition”に相当する訳語として用いられてきた。

認知心理学は1960年代以降に台頭した心理学の一分野²²⁶⁾で、社会の進歩に伴って、60年代後半から日本文明に浸透し始めた。例えば『ピアジェの認識心理学』(1965)、『音楽受容過程への認知心理学的接近』(1966)、『認識の心理学』(1967)などの、認知心理学に関する書物が1960年代に次々に刊行されていった。心理学用語である「認知」の形成と普及で、「認識」がこの分野で次第に取って代わられるようとする傾向はここではっきり見られる。このように、昭和期に「認知」が訳語造語として再び登場した。具体的な用例を挙げると次の通りである。

例(241) コントロールの機能は認知の種類によって二つにわけられる。

(『認知とパフォーマンス』梅本堯夫 1987)

例(242) 家庭での義務を果たすだけでは、社会的認知は得られないと、立派な学者さんも確かに言い切っている。(『いま、四十代を生きる女へ』マダム路子 1993)

例(243) 脳は、数多くの神経細胞から構成される情報処理器官であり、認知、思考、感情、意志等の高次機能を司っている。(『科学技術白書』科学技術庁 1996)

例(244) 摂食障害の人に共通して、体型と体重についての過剰な関心と認知の歪み(スリムな体型は美しく、成功の象徴である)がみられます。

(『みんなで学ぶ過食と拒食とダイエット』切池信夫 2001)

223) 塩谷英一郎(2006)「「認知的」を考える」、p.52

224) 明治時代に、“cognition”は一般に「認識」、「知識」、「見聞」と訳される。『哲学字彙』(1884:20)、『英和字彙増補』(1888:151)、『和訳字彙』(1888:141)、『和訳英字彙 第六版』(1891:159)参考。

225) 『最新心理学事典』(2013)平凡社を参考。認知心理学は、知識を獲得すること、認識することに関わる心理的過程を研究対象とする学である。英語の“cognition”は、ラテン語の“cog”(ともに)と“noscere”(知る)に由来する。

226) 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』(2014)ブリタニカ・ジャパンを参考。

例(245) 喫煙は肺がんと統計的に有意な関係があるという疫学的な研究結果に関する
 認知 (『よくわかる校長・教頭最新学校運営実務』古畑和孝 2001)

「認知」はここで「知識を得ること」を意味していると言える。例(241)の「認知の種類」は「高次の認識のタイプ」、例(242)の「社会的認知」は「人が社会からの情報や知識を得る過程」²²⁷⁾、例(243)の「認知」は「知識を得る働き」、例(244)の「認知の歪み」は「間違った認識」、例(245)の「疫学的な研究結果に関する認知」は、「疫病の流行様態を研究する学問に対する深い認識」という意味であると言われている。例文から見ると、「認知」は推理・判断などに基づいて高次の性質を知る過程²²⁸⁾を指していると考えられる。

以上、和籍系の「認知」における意味交替を表にまとめた。

表22 「認知」における和製語義の意味変遷

	意味範囲	使用時期	定着性
意①	はっきり認めること	明治～現在	定着
意②	私生子を自分の子であると認めること	明治～現在	定着
意③	知識を得る動き	昭和～現在	定着

表22のように、意味①と意味②は同様に何事を認めることを意味するが、その指示物の違いで、やはり意味的範囲の誤差があると言える。そして意味③は「認識」から派生した類義語であるが、「認識」に比べると、これを意味する「認知」は「知識をより浅く理解する」ということである。この三つの意味分野は同じく〔認識〕の小分野と、〔思考〕の大分野に分けられている²²⁹⁾。

「認知」における語の意味変化を含めて考えると、【意味①】の形成は明治初期、欧米博物学が日本社会に浸透したことによることが分かった。当時、日本国民が生物に関する認識を浸透させるため、博物学が新科目として取り扱われていた。この風潮により、「認知」が訳語として造られた。その後、西洋近代法の受容で「認知」に【意味②】を与えられ、そして昭和期に入ると、欧米から認知心理学の

227) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

228) 『広辞苑』(1978)、岩波書店

229) 『類語国語辞典』(1985)角川書店、p. 627と『デジタル類語例解辞典』(2003)小学館を参考。

伝来に伴って、【意味③】が新概念として「認知」に付与されたことが見える。また、【意味②】の誕生とともに、「認知」が名詞として用いられ始めるようになってきたことが明らかである。

4) 中国における和製漢語「認知」の受容

“認知”が中国語に受け入れられたことは、1880年代末の通俗小説から見える。当時、洋務運動²³⁰⁾の盛行で多くの訳語が宣教師らに造語されたが、“認知”のような哲学・人文科学の用語はほとんどない²³¹⁾。「洋務運動はただ表面的に近代科学・技術を受け入れようとしたに過ぎず、近代科学・技術の根底にある哲学思想や政治制度などについては、まったく翻訳されなかった」²³²⁾と評される。中国社会の近代化とともに、中国語にない和製漢語がこのようにより幅広く受容されてきた。【意味①】に関しての例を挙げると次の通りである。

例(246) 認知泰極生否，樂極生悲，周公子忽然行了幾年晦運，鬧了個心迷意亂。

(《狐狸縁全傳》醉月山人 1888)

例(247) 感覺由於刺戟而主觀上只感漠然的狀態，而不認知刺戟之性質。

(《心理学概論》魏肇基 1932)

例(248) 訓練認知英文之動詞，可將時間減省為百分之二十一。

(《學習遷用之分析的研究》杜估周 1933)

例(249) 美貌通常最快被人認知，且直接形成对人的魅力，从而往往首先导致光环作用。

(《社会心理学》1990)

例(250) 而且他近年来，比起说他是化装舞会的成员，倒不如说专门担任在其他使徒的保镖更能为人所認知。

(《灼眼的夏娜》高橋弥七郎 2002)

ここでの“認知”・“认知”は「認識すること」を意味すると思われる。例(246)の“認知泰極生否，樂極生悲²³³⁾”とは「楽しさが極限に至ると、次に来るの

230) 清朝末期(19世紀後半)、西洋近代文明の科学技術を取り入れて、国力増強を目指した運動。

231) 沈国威(2016)「漢字文化圏における近代語彙の形成と交流」『高知大学留学生教育』(10)、pp. 26-27参考。宣教師らが作った訳語は、主に数学・地理学・化学・機械・医学などの分野に含まれる。

232) 張迪(2009)「近代中国における日本書籍の翻訳と紹介——19世紀末から20世紀初頭の概況とその特徴——」『言葉と文化』(10)、p. 197

は悲しみであるということをはっきり認める」、例(247)の“不認知刺戟²³⁴⁾之性質”とは「不利な状況ということを知らない」、例(248)の“認知英文之動詞”とは「英語の動詞を認識する」、例(249)の“美貌通常最快被人認知”とは「美しい顔はよく一番早く認められる」、例(250)の“更能为人所認知”とは「人々により認められる」という意味であると思う。まとめると、例(247)と(248)の「認知」は知識を認めることを表し、他の「知識」は人間が主観的にある対象を知ることを示すと言える。

また、20世紀80年代初期、【意味③】を持つ“認知”が日本語から受容され始めた。改革開放²³⁵⁾以降、中日両国がより密接に交流し、中国語において、日本語から大量に受容されて中国語の新語となった言葉が多い²³⁶⁾。当時、情報メディアの発達とともに、「認知」などの和製新語が急速に中国社会に輸入されてきた。次は【意味③】の“認知”における例である。

例(251) 認知和理解是解决问题和克服障碍的工具，从而保证基本的需要得以满足。
(《人格心理学》陳仲庚 1986)

例(252) 通过言语、色彩、形体或音响，去理解、体验与表达个别的、具体的事物中的一般意义，以与人、社会、自然和宇宙之最一般或最本质的方面，建立认知的、道德的与审美的联系。
(《文史知識》1989)

例(253) 到了认知发展的形式运算阶段(从初中开始)，大多数学生能通过直接掌握抽象概念间的重要关系掌握新概念和获得新命题。
(《数学思想教育学》張乃達1990)

例(254) 在宏观世界的认知中，人们早已有了自己的二元论，即物质世界与精神世界的二元和社会存在与社会意识的二元。
(《社会場論》張小軍 1991)

例(255) 教育学家评价说，为了适应21世纪社会变迁的需要，人类必须“学会认知”、“学会做事”、“学会共同生活”、“学会发展”。
(《人民日報》2000)

“認知”はここで全部「知識を得る働き」を表すと考えられる。例えば例(251)

233) 『デジタル現代漢語大詞典』(2007)上海辞書出版社を参考。

234) イバラである。不利な状況を指す。参考同上。

235) 中国で1978年から実施された経済政策。

236) 齊藤佑太郎(2012)「現代中国語における日本語彙受容についての研究——改革・開放後に現れた新語に着目して」『岩大語文』(17)、p. 35

の“認知和理解是解决问题和克服障碍的工具”は「知識を得ることと物事をさとり知ることは、問題解決と障害克服のための工具である」、例(252)の“建立认知的、道德的与审美的联系”は「認知的・道徳的な考え方と、美の本質を見極めることとの繋がりを作る」、例(253)の“认知发展”は「(知識)を認識して理解することが高い段階に進むこと」、例(254)の“在宏观世界的认知中”は「巨視的世界で見える認知」、例(255)の“学会认知”は「認知ということを学習する」を意味する。つまり、ここでの“認知”は(241)～(245)の「認知」と同じく、高次的な知的過程を意味していると言われている。

以上、中国語に受容された“認知”の意味分野を表23にまとめる。

表23 “認知”における和製語義の意味変遷

	意味範囲	使用時期	定着性
意①	はっきり認めること	1880年代～現在	定着
意③	知識を得る動き	1980～現在	定着

ここで、19世紀80年代と、20世紀80年代の中日文化交流によって、【意味①】と【意味③】を機能する“認知”が次第に中国語に受け入れられるようになったことが見える。“認知”と「認知」を比較すると、前者の意味範囲がより狭いことがはっきりしているが、両語も新語として頻繁に用いられることが共通点であると言える。

5. まとめ

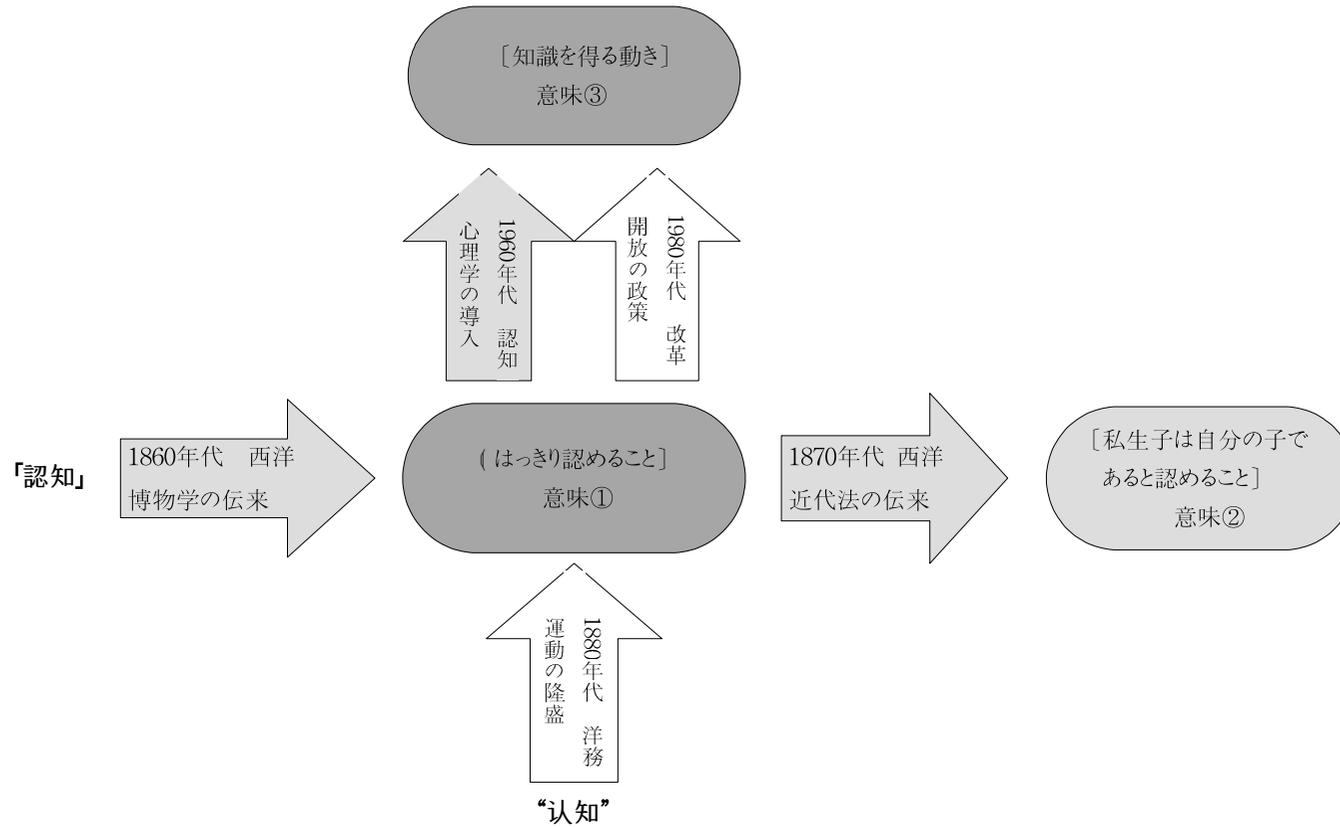
「認知」の語義変化における調査の結果を確認しつつ簡潔にまとめる。

- ① “認知”も「認知」も、和籍由来語という一重性格を持っている。
- ② 「認知」は純粹の和製漢語として三つの意味分野を動く。まず1960年代、知識をもらえらという風潮によって、「はっきり認めること」を示す「認知」が訳語として造られ、西洋博物学に関する翻訳書、『具氏博物学』(1868)に新出したことを

確認した。1980年代、中国での洋務運動の隆盛で、異文化を受け入れることが頻繁に認められた。その背景には、“認知”が哲学用語として中国語に導入されたことがある。一方、新語である「認知」は受容度が非常に高く、西洋近代法の影響により、「私生子を自分の子であると認めること」を表すものとして、法律の制定とともに現れた。「太政官第21号布告」(1973)の実施で、「私生子認知」が日本の法律に取り入れられ、そして急速に認められた。20世紀60年代、認知心理学の発展に伴って、「認知」がまた「知識を得る動き」という新概念を付与され、日本で広範囲に用いられてきた。20世紀80年代、中国語における改革開放の実施で、この分野の「認知」がまた受け入れられようになっていき、現在までも頻繁に用いられている。

③ 「認知」の意味変化の原因において、二つの面を持つと言える。一つ目は歴史的要因であり、例えば【意味①】、【意味②】と【意味③】の形成は、時代の進歩に伴う異文化、西洋博物学、西洋近代法と認知心理学の導入によるのであると考えられる。そしてもう一つは社会的要因で、【意味②】のように、まず法律の制定に関する社会団体の受容で新語として用いられ始め、その後慣用化されたり、大衆化されたりするようになったということである。意味変化の流れを図6で示す。

図6 「認知」の意味変化の原因



終章

本論文では、「思考」分野における4組の和製漢語の共時的・通時的考察を行い、意味分野に分けての語義の形成・変化を明らかにした。考察に歴史的視点を加えることにより、これらの語が中日両言語の間で形成され、受容され及び変容した背景・原因を指摘した。現在、和製漢語である「意識」、「思想」、「観念」と「認知」をめぐる意味の変遷は、上代から中世にかけての中国・インド・イランの文明の受容期、近世にかけての中国・西洋の文明の受容期、近代以降の西洋の文明の受容期に大きな影響を受けたということを確認した。これについて示した研究結果と、今後の研究方向は以下の通りである。

① 研究対象となる和製漢語について、異なった起源を持つが、歴史的要因——中国やインド、イラン、西洋における新文化の誕生と発展に伴って形成されることが共通点と見なされる。例えば、「すぐれた見解」を指す“意識”と「考えること」を指す“思想”はそれぞれに紀元前後、中国における無神論と中医学の発展に伴って生まれ、「仏の真理を観察し思念すること」を表す“観念”は、5世紀インドから大乘仏教における哲学概念を中国語に導入するために訳語として造られ、これと同じく、「はっきり認めること」を意味する「認知」は、1860年代西洋博物学に対する認識を日本国民に普及させる際、日本独自の訳語とされた。

一方、中日交流の立場に立って見ると、語源の“意識”は古典中国語にとっては周辺的な語義とされ、日本語に輸入されることがなかったが、逆にそこから派生し活躍した意味分野、「考えること」などが明治維新とともに日本語に受け入れられた。原義を表す「思想」は漢籍系を持つ漢語として、16世紀日明貿易によって日本語に受容された。仏典語である「観念」は9世紀、遣唐使の導入とともに、仏典系の漢語として用いられるようになっていき、そして「はっきり認めること」を指す“認知”は、1980年代洋務運動の風潮で、日本からきた新語として中国語に輸入された。

とにかく、言葉の起源・伝播から見ると、時代の進歩とともに、哲学や医学の分

野にある現象や概念を表現する語がない場合に、これらの語が新しいものとして創作され、自国に普及したり、他国に受容されたりするようになってきた。そこで、異文化接触による語の形成として、中国とインドとの交流によって生じた“觀念”、日本と西洋との交流によって生じた「認知」が考えられる。換言すれば、この二つの語の形成及び海外への普及は、歴史的要因によってもたらされたことがはっきりしている。

② 調査した結果、和製漢語の形成と発達に伴う意味変化は、歴史、社会、言語と心理的要因に分けることができる。その中で、歴史的要因における意味変化について、本論文ではまず、国際文化交流から生まれた多重性格を持つ和製漢語——漢籍・仏典・和籍系の“意識”、漢籍・和籍系の“思想”と仏典・和籍系の“觀念”を代表的なものとして簡単に総括する。例えば仏典語である「六識・八識の一つ」を示す“意識”は、2世紀、インド哲学における唯識論の発達とともに借入翻訳によって、新語義を持つ中国語として受容され、その後13世紀、日本における仏教文化の展開によって日本語に輸入された。18世紀、蘭学隆盛に伴い、「内感覚」を意味する「意識」が訳語造語として日本の医学分野に現れ、その後、指示物の進化によって「意識」が「内感覚」から「認識機能・知覚神経」へ転換した。そして、19世紀ドイツ觀念論と実験心理学が次々に日本に伝来したことにより、「意識」は西洋語起源の哲学用語と心理学用語とされた。また「思想」と「觀念」における和製語義、「意識的内容」の付加は、19世紀に西洋の自由主義と觀念学が日本に導入されたことによるものである。つまり、異文化交流に伴う新語義の付与に従って、「意識」が漢籍系から仏典系・和籍系へ、「思想」が漢籍系から和籍系へ、そして「觀念」が仏典系から和籍系へ変化、もしくは進化してきたと言える。一方、純粋な和製漢語である「認知」の意味変化について、1860年代西洋の認知心理学の発達に伴う「知識を得る動き」の形成と、1870年代西洋近代法の伝来に伴う「私生子は自分の子であると認めること」の形成から見える。すなわち、和籍という一重性格を持つ「認知」の多義化に影響をもたらしたのは歴史的要因——日本に西洋文明が入ってきた時、科学や制度などを受容しようとする場合に伴う思想面の言葉の変化・進化であると考えられる。

次は研究対象の意味変化における言語的要因についてである。本論文の調査では、

意味分野の転移における語義変化が一番多く、その内“意識”が「すぐれた見解」から「考えること」へ、「意識」が「ある対象に気づいている心の状態」から「社会的態度」へ、「思想」が「意識的内容」から「体系化された意識」、「傾向的な意識」へ、「観念」が「意識的内容」から「考え」へ転換する時、上下的な関係でこれらの意味分野が拡大したり、縮小したりすることが示され、また“意識”が「考えること」から「目的をもってすること」へ、「思想」が「意識的内容」から「思考の筋道」へ、「観念」が「仏の真理を観察し思念すること」から「覚悟すること・あきらめること」へ転換する時、語義のある部分では相互に重合して共通することによる意味変化が見られた。さらに、品詞転移に伴う新語義の派生もあり、それは“意識”における「目的をもってすること」と“思想”における「考えること」の名詞化である。

これらの4組の語では、社会的要因と心理的要因における意味変化は多くないが、注目すべきことである。例えば、古代中国における仏教の隆盛で、「六識や八識」を表す“意識”が17世紀頃、中医学の分野で「心の動き」として一時的に転用されたことが挙げられる。これに比べると、日本における仏教文化の受容は「観念」のように、室町時代から芸能界で受け入れられてから、「覚悟すること・あきらめること」を意味する和製語義として用いられ始め、その後慣用化されたり、普及したりし、現在まで用いられているものもある。また、「認知」のように、新たな和製語義、「私生子は自分の子であると認めること」はまず行政機関で造られ、そして一般大衆に普及していくものもあった。

ここで、まず流行語であった“意識”、「認知」と「観念」に関心を持って、そしてそれを追従する大衆心理が見える一方、語が小集団に取り入れられると意味変化が起こったが、一般的な社会に普及する、或いは普及しないという二つの現象がある。他方、“意識”における「才知」と「思想感情」、「思想」における「懐かしむこと」、「思想」における「道徳品質に関する意識」の派生は一切、人間の判断や一時的な感情、評価などの心理的連想を表現したいという希望を、存在していた意味分類、「考え」や「意識」に付与したことによると考えられる。

③ 国際文化交流による和製漢語の形成と発達をもたらした影響をめぐって、中日両言語にとって、外来語の性格を持つ漢語を自国語の言語体系に融和させること

を直接的に引き起こしたと言える。また言語自身にとって、歴史的変遷の背景下、多種多様な文化的内容を含む言葉における意味変化、意味分野の新旧交替が促され、そして変化しつつあることが分かった。

中日言語交流を土台にして、19世紀日本における漢学復活に伴って「意識」における華製語義の「考えること」と、動詞・名詞の機能を担う「気づくこと」が日本語として受容されたが、前者は古いものとして言語の近代化のために早々に消滅していき、後者は近世・近代に派生したものとして、和製語義を持つ「意識」とともに、現在日常生活から、医学、心理学、哲学の分野まで広範囲に用いられている。同時期の自由主義思想の隆盛で、「考える」を指す漢籍系の「思想」が日本語に導入された後、使用率が次第に低くなっていき、現代語の「思想」にとっては周辺的な意味分野とされている。その代わりに、西洋文明の発達で生まれた和製語義のその五つの意味分野は、現在主導的な立場に立っていると言える。一方、仏典語である「意識」と「観念」は、新旧文化の交替で現在周辺的なものとされ、日本における仏教哲学の発展や仏教会を土台として現れる。とにかく、純粋な和製漢語の「認知」は、新しいものとして頻繁に用いられることは無論であるが、多重性格を持つ「意識」、「思想」、「観念」では意味分野の上で、近世・近代に生まれた新語義——和製語義と動詞の機能を果たす漢籍系の「意識」が、現在中心的な位置に立っていることが示された。

また、漢籍系・仏典系の語義が周辺的になり、和製漢語の位置に取って代わられる現象は、和製語義を持つ中国語にも見える。それは、19世紀末から20世紀初頭、中国における戊戌の変法に伴う日本文化・西洋文化との接触下で、新概念を意味する「意識」、「思想」、「観念」を中国語に逆輸入したことと、1880年代の洋務運動と1980年代の改革解放とともに、「認知」を日本語から受容したことによるものであると考えられる。このように、「意識」、「思想」、「観念」、「認知」が中日両言語における古い意味の消滅・廃棄と新たな意味の出現・発展を明らかにした。

④ 以上、「意識」と“意识”、「思想」と“思想”、「観念」と“观念”及び「認知」と“认知”は、一語ごとに文化的・社会的背景があり、異なった変化を辿ることが分かった。それ以外、辞書のこれらの語の意味記述では、語源に関する出

典や意味範囲、意味分野別の曖昧さなどが漏れていることを指摘した。本論文は、「思考」分野の和製漢語の語義変化に関して、従来の多くの先行研究より詳しく考察してきたが、引き続き検討すべき点もある。まず、語史研究の視点に立って研究したが、語形の史的変遷における問題点はまだ課題として残されている。また「思考」分野の和製漢語には、「思惟」、「考慮」、「自覚」といった語もあり、今後これらの言葉の研究を進めたい。近・現代における和製漢語の生成と展開は、アジアの漢字文化圏において重要な意味を持ち、今後の課題として、「思考」分野の和製漢語が異文化交流の背景下、どのように韓国語やベトナム語などに転換したのかを検証していきたい。

参考文献

【日本語の単行本】

- 沖森卓也 (2010) 『はじめて読む日本語の歴史』 べれ出版
_____ (2011) 『図解日本の語彙』 三省堂
笠原祥士郎 (2005) 『王充の立場 序説』 『北陸大学紀要』 (29)
工藤美和子 (2008) 『平安期の願文と仏教的世界観』 思文閣出版
国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』 大修館書店
倉島節尚 (2008) 『日本語辞書学への序章』 大正大学出版会
倉又浩一 (1894) 『言語学入門』 大修館書店
小松邦彰他 (2015) 『法華経と日蓮』 春秋社
阪倉篤義 (1980) 『講座国語史3 語彙史』 大修館書店
佐藤喜代治 (1979) 『日本の漢語—その源流と変遷』 角川書店
斎藤倫明 (2002) 『朝倉日本語講座 語彙・意味』、朝倉書店
佐藤亨 (1980) 『近世語彙の歴史的研究』 桜楓社
小学館編集部 (2014) 『日本大百科全書(ニッポニカ)』、小学館
多川俊映 (2013) 『唯識入門』 春秋社
蜂谷清人 (1995) 『狂言の国語史的研究—流動の諸相—』 明治書院
堀井令以知 (1988) 『語源大辞典』 東京堂
前田富祺 (1985) 『国語語彙史研究』 明治書院
松井利彦 (1990) 『近代漢語辞書の成立と展開』 三省堂
森岡健二他 (1982) 『講座日本語学4 語彙史』、明治書院
山口堯二 (2005) 『日本語学入門—しくみと成り立ち』 昭和堂
山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』 賓文館
吉田金彦 (1976) 『日本語語源学の方法』 大修館書店
米川明彦 (1989) 『新語と流行語』 南雲堂

【日本語の論文・雑誌】

- 青木敦(1990) 「末法世前夜の文学—平安中期の仏教説話における「念仏往生譚」の様相—(三)」『跡見学園短期大学紀要』(26)
- 栗島記子(1966) 「訳語の研究——西周を中心に」『日本文学』(27)
- 荒川清秀(2017) 「孫建軍著 『近代日本語の起源——幕末明治初期につくられた新漢語——』」『日本語の研究』(13)
- 磯野直秀(2004) 「江戸博物誌を顧みる」『参考書誌研究』(61)
- 石井雅巳(2018) 「翻訳と日本語——西周の言語哲学——」『北東アジア研究』(29)
- 石橋義秀(2011) 「平安仏教から鎌倉仏教への展開 : 『今昔物語集』の仏教説話を通して(第三九回光華講座)」『真宗文化 : 真宗文化研究所年報』(20)
- 市川真矢(2014) 「英語における転換についての一考察:過去30年の「動詞化された名詞」から」『常葉大学短期大学部紀要』(45)
- 宇野美恵子(2008) 「西周の教育思想における東西思想の出会い——沼津兵学校時代を中心に——」『北東アジア研究』3(19)
- 王財源(2020) 「東洋医学における形神観について——こころと身体——」『国際フォーラム 人文学論集』38(1)
- 王曉雨(2015) 「近代日中における翻訳事業と思想受容——「自由」を事例として」『関西大学東西学術研究所紀要』(48)
- 太田久紀(1972) 「日本唯識研究——『本文抄』と『同学抄』——」『印度学仏教学研究』(40)
- 龜山朗(1980) 「漢魏詩における寓意的自然描写:曹植「吁嗟篇」を中心に」『中国文学報』(31)
- 河西章(1962) 「マルクス主義哲学における「意識」の意義について: 唯物論的心理学の出発点についての」『北海道大学人文科学論集』(1)
- 柏谷嘉弘(1982) 「漢語の変遷」『講座日本語学4 語彙史』明治書院
- 小泉仰(1970) 「西周の『生性発蘊』とコントの人間性論:資料としての検討」『哲学』(56)
- 胡新祥(2018) 「中日近代新漢語についての研究——仏教由来漢語を中心に」立教大学学術リポジトリ
- 佐藤喜代治(1982) 「日本語の歴史」『講座日本語学4 語彙史』明治書院

- 齊藤佑太郎(2012) 「現代中国語における日本語語彙受容についての研究——改革・開放後に現れた新語に着目して」 『岩大語文』 (17)
- 清水稔(1995) 「中国人留学生と日本の近代」 『佛教大学総合研究所紀要』 1995(1)
- 沈国威(2016) 「漢字文化圏における近代語彙の形成と交流」 『高知大学留学生教育』 (10)
- 秦春芳(2010) 「『実学報』に見える近代中国語の日本漢字語借用」 『広島大学国語国文学会』 (205)
- 謝蘇杭(2019) 「近世本草学の「実学」の基盤」 『東アジア「近世」比較社会史研究その2』
- 朱京偉(2002) 「明治期における近代哲学用語の成立： 哲学辞典類による検証」 『日本語科学』 (12)
- _____ (2005) 「明治初期以降の哲学と論理学の新出語」 『日本語科学』 (18)
- 蔣海波(2013) 「『東亜報』に関する初歩的研究—近代日中「思想連鎖」の先陣として—」、『現代中国研究』 (32)
- 菅野幸恵(2007) 「明治・大正期の日本における西洋の心理学の受容と展開」 『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』 (15)
- 全亨式(1999) 「中世語の史的研究—大蔵虎明本狂言集の漢語を中心に—」
- 武内孝善(2011) 「安史の乱・薬子の変と密教」 『京都・宗教論叢』 (6)
- 竹村牧男 (1983) 「『大乘起信論』の心識説について」 『印度学仏教学研究』 (62)、p. 807
- 仲玉花(2017) 「梁啓超の翻訳活動について——1900年前後の翻訳活動を中心に——」 『或問』 (32)
- 張迪(2009) 「近代中国におけう日本書籍の翻訳と紹介——19世紀末から20世紀初頭の概況とその特徴——」 『言葉と文化』 (10)
- 鶴浩一(2013) 「平安時代の宮中真言院について」 『高野山大学大学院紀要』 (13)
- 手島邦男(2001) 「西周の訳語の研究」 『東北大学紀要』 (129)
- 寅野遼(2013) 「日本における哲学——西周による哲学の受容を手がかりに——」 『東洋大学大学院紀要』
- 西康友(2005) 「インド思想の心—インド思想の源泉」 『中央学術研究所紀要』

(34)

- 拝島大師(2018) 「慈覚大師円仁讃仰「入唐求法巡礼行記」研究—その29—」
- 浜中淑彦(1985) 「『解体新書』の訳語「意識」をめぐって—東西医学における「意識」概念変遷の一側面」 『日本医史学雑誌』 31(2)
- 暴凶亜(2019) 「日中双方からみた勘合貿易—国益と互惠性」 『KGU比較文化論集』 (10)
- 広松涉他(1988) 『岩波哲学・思想事典』、岩波書店
- 福島邦道(1977) 『日本語講座第六巻 日本語の歴史』 大修館書店
- 郝曉卿(2013) 「『黄帝内経』の叡智—世界記憶遺産の現代的な意義—」 『福岡県立大学人間社会学部紀要』 22(2)
- 方光鋭(2009) 「明治期における国語国字問題と日本人の漢学観」 『言葉と文化』
- 村上一博(1996) 「明治・大正期の私生子認知請求」 『明治大学社会科学研究所紀要』 35(1)
- 山崎耕一(1994) 「啓蒙思想とフランス革命 (1)最近の研究史から」 『武蔵大学人文学会雑誌』 25(4)
- 李セボン (2012) 「阪谷素の「民権」理解—「学業」による「民権」確立の道—」 『アジア地域文化研究』 (8)
- 渡辺俊彦 (2014) 「思想としての唯識論—最澄と徳一の論争—」 『中央大学社会科学研究所年報』 (19)

【日本語の参考辞書】

- 井上哲次郎(1884) 『哲学字彙』、東洋館
- イーストレーキ他(1888) 『和訳字彙』、三省堂
- 岩崎民平(1956) 『新簡約英和辞典』、研究社辞書部
- 上野善道他(1989) 『Web版 新明解国語辞典』、三省堂
- 大槻文彦(1969) 『新言海』、日本書院
- _____ (1980) 『大言海』、富山房
- 大野晋他(1985) 『類語国語辞典』、角川書店
- 加藤周一(2000) 『Web版 世界大百科事典』、平凡社

金田一春彦(1977) 『新明解古語辞典』、三省堂
 _____他(1988) 『Web版 学研国語大辞典』、学研プラス
 _____他(1988) 『学研国語大辞典』、学習研究社
 小久保崇明(2014) 『学研全訳古語辞典』、学研プラス
 国語学会(1980) 『国語学大辞典』、東京堂
 柴田武他(2003) 『類語大辞典』、講談社
 柴田昌吉他(1888) 『英和字彙増補』、桃林堂
 島田豊(1891) 『和訳英字彙 第六版』、大倉書店
 小学館辞典編集部(2003) 『デジタル類語例解辞典』、小学館
 尚学図書(1989) 『日本国語大辞典』、小学館
 浄土宗大辞典編纂委員会(1943) 『Web版 新纂浄土宗大辞典』、浄土宗
 新村出(1978) 『広辞苑』、岩波書店
 創価学会教学部(1986) 『仏教哲学大辞典』、聖教新聞社
 フランク・B. ギブニー(2014) 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』、ブリタ
 ニカ・ジャパン
 藤堂明保(1982) 『学研漢和大辞典』、学習研究社
 藤永保(2013) 『最新心理学事典』、平凡社
 松村明(2020) 『デジタル大辞泉』、小学館
 諸橋轍次(1984) 『大漢和辞典』、大修館書店
 山田俊雄(1977) 『新潮国語辞典』、新潮社

【中国語の単行本】

沈国威(1994) 『近代日中語彙交流史』 笠間書院

【中国語の論文・雑誌】

周逸仙(2015) 「『論衡』の「実知」・「知実」から見えた理性主義について」
 『課程教材教学研究：小教研究』
 陳霞(2020) 「道家から道教まで——『老子想尔注』における解説」 『文哲史』(5)
 方冰冰(2015) 「“思想”の語義の変化」 『西江月』

【中国語の参考辞書】

- 何九盈他(2015) 『辞源』、商務印書館
- 漢語大詞典編輯委員会他(2011) 『漢語大詞典』、上海辞書出版社
- 阮智富他(2007) 『デジタル現代漢語大詞典』、上海辞書出版社
- 古代漢語編集委員会(2000) 『古代漢語詞典』、商務印書館
- 吳汝鈞(2011) 『仏教大辞典』、商務印書館
- 慈怡(2001) 『仏光大辞典』、北京図書館出版社
- 夏征農(1999) 『辞海』、上海辞書出版社
- 香港中国語文学会(2001) 『近現代漢語新詞詞源詞典』、世紀出版集團、漢語大詞典出版社
- 庄春江居士(2013) 『阿含辞典 庄春江居士編』、甘露道出版社
- 大辞海編集委員会(2016) 『大辞海』、上海辞書出版社
- 中国大辞典編集委員会(2015) 『Web版国語辞典』、商務印書館
- 中国社会科学院言語研究所詞典編算室(2016) 『現代漢語詞典』、商務印書館
- 丁福保(2011) 『丁福保仏学大詞典』、中国書店
- 楊卓(2008) 『仏学次第統編』、弘華社
- 李達仁他(1999) 『漢語新詞語詞典』、商務印書館
- 劉正炎他(1985) 『漢語外来語詞典』、商務印書館、上海辞書出版社

【ウェブサイト】

- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』
- http://www.ziyexing.com/files-5/lunheng/lunheng_78.htm
- https://www.tamagawa.jp/campus/museum/info/pdf/detail_14904-pdf-01.pdf
- <http://rekisitanbou.seesaa.net/article/274198815.html>
- <https://ameblo.jp/koutoku17/entry-12656405619.html>
- <http://www.mikkyo21f.gr.jp/kukai-ronyu/nagasawa/new-55.html>
- <https://www.pinshiwen.com/zhiyan/shenyin/2019051234179.html>
- http://www.360doc.com/content/20/0927/21/31920670_937899833.shtml
- <https://www.my2852.com/ls/nqs9/027.html>

http://www.horakuji.com/BuddhaSasana/Ekayana/roppourai_kyou/translated.htm

1

<要 旨>

思考分野の和製漢語の研究
—中日漢語の意味の変遷を中心に—

李悦揚

済州大学校 大学院 日語日文学科

指導教授 李昌益

言葉の出自によって、和製漢語を、日本で独自に造った純粹の和製漢語、漢籍より由来したもの、仏典より由来したものと3分類にできることが指摘されてきた。和製漢語の意味変化はその出自に連なっていることで重要な課題として提起されてきたが、それらの論考は主に和製漢語における体系的な研究を中心としたものであり、語史研究の立場で個語の意味変化に焦点を当てた考察は少ない。

本論文は、幕末以降の和製漢語を研究対象にし、語の意味分野の変遷という視点から「思考」分野の代表的な新語、「意識」、「思想」、「観念」、「認知」を取り出し、和製漢語の性格は一様ではなく、純粹の和製漢語の他に、漢籍や仏典から伝わったものもあると証明した。さらに、多重性格や一重性格を持つ和製漢語が形成された歴史的過程とその原因を論述し、時代ごとにおける異文化交流が語義の形成・変化・伝播に与えた影響や、言語自体に内在する要因がもたらした意味変化などを明らかにした。これらは語義変化の分析にとどまらず、その背景にある文明・科学・制度などの変化を再検討した上で考察したものである。

和製漢語の「意識」は漢籍・仏典・和籍という三重の性格を持つことになったのは、日本が中国、インド、西洋の文明を受容したことによるのであると確認された。まず儒教哲学における無神論の発展とともに、「すぐれた見解」を意味する“意識”が形成され、そして言語的要因で語の意味分野が拡大したり、転換したりし、原義から派生した「考えること」と「気づくこと」が19世紀の文明開化に伴って、日本語に導入された漢籍系の意味分類とされた。また、インドにおける仏教哲

学の宣伝で、「六識・八識の一つ」を指す“意識”が生じ、遣唐使・遣隋使の導入で仏典系のものとして日本語に受容された後、言語における外的要因、西洋文明の隆盛で語義変化をもたらした。それは西洋における医学・心理学・哲学が日本に入ってきた時、日本語にない新概念を表すために造った意味範囲である。その背景に、和製語義の「内感覚」、「ある対象に気づいている心の状態」、「心理作用が起きた状態」の誕生とともに、「意識」が和製漢語になって用いられるようになったことを明らかにした。そこで、意味分野の上で語義が転移し、「ある社会的態度」が「ある対象に気づいている心の状態」から分化され、新概念として急速に認められた。

「思想」が和製漢語になる以前、紀元前から「考えること」を指すものとして中医学や養生学の分野で用いられ、近世から品詞派生に伴う語義変化で、「考え」を意味する名詞になった。19世紀西洋の自由主義の思潮が日本に流入し、この二つの意味分類を持つ「思想」が漢籍系のものとして日本語に受け入れられ、それと同時に、西洋哲学思想を普及するために、「意識的内容」という概念が「思想」に与えられ、和籍系の原義として重要な役割を果たしていたことを指摘した。「意識的内容」から派生した和製語義について、まず言語的要因による語義の拡大や重なり合いで、「体系化された意識」や「傾向的な意識」、「思考の筋道」が誕生し、そして心理的要因で、人間の主観的な判断・評価が「思想」に付与された後、「道徳品質に関する意識」という語義が形成されてきたことを解説した。

「観念」は仏教系・和製系の二重性格を持つものとして、仏教文化の受容が日本社会及び日本語の言語体系に及ぼした影響が顕著に表れていたことを確認した。

「観念」は最初に「仏の真理を観察し思念すること」を意味するものとして、仏典の伝来とともに日本語に受容され、その後仏教文化の隆盛に伴って、元来上流知識人に用いられていた「観念」が次第に一般大衆に浸透していった。16世紀からは「覚悟すること」を意味する和製漢語として日本の芸能圏に受け入れられ始め、社会に広範囲に普及されてから、19世紀西洋観念学の伝来とともに、また「意識的内容」を付与された和製漢語になっていき、そして言語的要因でより広い意味分野を機能するもの、「考え」を指す語とされた。

純粋な和製漢語である「認知」は、日本社会における近・現代化とともに、何度

も西洋から導入された新概念を表現するために和製語義を付与されてきたことを見極めた。明治初期、旧来の本草学が西洋博物学への変遷に伴って、「認知」が「はっきり認めること」を指す新造語として生まれた。その後、西洋近代法の導入で、「私生子は自分の子であると認めること」を意味する語として、日本における法律文献に用いられ、そして1980年代、西洋の認知心理学の発展とともに、「認知」は「知識を得る働き」という概念を与えられることによって、再び新語になった。つまり、この三つの意味分野は全て歴史的要因で形成されたということを明らかにした。

中日言語交流の視点から考えると、漢籍や仏典の流入が日本語の造語にもたらした影響は見えたと、和製漢語となった「意識」、「思想」、「観念」、「認知」が中国語の新語にとっても多大な影響を及ぼしたと言える。西洋新概念を機能する“意識”、“思想”、“観念”は多義的な新語として、19世紀末20世紀初期にかけて、中国で実行された戊戌の変法を背景にして中国語に受容されてきた。また、動詞の“認知”は1880年代、明治維新をモデルとして行われた洋務運動をきっかけに中国語に導入され、そして1980年代の改革解放の実施によって、哲学用語である“認知”がまた中国語として認められた。時代の変遷に伴う言語の新旧交替によって、これらの和製漢語は現在、中日両言語にとっても中心的な位置を占めていることが分かった。このように、和製漢語の意味の変遷から見えた旧語の形成・発展や衰退・消滅及び新語の形成と発達は、主にアジア圏の異文化交流と東西の異文化交流によるものであることがはっきり見られた。